
迷子の魔導書と王都の魔導師

藤本 天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子の魔導書と王都の魔導師

【Nコード】

N5970S

【作者名】

藤本 天

【あらすじ】

シオン大陸のザラート王国で最大の学術と学問、魔導の街チユーリ。

蔵書量最大にして希少な魔導書まで有する王立学院図書館。

そこにある日王都から魔導師がやってくる。

この図書館にある魔導書が入り込んでしまったらしい、……だが。

え？どこに行ったかわからない？魔導書のくせに迷子！？

王立学院図書館の司書であるユーリは迷子になった魔導書を探せるのか？

序章（前書き）

見切り発車もいいところ。超無謀投稿です。

一応、前作短編の前の出会い編？

前作短編読まなくても大丈夫です。

序章

とある図書館の七不思議

この世界には五つの大陸がある。

その中のシオン大陸上にザラート王国という国がある。大国というにはいささか頼りなく、小国というには大きすぎる中堅どころのま
あ、普通の国である。

中堅どころのこの国はそれなりに活気があり、地方ごとに特産や名物がある。

曰く

山間の地方では山脈の恵みを受けた織物や革製品、海に面したあたりでは新鮮な魚介類、なだらかな平野部では温暖な気候ですくすく育つ農作物と王都を抱く王国の中心という矜持。そして、魔導と学問。

魔導と学問が特産と胸を張る街、というか土地がザラート王国にはある。

シオン大陸という種からによつきと根を出したかのような形をしたスプート半島と呼ばれる場所にチューリという街がある。

その街は魔導と学問にとても広く門を開けており、シオン大陸でも一二を争うほどの知識の宝庫である。

それ故に小中高等学校、大学校、美術・博物館、が数多く街には存在し、また図書館も多い。

その中でも『学院』の愛称で呼ばれるのはセフィールド学院。

初等部から高等部、大学院まで有するチューリ最大の学校である。

その学校のやたらと広大な土地の中に『知識の塔』と呼ばれる王立学院図書館がある。

ザラート国建国以前よりあるその王立学院図書館は利用者であるセ

フィールド学院や地元市民から愛されている半面、微妙に怖がられている。

と、いうより奇っ怪な噂が絶えない。

曰く

- 1 誰もいないはずの廊下から泣き声やうめき声がする。
- 2 一人で図書を探していると奇妙な話声が聞こえる。
- 3 夕暮れ時に二階の階段の踊り場にある大鏡に髪の毛の長い女が写る。
- 4 学習室で居眠りをすると双頭の鷲に狙われる。
- 5 誰も知らない秘密の部屋がある。
- 6 閉館を過ぎても図書館に居座ると図書館の中に取り込まれる。
- 7 夜中になると屋根に人魂が宿りつき、歌を歌う。
……………など、など。

そんな噂がはびこる王立学院図書館は今日も知識を求める人々のために知識を集め、門を開く。

序章（後書き）

プロットも考えずに出しちゃいました（てへっ）
無事終われるかな。

1P 始まりは蜜のお誘い（前書き）

主人公の過去バナです。

読まなくても、多分、大丈夫？

1 P 始まりは蜜のお誘い

あの日、あたしは交通事故に遭った。

雨のせいですごく見通しが悪くて、寒かった。日は落ちていないはずなのにすごく暗くて、早く帰りたくて点滅している信号を見ながら横断歩道を走っていたら、いきなり横からすごい衝撃が来て、車だ、と思った時にはもう目の前が真っ暗で、どこかでどすんという低い音を聞いた。

そして、気づいたら鏡の前でちょこんと座っている女の赤ちゃんがいた。

その赤ちゃんが自分ということに気づくのに数分、捕まり立ちから脱出できた頃によくやく現実を認めた。

と、いうより開き直って第二の人生を歩むことにしたのだ。

さて、元地球産日本人であるあたし、柴崎 由利は現在ユーリ・トレス・マルグリットといい、ザラート王国のマルグリット伯爵家の第3子にして長女をやっている。

マルグリット家には父一人、母一人、王都で何かしているらしい伯父と兄二人、弟二人と妹二人の大家族。

日本では一人っ子だったからにぎやかで楽しかったのだが、今は親元を離れて学問と魔導の街チューリにいる。

身元確認は厳重だが、学問を志す者に関して懐が広いチューリは、学力と学びたい分野に応じて学校が選べる。つまり、学ぶ気持ちとある程度の読み書きができれば入学に貴賤が問われない。

学費だつて奨学金制度があるし、学生用のアルバイトだつてある。

それを知ったあたしはがんばって勉強して入学金が一番安くて学生用のアルバイトと奨学金が充実している学校、セフィールド学術院、通称『学院』に入学した。

爵位は『じー様のじー様がたまたま何かの拍子に王様助けて、くれるって言うから貰った』程度のものだし、優秀な兄二人と弟妹には学費がかかるし、育ち盛りの弟、一番下の妹は体が弱いしで、家計が火に包まれるのは遅くないことが目に見えていたのだ。そのため、あたしは初等部入学とともにアルバイトを始めた。

『知識の塔』、『賢者の迷宮』と呼ばれるセフィールド学院敷地内にある王立学院図書館の見習い司書として。仕事は覚えることが多く、大変だったけれど、それはまあ置いといて。

働き始めてしばらくしてあたしが住んでいたアパートがなくなった。大家のおばあちゃんがバカンスで息子夫婦のもとに行っている間にぽっくり天に召されたのだ。

お空のお星になった働き者で優しいおばあちゃんとは違い、息子夫婦は守銭奴のような人たちで、家賃を安くしてもらっていたお金のない店子たちを追い出した。

折しも入学前の入居ラッシュの時期、仕送りが乏しいあたしは住む場所が見つからず、仕方なく図書館に逃げ込んだ。

司書見習い、つまり下っ端のあたしは何かと年上の司書たちに使われることが多くて、図書館中を走り回るうちにちょっとした隠し部屋を見つけていて、とりあえずそこで二三日暮した。

ご飯は学食で食べればよし、お風呂はちょっと物足りないけど運動系のクラブ活動をしている学生用にあるシャワールームを使えばいい。

そんな風に図書館を中心に暮していると、ふと探検心がわいた。

『ここ以外にも隠し部屋があるんじゃない?』

その予想はどんぴしゃで大当たりだった。

司書たちや利用者がいなくなるのを見計らって図書館を探検しまわるうちに最上階に植物園があることを発見した。

そのうえ、植物園の奥には丸太を組んだカントリー調のログハウスまであった。

ログハウスはちょっと荒れていたし、植物園は雑草でジャングルじみていたけれど、広いし綺麗だし、何よりログハウスには猫足の白い湯船があったのだ。

あたしはそれを見て決意した。ここに住むことを。

そして、住み始めて一週間。

「あらあ？あなた、見習い司書のユーリさん？」

おっとり口調と垂れ気味のエメラルドみたいな目と目尻の泣きぼくろが実に色っぽい、金髪巨乳の王立学院図書館の女館長エリアーゼさんに見つかった。

「ん〜、もしかして、あなた。ここに住んでますう？」

あたしはその場で正座してここに至るまでの経緯を語り、アパートが見つかるまでここに泊めて欲しいと訴えた。

うん、今なら言える。

もし、何かの拍子にあの日に戻れるなら、あたしは自分に涙ながらに訴えただろう『早まるな』と。

しかし、純真無垢だったあの頃には帰れない。

「別に、あなたを叱りませんよお？」

エリアーゼが今すぐ出て行けと怒鳴るに違いないと身を縮めていたあたしはにっこりと微笑するエリアーゼにきよとんと眼を丸くした。

「ここに住んでもいいということですよ？」

喜びに顔をほころばせるあたしに、エリアーゼはにっこりと告げた。

「ただし、条件付きです」

そう、世の中うまい話には猛毒が仕込まれているのだ。

1 P 始まりは蜜のお誘い（後書き）

はい。ユーリさん捕獲されました。

いつか短編でユーリさんの司書見習い時代書く？かな？

2P 図書館に行く

…… コローン、カラーン

最後の授業の終了を告げる鐘の音にユーリはふっと肩から気を抜いた。
がたがたと椅子と机が動く音とざわざわと生徒たちのおしゃべりが波のように湧き上がる。

「ユーリ!!」

その波の中に耳慣れた声を聞いてユーリはふと顔をあげる。

「アリナ?」

きつく波打つ金色の髪をさらりとゆらし、意志の強そうな青の瞳をキラキラさせてこちらに近づいてくる少女をユーリは目を丸くして迎える。

「どしたの?魔導科から普通科にわざわざ来て」

きりつと姿勢よくユーリの前に立ちはだかったアリナをユーリはまじまじと見る。

セフィールド学院の生徒であることを示す、制服はユーリが纏う物と一緒に、枝分かれする巨木に巻き付いた蛇を描くエンブレムの台座の色が違う。

ユーリのエンブレムの色が緑であれば、アリナのエンブレムは紫。前者はセフィールド学院の普通科、後者はセフィールド学院の魔導科の生徒であると示している。

セフィールド学院は十歳で初等科に入学した後、三年間は初等科で基礎的な学問と礼儀作法を学ぶ。

その後、自分の学びたい分野や学力に応じて普通科、魔導科、医学科、騎士科、芸術科に分かれる。

学科別に分かれた後は、それぞれ興味のある科目を選択して卒業を目指す。

ユーリが選んだのはセフィールド学院で最も在籍数が多い普通科。一方、立ち姿に気品があり、凛とした顔立ちのアリナは最も在籍数が少なく才能と努力がなければ入れない、セフィールド学院のエリート中のエリートである魔導科の生徒。

セフィールド学院の魔導科は魔導科の生徒専用の寮があり、学院からちょっと独立している挙句、騎士科の校舎と医学科の校舎、さらに広い中庭を抜けてようやく普通科に辿り着けるが、在籍数と学部数がやたらめったら多い普通科、もちろん校舎も最大。

よって、ユーリはこの親しくなった友人とは広い中庭の中心あたりにある王立学院図書館で会うことにしている。

それなのに、どうしたことだろう？

ユーリが首をかしげると、いささかぐったりしたようにアリナは溜息をつく。

「ええ、こんなに遠いなんて思いませんでしたわ。普通科の学部数の多さは知っていましたが、こんなに校舎が広いなんて」

「だから、図書館で待ってたらいいのに」

ユーリが呆れたように歩きだすとアリナはきつとユーリを見据えた。

「いいえ！！最新の『ルキアルレスの占星魔導』が蔵書されたと聞いては待っていられません！！ユーリ！！きちんと取り置きはしてあるんでしょっね！？」

美少女の気迫にユーリはごくごくと水飲み鳥のおもちゃのように首を振った。

「ああん、ルキアルレス先生の占星魔導書。読まずして星が語れますか？いいえ、語れませんわ。星占の神秘をぜひともわたくしも身につけたいものですわ」

うつとりと酔つようにあらぬ空間を見つめるアリナからユーリは目をそらす。

『ああん、なんだこの変な本は！！』

『星の解釈が根本的に間違っています。え？ちょ、西と東が間違ってる！！』

『え？これが魔導書？ご冗談でしょう？』

『ちよつとおく、ここにこんな置く気なの？私達の価値まで落とす気？』

『あの、この本の貸し出しは控えたほうが……、図書館の品位が損なわれますよ？』

『おいおいおい、間違ってもわしの側にそれを置くなよ！！』

ぎゃいぎゃい、やいのやいのと我儘たつぷりに魔導書の蔵書を嫌がる声が脳裏によぎる。

貸し出し予約が付いたのは良かったのか、悪かったのか。

「……………あはははは、死ぬっほどこきおるされてたな、あの魔導書」

「ユーリ？何か言いました？」

はっと顔をあげると数メートル先でキョトンとしているアリナ。

「ううん、何にもない。あは、早く本引きと……じゃない。取りに行かないと!!」

普通科の大玄関を抜け、外に出ると真つ青な空と柔らかな緑に包まれた木々、青い芝生と綺麗な花壇、煉瓦で舗装された馬車道がある。広い学院内を徒歩で進めば日が暮れる。別の学部に行くときは馬車を使ったほうが便利だし早い。

「あ、ラッキー!!今日は魔導馬車が来てる!!」

馬がいるはずの場所に馬はなく、日本に居た時に観光地で見た人力車のような形をした乗り物がバス停ならぬ馬車停に止まっている。人力車の前に立つと、ことんと踏み台が下りてきた。

それを踏んで乗り、二人が座ると同時に人力車のような乗り物はひとりでに動き出した。

「相変わらず、惚れ惚れするほどの魔導構造原理ですわ。馬車のように煩くもないですし、静かで」

馬車の壁に書き込まれた魔導文字や魔導陣をアリナはしげしげと見つめる。

一方、ユーリは中庭の庭園の花々やのどかに空を舞う鳥、のんびりと庭園を散策する生徒を眺めながら、この魔導馬車の苦い思い出を口にする。

「でもさ、重量制限が厳しいのが難だよな」

この馬車は魔導で動く分、あまり重いものは運べないらしい。ユーリは何度か本の運搬にこの馬車を使おうとしたが、重量オーバーで普通の馬車を待ち続けたことが何度もあった。

「目的地にまつすぐ進んでくれるのは画期的でしょう?」

「まあ、そうなんだけど」

ふつと二人の頭上に濃い色の影が差す。

『知識の塔』、『賢者の迷宮』と呼ばれる巨大な塔がユーリ達の眼前に迫る。

「毎度のことですけど。この塔の前に立つと厳粛な気分になりますわ」

「そうだね」

塔をぐるりと囲う蔦に覆われた赤レンガの塀、卒業生が作ったといわれる鉄の門扉は美しい文様を描いて知識を求めて訪れた者を出迎える。

門を抜けるとささやかな庭園が今の季節によく咲くフォールの薄紫色の花を際立たせ、来訪者をもてなす。

遠い昔、このあたりで最も権威を振るっていた王家が自分たちに反

抗する反逆者を一生涯閉じ込めておくために作った牢獄だったという謂れを持つ王立学院図書館。

大きな入り口は立派な木材と鋼鉄製の巨大な鋸が打たれ、その重厚さを見せつけている。

しかし、市民が利用するのにいちいちこのどデカイ扉を開けるのは面倒くさいし無駄な労働を司書に強いるわけにいかないので百年くらい前に扉に新しい扉を作り、ユーリが入学する前に行われたという大改修の時に新しい扉はおしゃれな回転ドアに変わった。

回転ドアをくぐった先は広々とした大ホール。

チューリ一番の学校内にある、そして国一番の図書館である王立学院図書館に恥じない気品と豪華さと新しさを取り入れた、ゆったりとした空間だ。

談話室としても使われる大ホールのソファはもうすでに生徒や市民、観光客が集まって各々ゆったりとくつろいでいる。

大ホールの大階段の側には回転ドアが三つ並んでいる。

その一つをユーリは潜り抜けると、古い紙とインクの匂いが出迎えた。

大ホールの温かな喧騒など届かない静寂と声をひそめた話し声、紙をめくる音と高い天井を覆い尽くすほどの書架が並んでいる。

ユーリにとって馴染みの深い、一般図書館の光景だ。

「ユーリ！ちょっと来て！！」

名を呼ばれたユーリは何事かと振り返る。

壁際に半円状にオーク材のカウンターがあり、一段ほど低くなっているそこには司書たちがいて、働いている。

その中でユーリに向かって手招きをしている鳶色の髪の女性がいた。

「こんにちは、リリースさん」

柔和そうな笑みを浮かべると目尻に綺麗なしわが浮かぶ彼女はユーリの仕事仲間で一番最初にお世話になった女性。

優しい笑顔を浮かべたリリースはユーリの肩に手を置くとアリナに向き合った。

「突然で悪いんだけど、ちょっとユーリを連れていくわね？あなたの図書の検索は私が責任もってさせてもらうから」

「え？」

キョトンとした顔のアリナと共にユーリも驚く。

『館長が呼んでるの』

ひそつと耳打ちされた言葉を聞いてユーリは神妙にうなづく。

「ごめん。アリナ、取り置きしてある本はカード見せたら渡してもらえるから」

「え、ええ。構わないけれど……」

ちらりとリリースを見上げたアリナに彼女は三児の母の母性全開の笑顔を見せた。

「そちらは、魔導科の子ね？ようこそ、王立学院図書館へ。私は図書館の案内・受付担当司書のリリース・サラダよ」

「アリナ・ユニ＝セイス・ヴィ・エリメルバですわ」

よろしくと握手をする二人に謝り、ユーリはカウンター内に入り、司書と図書館関係者のみしか入れないバックヤードに足を向ける。

バックヤードのカウンター業務用の部屋を抜け、廊下を歩いていると前から本が詰まったカートを押している男の人に会った。

「こんにちは、ロランさん」

「よう、ユーリ」

「これ、全部破損した本なんですか？」

「ああ。つたく、骨が折れるぜ。受け取りと保管業務の奴らさぼりやがったらしい」

ユーリの先輩司書のロラン・カイロープは破損した本の修繕がうまい司書だ。

しかし、これだけの量をこなすのは彼も久しぶりなのかうんざりした表情でぼやく。

「まあ、罰として地下の大倉庫の大掃除をさせるらしい。さすがにギズーノン爺さんも怒ったらしくてな」

「うわあ」

ギズーノンは、見た目は好々爺としているが齡六十越えにしてユーリよりも強靱な肉体と怪力を誇る司書である。

普段は日向ぼっこをしながら孫が遊ぶのを見守る優しいおじいちゃ

んのような風貌なのに怒ると鬼と化す。

その迫力は自分が怒られているわけではないのに思わず土下座したくなるくらい。

そして、地下の大倉庫。

司書でさえ迷子になるほど広大にして大量の本を保管している大倉庫は普通の掃除でさえ重労働なのに、大掃除となると大変で済まされない。きつと終わったところには灰になっている。

ロランと別れ、ユーリは『館長室』と書かれたプレートが付いた扉の前に立つ。

そこで深呼吸をして手を組んだ。

（ああ、どうか。おかしな部屋へのお遣いじゃありませんように。特級危険魔導書の部屋の掃除じゃありませんように、ええと。あとは、あとは……）

居るかどうかわからない神様にお祈りをユーリはしながら、過去の悪夢がフィードバックしてうんざりしていた。

このまま回れ右ができるなら、是非そうしたい。

しかし、ユーリにはそうできない理由がある。

「ユーリさん？そこにいるんですかあ？」

チヨコレート色の扉の向こうからおっとりとした声がユーリを呼ぶ。

「……………はい。失礼します」

ユーリは覚悟を決めて扉に手をかけた。

扉を開けた先には執務用の大きな机と資料を置いておくための本棚、やわらかそうなソファと低いテーブル。低いテーブルの上には小さな花を生けたカップが可憐にテーブルを飾っている。金髪を綺麗に纏め上げ、エメラルドのような瞳をもつ女性がソファにゆったりと座っていた。

「こんにちは。ユーリさん」

「こんにちはエリアーゼ館長」

座るよう促されたユーリはエリアーゼの示したソファに座る。

エリアーゼ・ルナ・レーヴェルはこの王立学院図書館の女性館長であり、ユーリの大家でもある。

ユーリは正面に座ったエリアーゼを見つめた。

アリナの鉱物的な金の髪とは違い、エリアーゼの金髪は例えるならば太陽の金。

聖母のように清純な顔立ちの中、垂れ気味の碧の瞳の目尻にぽつりと浮いた泣きぼくろが色っぽい。

女性司書たちの垂涎の的ともいえる、形のいいたわわな胸元とたおやかな肢体を襟元からつま先まですっぽりと覆い隠す品のいいシンブルなワンピースで装っている。

見た目だけはどこぞの貴婦人といってもおかしくないというのに、中身が微妙に残念なことをユーリは知っている。

「単刀直入に言わせてもらいますねえ」

にこりと微笑んだまま、エリアーゼはユーリを見つめた。

思わずユーリは身構える。

脳裏に思い出す悪夢に必死で蓋をしながら。

「ユーリさん。王都から魔導師が来ることになりましたの」

「はぁ？魔導書ではなく。魔導師が、ですか？」

「問いなおすと、エリアーゼはこくりとうなずく。」

「セフィールド学院ではなく？」

「はい。この王立学院図書館に」

「王都には立派な王立魔導図書館があるのに？」

「そう、王都にはこの王立学院図書館に負けない蔵書量を誇る魔導書専門の大規模図書館がある。」

「わざわざ片田舎の街、ユーリの王立学院図書館に王都の魔導師が来る必要はないのだ。」

「うーん。わたしも訊いてみたんですけど、何だかその魔導師さんが個人的に持っていた魔導書がどうにも、迷子になっちゃったそうなんです」

「はぁ！？魔導書が迷子お！？」

ユーリの素っ頓狂な声が執務室に響いた。

2P 図書館に行こう(後書き)

説明ばかりですいません。

四月二十一日に最後のほうちよっと書きなおしました。

3P 王立学院図書館の司書のお仕事

王立学院図書館には七不思議どころか、利用者たちから寄せ集めれば一冊の本が出来上がるほどの不可思議かつ奇っ怪な噂がある。

曰く

- ・ 誰もいないはずの廊下から泣き声やうめき声がする。
- ・ 一人で図書を探していると奇妙な話し声が聞こえる。
- ・ 学習室で居眠りしていると双頭の鷲に狙われる。
- ・ 夕暮れ時に二階の階段の踊り場の大鏡に髪の毛の長い女が写る。
- ・ 誰も知らない秘密の部屋がある。

……………などなど。

王立学院図書館が不思議の温床となるのには理由がある。

「一般図書階で迷子！！ 名前はナナリー・リースちゃん。五歳の女の子、今日の服装はピンクのワンピース。セーナ、ちょっと探しに行ってきた」

「二階一般図書階で初等科のイーディア先生が迷子らしい。シーズ、今そのあたりにいるだろう？探して助けだしてこい」

「うえええっ、ママァ、パパァ」

「はいはい。泣かないで。いまお父さんとお母さん、探してあげるからね。」

一般図書階の一階、中央カウンター内では今日も司書たちが迷子の検索業務に勤しんでいる。

この王立学院図書館は国一番の蔵書量、敷地面積、書架量を誇る。そのため、普通の図書、つまり一般的な図鑑や小説、絵本やちよつとした専門書だけでも一般階として塔の三分の一、ビル四階分の高さ、野球場四個分くらいの広さを有している。

その上、王立学院図書館の要といえる各学術分野における専門書は一般図書の蔵書量の約二倍。

もちろん専門書を一般図書と一緒に置いておくと混沌とするため、専門書は専門書のみで集められて専門階とされ、魔導書は魔導書で魔導階と分けられている。

それでも森の木々のような本棚のせいで『本を探しているうちに迷子』が多発する。

迷子を探し出し、救うのもまた司書の役目でもあり、ユーリもよくやる仕事だ。

館長の呼び出しから戻ったユーリは自分の机を開け、トランシーバーのようなものとネームプレートを身につけた。

トランシーバーのようなものは魔導で声や情報の伝達をする優れ物で、司書は必ず身につけなければならない。ネームプレートは司書の証であると同時にどこにいま司書がいるか把握するためのものでもある。

トランシーバーを起動させ、音声を確認させる。

「ユーリです。業務に移ります。今日の担当図書階は専門階、魔導

階です」

『ユーリ！ちょうどよかった。ガルカール書の『魔導植物全書』取って来てくれる？』

ユーリがトランシーバーを動かすと同時にユーリの先輩司書オリアナの声が届いた。

「はい」

中央カウンターから出ると、パタパタと魔導で動く鳥が一枚の紙切れを広げながら飛んで行くのが見えた。

『 迷子のお知らせ。 ナナリー・ピースちゃんのお父さん、お母さん。至急中央カウンターまで』

それが一般図書階の書架の森に消えるのを見送り、ユーリは一般図書階を出て、大ホールにある大階段を上る。

大階段の先には専門階、魔導階と書かれた扉がある。

移動用の魔導が仕込まれた扉で、行きたい階層の扉をくぐるとその入り口に辿り着くのだ。

ユーリはその中の専門階の扉をくぐる。

一瞬の浮遊感とともにユーリは専門階と銘打たれた回転ドアの下に着く。

回転ドアをくぐって専門階に入り、トランシーバーの画面をいじる。

「えーと、ガルカール書『魔導植物全書』っと。あ、やっぱり専門階の二階かあ」

ユーリは回転ドアのすぐ近くの階段を上り、塔の壁面をぐるりと覆う本棚と壁面に沿うように作られた廊下に立つ。

図書館の専門階のつくりは一階一階きちんと分かれていた一般階とは違い、専門階は塔の構造をそのまま利用して専門階の一階目から四階目まで吹き抜けになっており、一階から四階目を突き抜けて本棚が林のように乱立し、その間につり橋のように廊下が渡されている。

もちろん、渡り廊下のどれが目的の本棚までたどり着ける廊下なのかわからないとたどり着けないし、何より高所恐怖症の人には悪夢のような廊下だ。

「えっと、ガルカール書の『魔導植物全書』は二階の8番書架のW7つと」

ユーリは中央の書架から時計回りに8番目の本棚につながる廊下を正確に選んで突き進み、西から7番目の棚にある『魔導植物全書』を抜き取った。

「あ、へえ、この本読んだ人、このあたりの本も読んでるんだ」

ユーリは本の一番最後の裏表紙に取りつけられた『お勧めカード』を見、いくつかピックアップして本を抱えると、乱立する本棚の中央を目指して渡り廊下を進む。

本棚の中央はドーナツのようにぽっかりと空いている。

その一番下、ユーリから見れば階段1階分下にドーナツの形をした机とその中でいそいそと働く司書たちがいた。

「オリアナさん、こんにちは」

「こんにちは、ユーリ」

明るい茶髪の女性はちよつと眼鏡を押し上げてユーリに手を振る。

「ガルカール書の『魔導植物全書』はこれ、あと、これはできればお勧めしておいてください」

「うん。ありがとう」

ユーリはオリアナに本を渡す。

「ユーリ！！来て早々悪いんだけど6番書架のあたりでルルジア教授が迷子になつてゐるみたい。本の検索と救助よろしく！！」

髪をお団子に纏めたキーリス司書にせつつかれてユーリはぎよつと目を見張る。

オリアナもそうだがキーリス司書の前にも貸し出しと返却、本の検索を待つ利用者が列を作っている。

「なんで、今日こんなに」

「何人かの司書が図書の修繕に回つたもんだから、専門階と魔導階の図書の検索と貸し出し返却業務を一時的にこっちの専門階で引き受けることにしたの。っ、ごめんユーリ」

りりりと鈴のような音を立てた、日本で言うレトロな黒電話をオリアナは手に取ると、「はい、図書の検索ですか？はい。ルギュータス書の『ギルバトーレの書』ですね。はい、はい。取り置きさせております」

ユーリは忙しそうなおリアナから離れ、6番書架に向かった。

「うっ、うっ、うっ」

色白で細く、眼鏡をかけた壮年の男は泣きながらユーリに手を引かれて歩いている。

「あの、泣かないでください。誰でも、初めはそうですから」

泣いているのは迷子探索に引つかかったルルジア教授。

ルルジア教授はユーリのある学校の教授ではなく、他の街からわざわざ本を探しに来たらしい。

だが、司書の案内を受けずに単独で本を探すうちにどこから来たのかわからなくなり、専門階の渡り廊下をさまよううちにうっかり可動式の渡り廊下に乗ってしまい、廊下が小さな扉の前に止まった瞬間、あわててその部屋に入り込み、ほっとしたのもつかの間、渡り廊下はまた動き出したせいで部屋から出るに出来なくなり、パニックを起こして泣いていたところをユーリが発見、救出したのだ。

「この図書館、盗難防止も含めて隠し部屋のようなものが結構あるんです。ただでさえ恐ろしく広いですから、ほら、大体の人はああして司書に本を探してもらったり、書架に案内してもらったりして本を読むんです」

ユーリの指差した先には専門階のカウンターの前のソファでに座っていた男性に司書がメモを読み上げながら本を渡す姿、司書に書架に案内されている女性、机といすが整然とそろった部屋の扉を開け

て利用者を通す司書、読書用のソファに本を持って来てもらっている利用者がいる。

広大な図書館を利用者にきちんと利用してもらうため、王立学院図書館には司書が多数在籍しているのだが、仕事熱心できちんとした司書もいれば、ロランやギズーノンが激怒するようなダメダメ司書もいる。

きっと教授が当たってしまったのはダメダメ司書のほうだったのだろう。図書利用のためのカードは持っていないながら、案内もなしに専門階をさまよっていたのだ、きちんと図書館の説明がされていないかったのだろう。

ユーリは放心状態の教授を連れて休憩室に向かうことにする。とにかく、落ち着いてもらわないと探さなければいけない本もわからない。

専門階の三階には大きなガラスをはめ込んだ明るい休憩室が作られている。

軽い焼き菓子とお茶を楽しむ利用者を見てようやく教授も落ち着いたらしい。

ユーリはその窓際の席に教授を座らせる。

「初めてのご利用ということでしたね。こちらの説明不足で怖い思いをさせて申し訳ありません。ルルジア教授がお探しの本は、私ユーリ・トレス・マルグリットが責任を持って探しますので、どうぞしばらくここでお待ちください」

4 P 後悔は大体役に立たない

「はあ」

ユーリは専門階の休憩室のソファの上でぐったりと溜息をついた。

人員不足を補うようにユーリは図書館中を走り回った。

広大な図書館にある一般図書階、専門階、魔導階を駆け回るのは、あらゆる抜け道、裏道、隠し通路を知る司書といえど重労働で、閉館のアナウンスと音楽が鳴り始めるころにはユーリの足は生まれたての小鹿のようにながく震えていた。

閉館した図書館にはもう誰もいない。

盗難、不法侵入防止のために窓を木戸でふさがれ、カーテンを掛けられたために図書館内は暗い。

ユーリの持っている角灯ランタンのみが今ここにある光だ。

魔導で動く角灯の光と鞆を片手にユーリは帰宅の途に就く。

ユーリの家はエリアーゼの好意によって住むことを許された王立学院図書館の最上階にある植物園のログハウスである。

何故そんな場所に植物園があるのかというと、百年前くらいにこの王立学院図書館の増改築に携わった魔導師が結婚を反対されていた恋人との逢瀬の場としてこっそり作ったものらしい。

屋根にマジックミラーのような魔導をかけ、水を引いて綺麗な花を咲かせて庭を作り、家まで作って。

……よくバレなかったものである。

しかし、王立学院図書館は百年前から事あるごとに増改築、隠し部屋、書架の増量を繰り返してきたため迷子が多発する大迷宮と化している。百年前ならいざ知らず、今ではもう最上階までまともに到達できる人は館長のエリアーゼとユーリしかない。

ユーリはつり橋のような渡り廊下をひよいひよいと通り抜け、ルルジア教授を小部屋に閉じ込めた可動式の渡り廊下に乗る。

渡り廊下はぐるりと弧を描くように動く。渡り廊下が小部屋の前を通り過ぎ、別の廊下とつながる。

ユーリはそれを渡り、一番手近の書架にかけられた可動式の梯子を上って最上階を目指す。

本棚の一番上に着いたら、今は明かりの消えているシャンデリアの陰に隠れて天井に小さな扉がある。

ユーリはそれを開けて中に入るとまた次の扉をあける。

絵画がたくさん飾られた部屋の後ろの扉、タペストリーに隠された抜け道をぐり抜け、ユーリは月の光が差し込む庭園にようやくたどり着いた。

色とりどりの花が月光に照らされながらふわりと揺れる様は幻想的だが、ぐったり疲れたユーリは家に着きたい一心で歩き続け、人の背丈ほどまでの高さの常緑樹で作られた迷路庭園を抜けて、森の中の隠れ家をイメージしたようなログハウスに辿り着く。

「疲れた。……引越し、しようかな」

でも、お金ないしなあと諦めて溜息をつく。

ログハウスの中はワンルूमマンションにロフトがついたのと同じ間取りだ。

梯子を渡ってベットに倒れこみたいのを我慢して、玄関のすぐ隣に

あるキッチンに立つ。

今日の夕食は一昨日作り置きしたシチューとパン。

この世界に来て一番辛かったのは食生活だ。この国は基本的に洋食で、全体的にこってりしている。たまには日本食のようなあっさりしたものや魚料理が食べたいというのが小さい頃のユーリの悩みだった。

しかし、この学問と魔導の街チューリは日本料理に似た料理が豊富にあった。

はつきり言つて、セフィールド学院の入学試験の合格発表より、久しぶりの日本食のほうに感動したくらいだ。

しかし、近頃は仕事が忙しくてのんびり料理をする暇もない。けれど、外食をする暇とお金もない。

近頃のユーリの食事は仕事が休みの日にシチューや保存食をがっつり作っておいて一週間かけて少しずつ食べていく。休みが来たらまた一週間分の食料の買い出しと保存食作りに精を出して、少しずつ消費していく。それをローテーションで繰り返している。

冷蔵庫に似た魔導で動く箱形の保存機が床下についていてよかった。ユーリが複雑怪奇な帰宅路に面倒くさい思いをしながらも、ここから離れられないのは、とつても便利な魔導機がこの家に備わっているせいでもある。

「いい加減ご飯食べたい。明日学食でランチ食べよう」

もそもそとパンとシチューを口に入れながらユーリはぼやく。

残念ながら炊飯器のようなものはないため、鍋でご飯を炊いているのだが、近頃そんな余裕はなかった。

それもこれもエリアーゼが言った、『この家に住む条件』のせいで

ある。

「ああ、憂鬱だあ」

ユーリは昼間、エリアーゼとした会話を思い出して溜息をつく。

『じゃあ、その王都から魔導師を魔導階に案内すればいいんですか？』

『いいえ。それは別にユーリさんがしなくても構いませんのお。ユーリさんにどうにかして欲しいのは魔導書のほうですのお』

明るいつ午後の陽ざしを浴びながら、エリアーゼはにっこりと微笑む。

男は隠し事をするとき、目を泳がせるか視線をきつくするが、女は笑う。

女の笑顔は、何億もの嘘と何百ものはったりと、何兆もの悪事が隠れている。

『じゃあ、何ですか？その魔導師の探している魔導書を横から掠め取れと？』

『ユーリさん。一度じっくり話し合いましたか？あなた、わたしを何だと思っているのですか？』

笑顔のまま、口調が間延びしなくなったエリアーゼにユーリはぶるぶると首を横に振る。

『冗談です。冗談ですつてば』つと言いながら手を振るユーリにエリアーゼの冷ややかな目が突き刺さる。

息を飲んだユーリを見てエリアーゼは溜息をつく。

『まあ、いいです。王都から来る魔導師さんは魔導書について何も言ってくれませんでしたの。魔導書がどんな形でどんな内容でどんな力を持っているのか、わたしは全くわからない』

『それって、すつごくまずいですよね！！もし、『禁制魔導書』並みの、ううん、『一級危険魔導書』並みの力を持っていたら……』
ユーリは冷や汗をかく。

魔導書とは簡単にいえば魔導師の書いた、魔導の研究書である。

平たく言ってしまうえば魔導師が魔導について書けばそれも立派な魔^グ導書だ。^{リモア}

どんなに魔導の腕がへっぽこで、魔導師としてまったく力のない魔導師が書いたものであっても、魔導書は魔導書だ。

しかし、力ある魔導師が魔導の神秘を帯びた言葉を紡いで織りあげられた魔導書は、魔力を帯びる。

そして、魔力を帯びたものは総じてさまざま不思議を起こす。例えば、ユーリが日々使っているトランシーバーも魔力を帯びた“魔鉱石”が魔導を発動させる原動力になっているし、魔導馬車や図書館の扉や専門階の渡り廊下もそうだ。

魔力の起こす不思議を知っているため、王立学院図書館では魔導書に記された内容や秘められた魔力量に応じて貸し出しを制限している。

魔導師でもない一般の人でも借りられるのが、人々が魔導階と呼ぶところに納められた魔導書。

魔導師しか借りられない魔導書は『一級魔導書』として、司書と魔導師しか立ち入れない隠し部屋に納められている。そして、一級魔導書と魔力量は変わらないが、記された内容に危険がある魔導書が『一級危険魔導書』。

『一級危険魔導書』より上級、魔力量も内容も普通の魔導師の手に負えないような魔導書が『禁制魔導書』。『禁制魔導書』専用の部屋に納められた、閲覧にさえ制限がかかる魔導書の事である。

『ユーリさんも知つてのとおり、この王立学院図書館では多数の『禁制魔導書』が保管されています。何かの拍子に見ず知らずの魔導書が王立学院図書館に入り込んだと知れば、あの『禁制魔導書』階にいる『禁制魔導書』達はどんな反応をするかしらあ？』

『……………大激怒の後、不屈きな魔導書に天誅、ですか』

『市民の憩いの場たる王立学院図書館でそんな大惨事困りますのお。……ですから、ユーリさん？わかってますねえ？』

『修繕の終わった魔導書と新聞を持っていきます。今夜』

ユーリが何かを諦めた様に溜息をつくときエリアーゼは今思い出したかのように付け加えた。

『あ、そうそう、ユーリさん。わたし、明日からしばらく有給休暇でえ、死ぬほど嫌ですけど旦那の家に行かなければいけませんのお。』

問題はなるべく未然に防いでくださいねえ』

『……………はい』

『副館長の胃が無くなる前には帰ってきますからあ、よろしくお願
いしますねえ』

にっこり笑った見た目は美女な女性に、単身赴任で王都にいる旦那
とセフィールド学院の託児所に預けている娘と息子がいるなんて、
何だかとても非現実的な気がするのは何故だろう。

「人生は小説よりも奇なり”つてとこ……、かなあ」

異世界からの転生者であるユーリに言えた言葉でないことは確かだ
ある。

そして、現実には恐ろしく奇想天外な出来事が起こりまくることも、
確かである。

「でも、まあ、しょーがないっか!?!」

ここに住むことを決めたのは、自分。

王立学院図書館の秘密を知っても、ここで働くことを決めたのも、
自分。

「さ、行っつか」

鞆を持って、ユーリは立ち上がると迷路庭園をすすると進み、白

い小さな東屋の中心に立つ。
大きく息を吸って、吐き出す。
そして、ユーリは歌い始めた。

「 さあ、集まれ、集まれ、夜の秘密。

日の下では明かせぬ真実を語ろう

月明かりの下で、語れぬ真実を記そう

星々のきらめきに託して真実を紡ごう

同胞たちよ、ここにある真実を誇ろう

ああ、歌え、歌え、命のままに、人生をすべて

ああ、踊れ、踊れ、心のままに、あるがままに】」

エリアーゼより『住む条件』と一緒に教えられた歌はユーリを王立
学院図書館の秘密に導く、秘密の歌。

東屋の床に魔導陣のような不思議な文様が浮かび上がり、ユーリを
包み込んで消えた。

4 P 後悔は大体役に立たない（後書き）

はい、全国の女性の方々、すみません。

心の底から綺麗な笑顔を見せてくれる女性もいますよ男性陣！！

ちなみに“人生は小説より奇なり”ではなく、“**事實は小説より奇なり**” by バイロン（英国の詩人）です。

5P夜の王立学院図書館の秘密(前書き)

一応Rつかないと思いますが、お気に障ったら、すいません。
今回も説明多いです。

5 P夜の王立学院図書館の秘密

ふわっと軽い浮遊感ののち、ユーリは暗い廊下の真ん中に立っていた。

角灯ラシタンのぼんやりした明りを頼りにそっと目の前の扉を開く。

暗い部屋は古い紙とほこりのおいがツンつと鼻をさし、本棚が等間隔に整然と並んでいる。

ここも図書館の図書を保管する部屋の一つであるようだが、他の本を保管するような部屋とは空気が違う。

夜という夜の闇が蓄積し、濃縮して固まったかのような空気がここにはあふれている。

一息吸うだけで体の奥がずっしりと重くなるような空気の中、ユーリは本棚の間を縫うように歩いていく。

ユーリが通り過ぎると小さな囁き声のようなものがふわりと巻き上がったのは気のせいだろうか？

角灯を頼りに歩くユーリの影が本棚に当たって化け物のように広がり、角灯のぼんやりした明りに照らされた本の背表紙の題名がおぼろに浮かび上がる。

『闇との対話』、『血と魂の代価』、『黒の誓言』、『禁断の賢者』

立派な革の背表紙に金字で書かれているのは実におどろおどろしい題名ばかり。

それも仕方がないこととユーリは知っている。

ここは、魔導書を保管し、管理するための部屋であり、ここにある

本は一冊残らず魔導書だからだ。
セフィールド学院に魔導科があるせいかもしれないし、他にも理由があるかもしれないが、とにかくここは魔導書が他の図書館に比べて多い。

魔導書は魔導師が作った魔導の研究書。

魔導は魔力という力を導くモノ。

この世界にはどんな小さなものでも血脈のように未知なる力の流れというものがあり、それが世界と密接につながって世界を作っているらしい。

それを理解し、作り出し、最終的には世界の真理を解き明かし、証明するのを目指すのが『魔導師』というものらしい。

だが、ユーリは初等科の魔導の授業で平均点がぎりぎりとれるかとなれないかの点数で卒業したため、魔導についての見解と理解はとくく昔に匙を投げ捨てている。

そんなわけであまり魔導に詳しくないユーリだが、ここにある魔導書が一般に公開されている魔導書とは格が違うことは分かっている。ここにある魔導書はひと束いくらでそこら辺にいるような魔導師が作った魔導書ではない。

歴代最高と称された魔導師たちが魔導とは何か、世界の真理は何なのか、生涯にわたって生命いのちをかけて研究を続け、己の魔導師としての全てをかけて作り上げた、魔導師の魂の結晶とっていい魔導書がここにある。

ユーリは部屋の一番奥にあるタペストリーを無造作に引っぺがし、その奥の暖炉のレンガをひとつはずして小さな鍵を取り出すと、暖炉の奥にある花のような紋章に鍵を突き刺して回す。

「さて、みんな。久しぶり」

カチンツとかすかな音が響くと同時に暖炉に薄桃色の炎がふわりと燃え上がる。

それと同時に部屋が明るくなり、部屋の全容が明らかになる。

部屋は落ち着いた色合いの絨毯が敷き詰められ、木目が美しい飴色の本棚や読書用の机が整然と並び、どこかのお城の中の書斎のようなデザインだ。

そんな、落ち着いた空間で。

<ええっー、マジで〜!!！>

<ねえ、フロアレスってキルレっていう男と付き合ってたっけ!?!>

<フロアレスがロナウドに乗り換えるまでどんなドロツドロの展開が!?!>

わいわいがやがやと休み時間の学校の教室のような騒がしさが部屋中に響く。

しかし、その部屋にはユーリ以外に誰もいない。

「あ〜。みなさん。お久しぶりです〜」

昼ドラ風な話題を初っ端から聞いてしまったユーリは若干顔をひき

つらせた。

何が悲しくて良い子は眠るお時間に一般図書階の司書と学院の事務員と教師の三角関係を知らにやならんのだ。

<おう、ユーリ。久しぶり!!>

<あ、ユーリだ>

<おう。相変わらず貧相な体してんな。幼児？今年16には見えねえぞ>

「うるっさい!!」

気さくな声とセクハラ発言は本棚に納められた本、魔導書から聞こえた。

<ユーリ、何か変わった話聞かなかった？>

<新聞!!新聞見せる!!>

<あ、お帰り。『月夜の聖草』、『黒の子羊』>

ユーリが鞆から修繕が終わった魔導書を出し、本棚に戻す。

<はあ、やっと帰ってこれた>

<みなさん。お久しぶりです>

四方八方から聞こえる声の元はまぎれもなく魔導書だ。

ここにある魔導書は歴代最高の魔導師が（以下略）作り上げたものなので、作られた当初から強い魔力を帯び、また高名な魔導師が作ったものだったため長い間大事にされていた。
長い年月を生きた猫の尾っぽが二股に分かれて化け猫になるように、長い年月を経た魔導書は自我を得た。

けれど、どれだけ高尚な自我を得ようとも、魔力を持とうとも、所詮本は本。

足が生えて動き回れるでもなく、うつかりしゃべった途端、燃やされたり壊された魔導書もある。

それにここにある魔導書はここに来るまでの間、それはそれは大事にされていたが、暗い物置や隠し部屋に封印されるという大事にされ方だったため、それはそれは退屈お仲間な日々を送っていたらしい。

寄贈された先に似た者同士の魔導書お仲間がいれば身の上話をしたくなるのが人情（本情？）らしい。

最初はそうして身の上話をしあっていたが、それにもだんだん飽きてきて、何代か前の王立学院図書館の館長に退屈しのぎに何かしろと言ってきた。

当時の館長はとても困ったらしい。

『で、苦肉の策として魔導書のご機嫌うかがいを歴代の館長やあたしみたいに最上階まで辿り着けた人がやっていたんですか？』

ユーリは困ったように笑うエリアーゼを見上げた。

『ええ、当時の館長はそれはそれは困って、歌を歌ったり、踊った

りしたそうです。……自我が目覚めたからといって魔導書を片っ端から燃やすわけにはいきません。ですが、退屈のぎにつっかり魔導書達に己に記された魔導を使われては困ります』

それを防止するのがユーリの役目であり、もとは館長であるエリアーゼがしていたことらしい。

ユーリが王立学院図書館の最上階に住む条件としてエリアーゼが出したのは一週間に最低3回、ここ『禁制魔導書』階の魔導書のご機嫌うかがいに行くことだった。

『ここにある魔導書は魔導師たちの命の結晶ともいえる宝ですから、大事にしてあげてくださいねえ』

そう、ここにある魔導書は歴代最高の魔導師たちが（以下略）作った魔導書が集められている。
はず……………なのだが……………。

<ねえねえ、『月夜の聖草』あなた、この前リドル教授のところに行ってきたんでしょう？>

<はい、行きましたよ>

<ええつ、あの教授って生徒に手を出してるんでしょ？どうだったの！？>

<ええ、ちょうど研究室で学生服を着た生徒と（自主規制）を（自主規制）>

「ちょっとそこー！ー！いかがわしい話止めてくんない！？際どいどこ

るか、18禁ワード使いまくるの止めてくんない!？」

放送禁止用語満載の話が花を開いていれば、

<げっ、ちょー嫌ジャン!!! ロードン助教授んこと行きたくねえ>

<でしょう!?! 三日前に置かれたサンドイッチの隣に置かれた時にはもう、気が遠くなりましたよ>

<つか、前の日履いた下着をまた着る奴なんているんだ>

<貸し出しされたくない魔導師?1のサギタリウスに続く暴挙じゃな>

勝手に利用者のランキングがされていたり、

<うわあゝ、人気歌姫のエリザベスがピアノ奏者とデキ婚だって!
!>

<マジっ!?! オレらの癒しが>

<バツカ。歌姫なんか男喰って利用してなんぼよ。喰う側が喰われ
たっっていうバカな話でしょうが>

<そうじゃぞ。結婚は人生の墓場だ。ワシを作った魔導師もなあ>

本棚の真ん中に置いた新聞が経済欄をぶっ飛ばして芸能欄が開いて、
周りの魔導書が喰いついていたり、
バカな冗談を言い合ったり、

……高名な魔導師が見たら、泣き崩れそうな会話が延々と続いている。

<で？でっ！？　リドル教授に（自主規制）された生徒、どうなったの？>

（げ、まだ続いているし。やめてくんないかなあ。もう、やめてくれない？リドル教授の恋人がジョンって名前だとか知りたくなかったから。ジョンって名前の生徒の前で不審な行動とりそうにな……）

ユーリはぎよっと目を見開く。

<せつなげな声でエリックってそのジョンが言った途端、また火が付いてみたいで、（自主規制！！）>

「BLかよっ！？禁断に禁断重ねてるじゃん！！何！？その小説みたいな話！？作ってんじゃないの！？」

<え〜、今週のゲゲツ　（怒）貸し出しされたくない魔導師一位、ゴミ山研究室の主ロードン助教授〜>

「女魔導師！？女魔導師なの！？」

<うっわ〜、恐妻って怖ええのなあ>

<うんうん、しかしの、主はその恐妻に尻を蹴り飛ばされながら大魔導師と呼ばれたワシを完成させてのう〜>

「えっ！？あんたが作られた理由、恐妻？恐妻の命令であんたが作られたの！？てゆーか、あんたたち人気歌手のデキ婚の話してたはずだよね！？それがなんで魔導師たちの家庭環境暴露してんの！？……てゆーか、そこ！！あんた作った魔導師の痛い趣味とか知りたくないから！！幼女趣味ロリコンが魔導師作ったなんて知りたくなかったから！！」

「なにく〜！？幼女趣味ロリコン馬鹿にすんなよ！？あれは、あれだ！！母性本能の表れだったんだ！！ややこしい家庭で育ったから、無垢でか〜いらしくもんに無性に弱かったんだ！！」>

「しかも、女かい！！女魔導師だったのかい！！」

高名な魔導師でもない一学生のユーリでさえ泣きそうな会話が繰り広げられている。

本当にこいつらが貴重な魔導書なのか問い詰めたくなる。

「いや、もう、マジでやめて。ツッコミどころ多すぎて疲れたから、疲れるから」

ユーリは諦めて暖炉の前のいすに座った。

「ここでさえ、こんななんだから、王都の魔導図書館ってどうなってるんだろう」

ユーリは学校の課題を解きながらポロリと呟いた。

<王都？>

<王都がどうした>

耳聡い魔導書達が一斉にユーリに注目する。
さっきまで騒がしかった部屋が鎮まったことにユーリは気づいていなかった。

「ん〜、王都から迷子になった魔導書を探しに魔どっ……!？」
気づいた時には時に遅し。

さっきは会話に加わっていなかった魔導書まで興味深々にユーリの話に聞き耳を立てていた。

<ほほ〜、魔導書が迷子!？迷子とな!？>

どこかの魔導書が口を開いた途端、洪水のように魔導書達が喋りまくる。

「いや、あの、その、ね？」

その勢いに圧倒されたユーリは帰ろうと腰を上げる。

<あ〜・や〜・し〜・いいいい〜>

<さっさと吐いたほうが楽になるぜ？ユーリ>

<ワシらを謀っても良いことはないぞう>

「いや、その、別に何もなくていいってエリアーゼ館長も言ってるし、っていうか、今日はもう帰るね？朝日が昇ったら火は勝手に消えるし、じゃあ、そう言うことで」

<くっ、くっくっ。逃げようなどと片腹痛いわ!!みんな、やっち
まえ!!!!>

その掛け声とともに魔導書が本棚の中でガタゴトと動き回った。

すると、本棚の隅、上、隙間からほこりが吐きだされて空を舞った。
そのほこりはもちろん、ユーリに降りかかり、

「げほっ、ごほっ。やめ、やめて!!!!わかった!!!!話す!!!!話すか
ら!!!!もうやめ……っくしゅん!!!!」

部屋にユーリのくしゅみと悲鳴が響いた。

<では、話してもらおうか>

ようやくくしゅみの発作が治まったユーリは鷹揚に言い放った魔導
書を本気で燃やしたくなった。

5 P夜の王立学院図書館の秘密（後書き）

重複しているところも多いですが、それだけこの世界では魔導書ってすごいものなんです。

恋バナ好きでも、シッコミどころ満載でも。

6 P 王都から来た魔導師（前書き）

さて、さてお待ちせしました。
魔導師登場です。

6 P 王都から来た魔導師

ユーリは憂鬱な気分で溜息をつく。

昨日の夜、うっかり口を滑らせて王都から魔導書を探して魔導師が来ることを魔導書たちに教えてしまったためである。

魔導書たちは何故か興味深々で、魔導師が探している魔導書についてだけではなく、魔導師の研究している魔導や容姿、性格、趣味や好みまで勝手に憶測したり、噂話を膨らませてぎゃいのぎゃいのお祭り騒ぎ。

最後はユーリにどうにかして『禁制魔導書』階まで魔導師を連れて来いと言いつつ始末で、なだめるのに苦労した。

(それ以上に、あそこの掃除に苦労したよ。ちくしょう)

ユーリへのほこり攻撃のために、魔導書達が本をゆすって本棚から吐き出されたほこりを掃除したのはもちろんユーリ。

(魔導書つてもっとおじいちゃんっぽくて、賢者っぽいのをイメージしてただけだなあ)

王立学院図書館の魔導書がおかしいのか、魔導書たちはミーハーでゴシップ好き。

魔導師たちをボロカスにこき下ろすわ、貸し出しされたくない魔導師ランキングを勝手に作ったり、司書たちの仕事ぶりや交友関係にまで興味深々で、某司書がとある学部の教授と不倫中だの話しまくる。

(うわ、やめてよ。思い出さないようにしてたのに)。いまロナウド先生の授業なのにい)

二股をかけられている教師からユーリはなるべく目をそらす。

魔導書達が嘘をついているとは思わないが、あいつらは話を大きく表現することがある。

まともに取り合って馬鹿を見たことが何度もあるけれど、無駄に年だけは食っている魔導書だ。

その観察眼を馬鹿にするほどユーリは人間が出来ていない。

ノートをコツコツとペン先で叩きながら、昨日の魔導書達を思い出す。

魔導書達は呆れるほどにいつもと同じだった。

魔導書達はあれでも意外と気位が高い。自分たちの領域である図書テリトリー館を荒らされることを何より嫌う。

だから、彼らは魔導的な変化に敏感だ。

『一級危険魔導書』が『禁制魔導書』階に上がるほどの魔力を持ち始めるとあそこの魔導書達がいち早く反応する。

だから、もし王都の魔導書が図書館内にあるなら、あそこの魔導書達が気づいているんじゃないかと行ってみたのだが、まさかの空振りユーリは少し落胆している。

(って、ことは少なくとも王都から来た魔導書っていうのはあそこの魔導書達が歯牙にもかけないような下級の魔導書ってことだよな?)

しかし、それならば何故わざわざ王都の魔導師が探しに来るのか。

それ以前に、王都の魔導師が探しに来た魔導書が本当に王立学院図

書館にあるのか？

(嫌な予感がするんだけど……)

その嫌な予感はユーリが思うより早くやってきた。

『セフィールド学院普通科ユーリ・トレス・マルグリットさん。ユーリ・トレス・マルグリットさん。至急王立学院図書館まで来てください』

授業中にもかかわらず鳴り響いた放送アナウンスがユーリを呼んだ。何事だとクラスメイトと教師が注目する視線を浴びたユーリはノートに突っ伏したまま、考え込んだ。

(このまま、保健室に直行するか、お家に帰るか、どっちがいいんだろう?)

しかし、お家は呼び出されている図書館内にあるし、大家には留守中のことを頼まれている。

それに何より、王都からここに来ているだろう魔導師に興味深々だった魔導書達のがやっぱり気にかかる。

肺がしばむほど溜息をつくとき、重い足を引きずってユーリは立ちあがった。

呼ばれて行った図書館の前でオリアナとキーリスが苦い顔をしてユーリを出迎えた。

「どうしたんですか？」

「ごめんなさい、ユーリ。あたしたちじゃ、止められなかったの」
キーリスの苦々しげな顔を見て、嫌な予感がずっしりと肩にのしかかった。

「実はね」

オリアナとキーリスの話を要約するところだ。

王立学院図書館にやってきた王都の魔導師を司書たちはそれはそれは歓迎した。特に女性司書が。

魔導師は最初は何も言わずに歓迎してきた副館長や司書たちと和やかに話をしていたらしい。

そして、本の検索と図書館の案内を頼んだ。

一般図書階でべったべたにくっついて来た女性司書たちと副館長に。

「それって、ミリアリア？セイラ？エイリー？」

「その3人全員よ」

沈痛な表情を浮かべるオリアナとキーリスを見たユーリは一応抗ってみた。

「帰っていい？……あ、なんか、お腹が痛い気がする！！」

背中をそつと撫でてくれるオリアナを見上げると、彼女は言い辛そうに目を逸らせた。

「ユーリ。帰ってあげたいわ。帰ってあげたいんだけどね？」

オリアナがぐったりと口を閉じた後をキーリスが引き継いだ。

「エイリーが魔導階の部屋に閉じ込められて出てこれないのよ」

キーリスの一言に、ユーリは凍りつく。

「『一級魔導書』階に入るときには誓書を書いてもらって、それと引き換えに鍵を引き出さないといけないって司書見習いの時、一番最初に教わることだよな！？なんで司書見習い以下の失敗するの！？」

「知らないわよ。やめて、憂鬱になるから」

「あのね、エイリーが閉じ込められたのはしょうがないわ、あの子の不注意よ。でもね？」

ぐったり頂垂れたキーリスとユーリの前でオリアナはまなじり瞋をキツと上げた。

「閉じ込められたエイリーを助けるのが副館長じゃなくて何でユーリなのよ！！」

追い打ちをかけられたユーリはぐったりと溜息をついた。

「もう、聞きたくない。どうせあの3人は本を探せなかったんだろうし、副館長に案内された魔導師は副館長と迷子になって、それをオリアナとキーリスが助けたんでしょ？」

「そーよ」

否定のないその言葉に、ユーリは今すぐ逃げたくなった。

副館長室に入ったユーリを黒縁眼鏡をかけた小太りで神経質そうな中年男性に出迎えられた。

派手なクラバットを小粋に結んだスーツ姿の男性は真っ蒼な顔に冷や汗をかきながら、ユーリを無理やり応接間の一人掛け用のソファの前に立たせた。

乱暴なその行動に文句を言おうとしたユーリを遮って、副館長がやけにひきつった声を張り上げた。

「このユーリ・トレス・マルグリットは私、レイヴンが推薦するこの王立学院図書館で最も有能な司書です!!」

(誰が一回でもあたしの仕事を認めたっていうのよ!!)

ユーリを常々目の敵にして会ったたび嫌みを言う副館長の腕を無理やり振り払って睨みつける。

「ユーリ!! 挨拶をしないか!!」

自分の行動を棚に上げて怒鳴りつけてくる副館長から目を離し、目の前にいる男を見て目を丸くした。

一人掛け用のソファで優雅に足を組んで座っている男はとても美しかった。

きっと、この人が王都から来た魔導師なのだろう。

(これは、あの三人が見逃すはずないわ)

明ける前の夜空のような濃い藍色の髪を短く整え、肌は上質の大理石のように白く滑らか、高い鼻梁にすつきりとした顔のラインは、彼の無表情と相まってどこか氷のような冷たさを含んでいる。

最高級の琥珀のような瞳は意志の強さを示すように鋭いラインを描き、彼の美貌をいつそう際立たせていた。

彼は高い襟で首元を隠す上質の上衣を纏い、均整のとれた体つきに長い手足を優雅に操るその姿はどこかの国の王族といっても遜色しないほどの気品がある。

(その上、宮廷魔導師かあ)

彼の襟の徽章を見たユーリはうんざりと目を逸らせる。

六芒星に聖杯と剣をもった竜が描かれている銀の徽章は宮廷魔導師の証。

どつりでさつきから、副館長の顔色が悪いわけだ。

王に仕える宮廷魔導師の機嫌を損ねたとすれば、彼の立場はいつそう悪くなるだろう。

副館長は青褪めた顔で冷や汗をかきながら、この図書館の迷宮つぶりと迷子になってしまったことの言い訳とユーリの有能さがさも自分の手柄であるようにえんえんと繰り返している。

(あ、さつきと同じことこれで三回も言った)

ユーリはいい加減聞き飽きた副館長の言葉をどうやって切り上げさせるか考えていると、それより早く魔導師が溜息をついた。

「帰らせてもらおう」

薄い形のいい唇が心地よいヴァリトンを吐き出す。

「は？いいえ、しかしっ！！このユーリは実に有能な」

「黙れ。副館長である貴様がその体たらくでは有能も高が知れている。有能な司書を連れてくると言いながら、連れてきたのはまだ学生の小娘」

鼻で笑われたユーリはムカツと魔導師をにらみつける。

副館長が隣で「いや、しかし、「ですが」と言い訳してみたものを口にしてているが、魔導師を引き留めることはできないようだ。

「副館長がこのレベルでは魔導書も本当に保管されているのか怪しいな。さっさと王立魔導図書館に魔導書を全て返還しておけ」

それは、つまり。

副館長の顔が白に染まる。

ユーリは立ち上がった魔導師をただ見つめる。

彼の氷のように伶俐な美貌には落胆も怒りも何の表情も浮かんでいない。

一介の宮廷魔導師にユーリにある王立学院図書館をどうにかできる力があるとは思えないが、王都からわざわざ来た宮廷魔導師を怒らせたと言いつらされるとここの印象が悪くなるのは当然だろう。利用者がいなくなれば、保管に費用がかかる魔導書の保持が難しくなることくらい、ユーリにも分かっていた。

脳裏にはやいのやいのと騒ぎながら噂話に花を咲かせる魔導書達の声が響く。

退屈だったのだと彼らは言っていた。

しかし、それは。

「待って」

気づけば、ユーリは魔導師の上衣を掴んでいた。

ユーリを不快気に見下ろす目を見つめて、ユーリは言う。

「待って下さい。あたしは、いえ、わたしはあなたが望むなら『禁制魔導書』階まで連れて行きます」

「なっ！？ユーリっ！！」

焦る副館長を尻目に魔導師は面白そうに口を歪める。

「ほう。『禁制魔導書』？」

「魔導師と名のつく人ならば王立学院図書館の『禁制魔導書』は知っているでしょう？」

一部の限られた魔導師のみが読むことを許される希少な魔導書。魔導師を目指す者たちの憧れ。

それは、初対面の初めてここに来た魔導師に閲覧が許されるものではない。

もし、エリアーゼにこのことがバレれば、ユーリもタダでは済まない。

けれど、いまここでこの宮廷魔導師を黙って返すわけにもいかない。

「もし、『禁制魔導書』階に行けなければ、どうする？」

試すような口調にユーリはゆっくりと頭を下げる。獲物がかったことを喜ぶ猟師の顔を隠すために。

「このわたし、ユーリ・トレス・マルグリットの身と魂をあなたの魔導の礎にどうぞお使いください」

それは魔導師があこがれる禁断の人体実験を容認する言葉。王都から来た魔導師はさも面白そうに声を上げて笑う。

「お前は魔導師が何を求めるのかよくわかっているようだな？」

嘲笑う魔導師にユーリはいっそ明るく微笑んで見せた。

「あなたが本当に求めるのは『世界の真理』それだけでしょぅ？」

笑顔を消した魔導師はきつくユーリを睨みつけた。

「だから、わたしはわたしの世界を賭けてあなたをこの王立学院図書館の世界に連れて行きましょう」

「面白い。その世界とやら見せてみる」

握り合った手はとても冷たかった。

この後、ユーリは自分の行動に深く、それはもう、深く後悔するようになる。

7P 王立学院図書館の魔導階

王立学院図書館の魔導書階についたユーリはなじみのある光景にほっと息をつく。

天井から垂れるシャンデリア、壁一面を覆う本棚と、吹き抜けになったホールをあちこちに設置された品のいいソファに机。

本棚が迷路のように配置された一般図書階とも、本棚が木々のように乱立する専門階とも違って、魔導階は壁際の本棚さえ気にしなれば、どこかの高級ホテルのロビーのようだ。

「ユーリ」

魔導階の入口にホテルの受付のようなカウンター内からオリアナともう一人の司書が心配そうにユーリを見た。

「オリアナさん。一緒についてきてもらえませんか？ エイリーを助けますんで」

「おい、俺を『禁制魔導書』階まで連れて行かないのか？」

不機嫌そうに魔導師が言った。

『禁制魔導書』階と聞いてユーリ以外の司書が顔を引きつらせる。

「どうせ『一級魔導書』階と『一級危険魔導書』階を抜けないと『禁制魔導書』階には行けないんです。ついでですよ。ついで」

嘘だ。

本当は『禁制魔導書』階直通の道があるには、ある。

しかし、それをこの魔導師に教えるつもりはない。

心配そうに見つめてくるオリアナに微笑み、ユーリは迷うことなく魔導階のホールを進む。

顔見知りの魔導師や常連の魔導師が声をかけるのに応えていると一人の魔導師がユーリを引き留めた。

「ユーリちゃんや。一昨日探してくれた本はどこかな？」

「ロツジお爺さん」

話しかけてきたのは常連の老魔導師。

隠居した魔導師らしいが、よくここに来るのだ。

すぐに対応してあげたいが、今は案内中だ。

「ごめんなさい。ロツジさん。ユーリは今途中で……」

「かまわん」

すまなそうに詫びを入れるオリアナを遮って魔導師がユーリを見下ろす。

「この方の探す魔導書、探して見せろ」

その一言でユーリは気づく。

この魔導師は自分を試そうとしているのだと。

「いいですよ。そのかわり、ちょっとそこどいてください」

美しい色合いの床には所々にさまざまな意匠を凝らせたレリーフが嵌め込まれていた。

魔導師の足元にもひとつレリーフが嵌めこまれていたのだ。

「ロツジさんが探していたのは『星の黎明』でしたね？」

「うん。あの辺りだったと思うんだがのう」

明後日の方角を指差すロツジ老魔導師にユーリは苦笑する。

「一昨日はそこにあつたかもしれませんが」

ユーリはレリーフに手を触れる。

レリーフは星を喰らう狼、冬の夜に空を彩る星座、を象つたそれをユーリはそつと時計回りに回す。

すると、そのレリーフに描かれた狼が目を開いて動き出し、レリーフがパカリと開く。

レリーフが開いて出来た穴からずっしりと本が詰まった大きな本棚が出現した。

「何度見てもびっくりするのう、ここの魔導階は」

「すいません。これも盗難防止のためなんです」

ユーリは本棚から『星の黎明』と銘打たれた藍色の本を魔導師に渡す。

「なんのなんの、これを見たくてわざわざここに来る魔導師もおる

からのう。どうかしてこの魔導の原理を解き明かそうと躍起になる若いのおちよくるのは面白いわ」

褒められているのか、けなされているのかいまいちよくわからない評価にユーリとオリアナは苦笑する。

実際その通りで、さっきまでのんびり魔導書を眺めていたり談笑していた魔導師たちが一斉にこちらに注目して、メモをとったり、逆に見逃したことを嘆いたりしていた。

一方、目の前で本棚の出現を見た宮廷魔導師は現れた本棚をなでたり、そこに並ぶ本をしげしげと見つめている。

「やけに魔導の気配がすると思っていたが、このせいかな」

「はい。ここに一般公開されている魔導書も高価で希少なものですから、防犯のために魔導でもって本を守っています」

「これは司書しかできないのか？」

「いいえ、レリーフの回し方さえ覚えれば、誰でも出来ます」
でも、とユーリはいったん区切つてとりあえず本棚を元に戻す。

「レリーフの回し方はレリーフによって違いますから、間違った回し方をする最低三日はその間違った人がそのレリーフを触っても本棚が出てきてくれないんです」

「では、あの壁際に並ぶ本棚はなんだ？」

「偽物の本じゃよ。うっかり引き抜くとえらい目にあうぞ、若造」
そう言っつてロッジはにんまりと人の悪い笑みを浮かべた。

「肝に銘じておこつ」

老魔導師の言葉に魔導師はそっけなく答える。

「じゃあ、ロツジさん。本はいつも通りカウンターに戻してくださいね?」

近くのソファに腰掛けたロツジは本に目を通したままふらふらとユーリに手を振った。

それを見た後、ユーリは魔導師とオリアナを先導して歩く。

そして、えらい目にあつたとロツジが忠告した壁際の本棚に近づくと、魔導師の本棚をじっくりと見まわし、魔導師階に1つきりある時計を見つめ、ユーリは窓際の本棚の前で立ち止まる。

「おい、壁際の本棚の本は偽物じゃないのか?」

魔導師の不機嫌そうな声を背中で聞きながら、ユーリは目当ての本を探す。

「まさか、全部本物の魔導書ですよ。ただ、読むためのものじゃないだけです」

「……どういふことが、はっきり言え」

「この魔導書達は転移の魔法陣を書き込まれた魔導書だといふだけですよ」

「つまり、この本棚の中に『禁制魔導書』階に行くことのできる本がある?」

「そんなの無いです」

きっぱりと言い切ったユーリの背中、魔導師は不機嫌そうに顔をしかめた。

返事がおろそかになり始めたユーリに代わり、オリアナが代弁する。

「この本棚の本はこの王立学院図書館の隠し部屋につながる本なんです」

「すべてが、か？」

「いえ、半分くらいは図書館外につながる本だと思いますが……」

「確かめたことはないか？」

「はい」

さすがに魔導師も驚いたように目を丸くする。

「あ、あつた。ふたりとも、こつち来て」

ユーリは薄黄色の表紙の本を手に取り、オリアナと魔導師を手招きする。

「とりあえず、『一級魔導書』階に行くから」

ほいつ、と軽い掛け声とともにユーリは本を開ける。

本を覗き込んだ魔導師とオリアナが消えたのを確認すると、ユーリも本の中に飛び込んだ。

「ちょ、あれどーなってんの!?どーなってんの!？」

「うおっ、見逃した!！」

「おい、どの本だ!?『一級魔導書』階につながる本は!！」

年若い魔導師たちが闇雲に壁際の本を手取るのを、酸いも辛いも？み分けた熟年魔導師たちが観察していた。

「若いのう」

ロツジは消えていく魔導師を見ながらにやにやと笑う。

「全員が学院外に飛ばされた、に千ソール」

「隠し部屋に閉じ込められた、に二千ソール」

常連の魔導師が飛ばされた魔導師の行方を賭けに使い始めるのはもはや日常の光景。

ちなみにロツジは

「全員が図書館の門の前で倒れている、に三千ソールじゃ」

賭けに参加した魔導師たちが目を丸くする中、外から悲鳴が聞こえた。

「っと。あ、やっぱりここにいたんだ。エイリーさん」

小鳥の雛のような髪の女性が小さな小部屋の中で膝を抱えて泣いて

いた。

暗く、ほこりっぽい部屋の中、ユーリが持っている光に誘われるように女性は顔を上げる。

老若男女を虜にする愛らしい顔立ちを誇り、化粧に1時間はかける
と豪語していた彼女の自信あふれる表情は涙でぐしゃぐしゃに歪んでいた。

「さ、迎えに来たよ。帰ろう」

手を差し伸べるといつもの傲慢さの欠片もなくユーリの手に捕まるようにエイリーは立ち上がる。

『一級魔導書』階は小さなカウンターバーが付いた、どこかの貴族のダンスホールかミニオペラの劇場のような広々として豪華な部屋だった。

その奥の、赤々と炎を熾す年代物の暖炉の前に魔導師とオリアナがいた。

魔導師は相変わらずの仏頂面で、オリアナは心配そうに手を組んでソファに座っている。

オリアナの視界の端では司書に案内された魔導師が『一級魔導書』階の床のレリーフに司書から渡された鍵をさし込んだ。

カチツと軽い音とともにレリーフから大きな鷲が現れ、くるりとその場で回ると、鷲は本が詰まった本棚に変わった。

嬉しそうな顔で魔導書を手取る魔導師と、目の前で仏頂面のまま睨んでくる魔導師を見比べて、オリアナは溜息をついた。

(息苦しい)

そう思った、その時、暖炉の両端に作りつけられた獅子像の一方がいきなりあんぐりと口を開けた。

「よっと。さ、ついたよ。エイリーさん」

獅子像の口の中からひょいっと出てきたユーリにオリアナは呆れた顔で出迎えた。

「ほんとに、あんたはこの図書館の抜け道やら隠し部屋に詳しいわね」

「ギズーノンさんほどじゃないけどね。さ、魔導師さん。扉は開けたから、次は『一級危険魔導書』階に行きますよ」

獅子像の口の中から手を差し伸べるユーリに藍色の髪の毛の魔導師は無言でついでに行く。

2人が獅子像の中に消えた後、オリアナは厳しい目でぐすぐす泣きべそをかくエイリーを見下ろす。

出来るなら、この場できつく説教をしてやりたいところだが、他の利用者の迷惑になるだろう。

「行くわよ。おうちに帰りたいから泣き止みなさい」

せいぜい冷たく叱りつけ、オリアナはユーリが消えていった獅子像を見つめる。

(ユーリ。絶対に辞めさせたりなんかさせないからね!!)

キーリスや仲間の司書たちが迅速に動いてくれたから、今頃エリアーゼ館長に今回のことは知れ渡っているだろう。

あの副館長の好き勝手はもう許さない。

決意と共にいまだに泣き続けるエイリーを引つ立てて、オリアナは魔導階に戻る。

「はいつと。到着!!」

『一級危険魔導書』階を通り抜け、ユーリと魔導師は広い廊下の踊り場についた。

上階に続く階段を上って、ユーリは魔導師より先に『禁制魔導書』のある部屋の前に立つ。

「何をしている？」

後ろから声をかけられたユーリは扉に耳を張り付けた態勢でぎくりと肩をすくめた。

「あ、安全確認を……」

ははは、と乾いた笑みをユーリは浮かべる。

(言えない。魔導書達がおしゃべりとか猥談とか放送禁止用語使っていないか確認してたなんて!!)

「さあ、王都から来た魔導師さん!!ここが王立学院図書館秘蔵の『禁制魔導書』がある、通称『禁制魔導書』階です!!」

ユーリは気まずさを誤魔化す為に、また部屋の中にある『禁制魔導書』達に届くように声を張り上げた。扉の向こうで一瞬、ゴトンツと響いた音を誤魔化す為、ユーリは扉をノックする。

「は、入りまゝす」

『禁制魔導書』階に入った魔導師は絶句した。

どこかの王侯貴族の書斎のような豪華な作りの部屋には整然と魔導書が並ぶ本棚が配置されていた。

部屋の規模も美しさも奇抜さも、いままで見てきた魔導階、『一級魔導書』階、『一級危険魔導書』階に劣るシンプルな部屋だ。

しかし、この部屋にはいままで見てきた部屋にはないものが濃縮し、溢れんばかりに湧き上がっていた。

魔導師を圧倒したのは古い知識とそれを内包する古い魔力。

それが部屋の至る所にある魔導書から放出されたいる。

「ここが、『禁制魔導書』階」

目を見開いて呟いた魔導師を、魔導書達が嬉しそうに見下ろしている気がする。

ツンツと澄ましたように黙り込む魔導書達を見ながら、ユーリはうなずく。

「はい。王立学院図書館最高の魔導書蔵書室です」

7P 王立学院図書館の魔導師（後書き）

さて、ユーリさん。無事に魔導師を『禁制魔導書』階に連れて行きました。

図書館は広大ですので、説明多くてすいません。

ついでに言うと、一ソール＝一円です。

一万ソールで金製の硬貨一枚、千ソールで銀製の硬貨一枚、百ソールで銅製の硬貨一枚。

百ソール以下は錫や鉄を混ぜた合金の硬貨。

さて、舞台と役者がそろえば当然、アレが起こります。

8P事件は目を離れた隙に起こる

「っだー！疲れたっ」と

首と肩の周りをほぐすとバキバキツといい音がした。

一般図書階のバックヤード。その中の修繕室と銘打たれた部屋でロランは本を直している。

「ロランさん。良かったんですか？副館長の頼み蹴って」

「いいんだよ。おれは魔導階の魔導書は専門外だ。ただでさえ怒ってる宮廷魔導師に八つ当たりされるのもごめんだしな」

「なんだかんだ言いつつ、最後が本音なんですね」

「さっき放送でユーリちゃん呼ばれてましたよ」

「学生なのに可哀想に……授業はいいんですか？授業は」

「魔導書階だけじゃなく一般図書階まで自在に走り回れる司書をあの女狐がそう簡単に手放すかよ。ダメダメ眼鏡も結局ユーリ頼みだしな。あいつは卒業さえできりゃあそれでいいんだよ」

「就職先がもうほぼ内定してるんですね」

「内定じゃない。ほぼ確定だ。留年しなけりゃあいつは確実に四年

後にはここで働いてるよ」

「ユーリちゃん、これから一生あの館長にこき使われるのか」

修繕室の司書たちが口々に騒ぐのを適当にロランはさばいて修繕に取り掛かる。

「っと、これもかよ」

ロランは本の中に無理やりねじ込まれたような紙切れを一枚取りあげる。

開いてみるとぐしゃぐしゃに折り曲げられているが、細かく書き込まれた文字と円陣、図形が描かれている。

「またですか」

向かいに座る眼鏡の司書のうんざりした声にロランも同じようにうなづく。

「ああ、魔導書の1ページだ」

修繕の途中で修繕を待つ本の内容と明らかに関係のない魔導書と思しき内容の文書がさつきからちらほら出てきては司書たちを悩ませている。

「魔導書の1ページがどうやって紛れ込むんだ？つとに、メーワクはなはだしいぜ」

手にした1枚をじっと睨んでみるが、あいにく魔導書は専門外だ。

何が書かれているのかさっぱりわからない。

「ギズーノン爺さんなら、ちょっとはわかるんだろうが」

残念ながらギズーノンは今日は休みだ。

ロランはぺいっと紙を小さな箱に入れる。見つかった魔導書の1ページをこうして箱に集めているが、ざっと数えて10枚くらいは溜まっている。

何を考えているのかわからないが頼りにはなるエリアーゼ館長がない時にこうした厄介はごめんこうむりたいというのがロランの本音だ。

王都から来た宮廷魔導師は確かにすごい奴だが、それも含めて厄介事の種であるとロランは思っている。

ロランは無精ひげをなでて立ち上がる。

「ちょっと一服してくるわ」

「え〜と、『我が力を糧に、眠りし力……』」

癖っ毛の司書が箱に集められた魔導書の1ページを手を取った。

「へえ、あんた魔導文字読めるんだ」

眼鏡の司書がちょっと感心したように癖っ毛の司書を見る。

「ええ、ちょっと魔導をかじってまして……」

「へえ〜すごいじゃない」

向かいに座っていた女司書に言われて癖っ毛の司書はがぜん張り切りだした。

「ええと。『我が力を糧に、眠りし力……』」

「げっ!?!」

トイレから戻ったロランは癖っ毛の司書が呟く声と彼が持つ魔導書の1ページを見て青褪めた。

「馬鹿っ!?!読むな!?!何とも知れない魔導書なんか読んだらっ!?!」

魔導書に描かれた魔導陣がぼあつと淡く輝く。

「えっ!?!」

時すでに遅し。

魔導陣がひとときわ強く輝いた……。

バキッ!!メギメギ……ッ!!ゴゴゴゴオッ

「んぎゃーっ！！」

目がくらむような閃光と司書たちの悲鳴をかき消すようにドズンッと不気味な地響きが塔を揺るがせた。

<ユーリ>

「え？なに？」

魔導書に話しかけられて返事をしたユーリは慌てて魔導師を振り返った。

ちらっと見た魔導師はこちらに気づくことなく明々後日の方向を向いて突っ立っている。

「なに？いまお客さんが来てるのに！喋っちゃダメ！！燃やされちゃっよ」

ぼそぼそと喋りかけてきた魔導書に注意すると、魔導書は若干焦ったように話しかけてくる。

<魔導の気配がする。知らない気配だ>

<一般図書階のほうから！！>

「っすっ！？」

「何だ？」

思わず大きな声が出たユーリはこちらに気づいた魔導師にぎよっと目を見張る。

「あの、え〜と……」

こちらに注意が向いた魔導師をどう切り抜けるか考えていると

……ピーッ、ピーッ!!ピーッピーッ!!

トランシーバーが高らかにアラーム音を響かせた。

『っ!!こちら修繕室のロランだ!!誰か答えてくれ!!』

「ロランさん!？」

慌てて触ったトランシーバーから雑音混じりのロランの声がする。

『ユーリ!?ユーリか!?!』

「どっしたんですか?」

『修繕室に入り込んだ魔導書の1ページをネロのバカが読みやがったせいで魔導が発どっ!っげっ!?!うおっ、マジっ!?!シャレになんねえええええっ!』

ガガガッピーッと激しいノイズ音とともにトランシーバーの通信が

途絶えた。

「どうした？」

「すみません。緊急事態です。一般魔導書階に戻ります」

「魔導関係の問題か？」

「はい。ちょっと近道しますよ」

「は？近道？」

怪訝そうに訊き返す魔導師を捨て置いて、ユーリは部屋に1枚だけある窓に近づき、窓枠を力いっぱい横に押した。

「隠し通路か」

空の風景が描かれた窓がぐるりと動いてその下から扉が出てくる。

興味深そうに動いた窓をしげしげと見る魔導師は、後ろにユーリが立ったことに気づかない。

「これは、外の空の風景を魔導で映し出している代物だな。この扉をあけると近道とやらに」

「いいからさっさと行ってください」

ドンツとユーリに押された魔導師の体が開いていない扉の中に消えていく。

<お前、たまに乱暴だよな>

「うるさいなあ。ここに来た魔導師たちですぐ居座りたがるんだもん。真面目に相手してたら日が暮れるの」

口々に文句を垂れる魔導書達を尻目に、ユーリも固く閉じられた扉の中に足を突っ込む。

「じゃあね。行ってくる」

<気をつけて>

<終わったらここに来いよ>

のんきな声援を受けてユーリは扉の中に飛び込んだ。

「貴様、いきなり人を突き飛ばす奴があるか!!」

「ちゃんと声はかけたじゃないですか」

どことも知れない部屋のだ真ん中で尻餅をついて痛い思いをした魔導師は、華麗に着地をして平然としている司書を睨んだ。

「その扉を出れば魔導書階に出れますから。行ってください」

「貴様、俺に謝罪の言葉はないのか？」

唸るように睨んできた魔導師に、ユーリは姿勢を正して大人しく頭を下げた。

「謝罪も本の検索も、後で必ずします。いまはとにかく一般図書階で起きた魔導を止めないといけないんです。すいません。お願いですから行かせてください」

「見たところ、魔導師でもないお前に何が出来るんだ？」

「出来ることがあるかもしれないから、行くんですよ」

ユーリはそう言つと魔導師に背を向けて次の扉をあける。

小さな個室が並ぶ部屋の大きな鏡の前にユーリは立っていた。

「ここはどこだ？」

「一般図書階のバックヤード……って、何でいるんですか!？」

ぎよつと後ろを振り返ると藍色の髪の魔導師がいた。

「魔導師がいたほうがいいだろう?」

堂々と言い放つた魔導師から、ユーリは目を逸らす。

「いや、そうじゃなくて。……あの、ここは………」

言いづらそうに視線を離したユーリを見、魔導師はふと部屋を見回す。

蛇口の並んだ水場に、並んだ個室、薄いピンクがかかったタイルが床に敷き詰められている。

その個室の一つで水を使う音がした。

……………いやな、予感がする。

「職員用の女子トイレ……………なんだけど……………」

「……………先に、言ってくれ」

……………ざわざわ

修繕室の周囲は司書たちと野次馬が集まり、大騒ぎになっていた。

「みなさん。仕事場に戻って！！魔導師がすぐにきますから！！」

「副館長！！レイヴンさん！！」

神経質そうな声を聞いたユーリは人の流れにあらがうように走り寄る。

「おお、ユーリ。っと、アヴィリス様！！」

ぎょっとレイヴンが驚いている隙をぬい、ユーリはさらに加速する。

「すみません。レイヴンさん!! 行きます!!」

「……ああっ!!? そのロープの向こうに行くんじゃない!! ユーリ!!」

レイヴンの後ろに張られたロープを越え、ユーリは修繕室とプレートの貼られた扉を目指す。

「ええっ!!? アヴィリス様!!? 待って!!」

ユーリの後ろからレイヴンの焦った声が聞こえる。魔導師も付いてきたのだ。

隣で平然と走る魔導師がちらりとユーリを見下ろす。

「で? どうするんだ?」

「一応、ここから先に誰も入れないようにします」

「どっやって?」

問う声に答えず、ユーリは立ち止ると床と壁に等間隔に飾り付けられた絵のついたタイルを1枚外し、ひっくり返して元に戻す。

……ゴゴッ

床からタイル張りの壁が立ち上がり、付いてこようと走り寄るレイヴンと呆然とこちらを見ている野次馬の姿を隠す。

「本来は防火用のものなんですけど、魔導に対する耐性があるから、無いよりはましでしょう」

「あの副館長は何故これを使わなかったんだ？」

「使い方、忘れちゃったんじゃないかな？近頃全然使われてないから、あたしも動くとは思わなかったし」

「いい加減だな」

「まあ、しょっちゅう使われるような状況も困るからいいんですけどね」

呆れたように目を丸くする魔導師にユーリは苦笑する。

「がっしゃーんっ、バキバキバキッ！！」

何かが碎ける音と共に修繕室の扉がはじけ飛んだ。
苦笑したユーリの顔がそのまま凍りついた。

修繕室の扉を巨大な木の根が叩き壊して廊下に這い出てきたのだ。
木の根はうねうねと蠢きながら、外を目指してガラス窓にすり寄る。

「ああっ！？ダメ！！外に出ちゃダメーっ！！」

「どけ！！」

魔導師がユーリの前に立ちはだかり、腕に嵌めていた腕輪を木の根に投げつけた。

腕輪は銀色の鎖に変わり、木の根に巻きついて動きを封じる。

その瞬間、パンッと木の根が破裂するように光の粒子に変わった。

「なに？あの木の根？」

「おそらく、魔導で出来たモノなんだろうが、込められた魔力が少ないせいで極端に脆い様だな」

「じゃあ、結構楽勝？」

「な、訳あるか。見る」

「げっ！？」

木の根がこちらに向かって押し寄せてきている。

「何でこっちに向かって来てるの！？」

「魔力の多いものに反応しているんだろう。捕まったら魔力を絞りとられるぞ」

「あたしたちは果汁！？ジュース！？木の根の肥料になんかなりたくない〜」

「うるさい。大人しくしろ。いくら束になろうと」

頭を抱えてわめくユーリを魔導師は冷然と睨みつけ、ふと、後ろを振り返る。

「……………っ！！」

慌てて魔導師は床にナイフを突き立て、ユーリを腕に抱えて伏せた。

二人の後ろの扉からも根っこが襲いかかって来た。

木の根は二人を覆う半透明な球体にぶち当たって止まる。

前後の木の根に挟まれて、みしみしと不気味な音を立てる結界の中で魔導師は息をのむ。

木の根の魔力量が増加している。

「おい、司書。ここに、魔力を持つようなものがあるか？」

「しゅ、修繕中の一級魔導書が、あつたと思うよ。2、3冊」

「どこにある？」

言いづらそうに目を逸らしながら、ユーリは震える手で指をさした。

「後ろから襲いかかってきた根が出てきた部屋」

「……」

魔導師は溜息をつくど、どんっ、どんっとして後ろから聞こえる音に気付く。

どうやら根っこは壁に阻まれてその先には行けないらしい。

ふと、魔導師は隣で座り込んでいるユーリを見て尋ねた。

「おい、司書。ちなみにあの壁はどうやって元に戻すんだ？」

「あ、壁の向こう側にあたしが動かしたタイルと対になるタイルがあるの。それを外して、あの壁のタイルが1枚だけ欠けてる所に押し込めば元通り」

「それを知っている奴は向こうにいるか？」

ユーリはうーんと考えながら、何かを数えるように指を折り曲げる。

……嫌な予感がひしひしと結界の中で湧き上がる。

（「えーと、リリースさんも無理」って何だ？……不安だな、おい）

全ての指が折れ曲がった途端、青褪めた顔でユーリは魔導師を見上げた。

「あ、あは？」

「あは？じゃない！！どうするんだ！？学院からの魔導師も入れねえじゃねえか！！」

言い放つと、ユーリはがっしと魔導師の腕を掴んだ。

「いや、魔導師さん落ち着いて。一応あなた宮廷魔導師だよね！？すごいんだよね！？」

「最終的に他力本願かつ！？」

「『魔導は万人のもの』なんでしょ！？緊急事態でしょ！！助けてくれてもいいじゃん！！！」

「図々しいな、お前は！！！」

魔導師を掴んだ手を振り払われたユーリは思わずわめく。

「だって、出口は修繕室にあるんだもん。窓は硬化ガラスで魔導耐久構造だから破れないんだよ!!」

「何だ。出れるのか」

「え？そりゃあ、出られるよ？ここにも抜け道くらいあるし」

きよとんとユーリが魔導師を見上げると彼はバツが悪そうに髪をかき、溜息をつく。

「先にそれを言え」

言い捨てると木の根の前に立ち、ナイフに手を添えて構える。

「で？他に魔力の多いものはないだろうな」

「地下に『禁制魔導書』が1冊残ってるけど、さすがにそこまでは……」

ドンっ、ドンっ、と地響きのような振動が修繕室のほうからやってくる。

まるで何かを突き破ろうとしているかのような音だ。

魔導師と司書は顔を見合わせる。

「あの部屋の下にあるのか？」

「はい」

魔導師は胸ポケットからひとつ丸い木彫りのペンダントを出し、ユーリに向かって放り投げる。

「なに？これ」

「持っている。お守りだ。オミュレットそれで自分の身は自分で守れ」
放り投げられたお守りをユーリは大人しく首から下げた。

「……足手まといにはならないように気をつける」

にこつと勝気に笑ったユーリに魔導師は無意識に口元を緩ませた。

「行くぞ」

9 P探していた1ページ

襲いかかってきた木の根を焼き払い、修繕室に飛び込んだ魔導師にユーリも続く。

室内に入った魔導師は木の根に囚われている人々を見てきつく眉を寄せた。

「修繕室の司書か？」

「うん。逃げ遅れた人たち。って、わわっ!!！」

またも襲いかかってきた木の根を魔導師はナイフを剣に変えて切り落とす。

魔導師の攻撃をぬって襲いかかってきた木の根はお守りをかざすと弾かれて大人しくなった。

「1分だけ時間をください!!さっきみたいに壁作るから!!！」

「出口は本当に別にあるんだろうな!？」

「ちょっとは信用してくださいよ!!部屋の中だって言ってるですよ!？」

魔導師が作ってくれた結界の中でユーリはタイルを外してまた壁を作る。

後ろから襲いかかってくる木の根が完全に遮断された。

「結界を張ってやる。その中に司書を入れて守ってる」

「了解!!」

さつきより増えた、前から襲いかかってくる木の根に魔導師が剣を振りおろした。

ざんっ、ざんっ

魔導師が剣で襲い来る木の根を退け、司書たちを助けだす。

どこに司書がいるのかわからない以上、さつきのように大掛かりに木の根を焼き払うわけにいかない。

「くそ!!あと何人司書はいるんだ!?!」

木の根から引きずり出された司書を結界の中にユーリが運び込む。

「わからない。通信機が繋がらないから、副館長と連絡とれないし、みんな気を失っちゃってるから」

「あと2人だ」

結界の中の司書の中から1人、いぶし銀のような色合いの髪と目をもつ男がふらふらと起き上った。

「ロランさん!!」

「おう、ユーリ。授業休ませて悪いなあ」

「ちょ、やめて。ロランさん!!」

ぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜる手を振りほどいて、傭兵のようにつしりとした体躯の男を見上げる。

「あと、2人、どこにいるかわかる？ロランさん」

「あの机の下に1人とネロの馬鹿はどこ行ったかわかんねえな。魔導書が一番近かったからな」

「この騒動の中心になっている魔導書はどこだ？」

「さあな。ぺらい1ページだったからな。他の魔導書のページの束もどっか行っちゃったし」

魔導師の質問にロランは投げやりに応える。

やる気のない対応に魔導師は柳眉を釣り上げたが、襲い来る木の根を切り払い、司書の救出に向かう。

一方、ユーリはロランの前に座り、問う。

「ねえ、ロランさん。隣の修繕室に置いてあった一級魔導書の銘は知ってる？」

「銘？ああ、確か『自然操作魔導入門』と『水系魔導応用全書』だったっけ」

それが、どうした？とロランは怪訝そうに眉をひそめる。

「あの木の根、隣の部屋にまで浸食しちゃって、地下にまで行くとしてるの」

「え？ああっ！？壁がねえ！？つか、地下！？禁制魔導書があるんだぞ！？やばくねえか！？」

「やばいから訊いたんですよ。禁制魔導書は今日修繕が終わるはずだから、もう安定はしてると思いますけど」

これだけ騒がしかったのだ、下の禁制魔導書はものすごく機嫌が悪

いだろう。

しかし、いまは考えても仕方がない。

「じゃあ、ちょっと行ってきますね」

「え？おい。ユーリ！！」

襲い来る木の根をお守りをかざして退けながら、ユーリは隣の部屋を目指す。

走りながらネームプレートを外して握りしめる。

一級魔導書の修繕室は大きな机がひとつと道具を入れるための机がひとつ、本を保管する棚が一つあるだけの簡素な部屋だ。

根によって荒らされて散らかった部屋の中でユーリは根に囚われた一級魔導書を見つける。

それを横目に見ながら、ユーリは修繕道具を入れてある机に忍び寄り、散らかった道具から目当ての物を探す。

(あつた。これさえあれば！！)

ユーリが持ったのは本を纏めるための革のベルト。

それにユーリは自分のネームプレートを通して立ち上がる。

「王立学院図書館司書ユーリ・トレス・マルグリットの名の下で以下二つの本の魔力の強制封印を許可します。その魔導書の銘は『自然操作魔導入門』、『水系魔導応用全書』」

言い終わると同時に木の根に囚われた一級魔導書めがけてベルトを投げた。

ベルトは空中を泳ぐように動き、二つの魔導書を縛り上げる。

木の根ごと縛り上げられた魔導書は一瞬抵抗するように光った後、力を無くしたように机の上に落ちた。

それと同時に木の根がふつと消える。
一番の魔力の大本である魔導書からの魔力の供給が無くなったせいで力を維持できなくなったのだろう。

ほつと息をついたユーリは木の根のなくなった部屋を出て、隣の修繕室に戻る。

木の根がなくなって、よりいっそう惨状が明るみになった部屋。ユーリは結界に戻ろうと、折れた机や倒れた棚に悪戦しながら歩く。その途中、コンツと足に何かがあたってた。

「これ……」

見下ろすと、魔導文字が書き込まれた紙が木箱の中に入っている。

「てめえ！！馬鹿ネロ！！オメーのせいで本も修繕室もむちゃくちゃじゃねえか！？どうしてくれるんだ。このドアホ！！」

ロランの怒声に気づいたユーリはふと顔を上げる。
結界の中でロランが癖っ毛の司書を締め上げていた。
どうやら、彼が今回の騒動の原因らしい。

「いけ、やっちまえ！！ロラン！！」

「無駄な仕事増やしやがって！！この下っ端ネロが！！」

「お給料減らされたら呪うからね！！」

周りの司書は止めるどころか囃し立てているのを見て少し安心する。
みんな汚れたりしているが、大きな怪我はなく元気らしい。

「おい。小娘」

ぶつきら棒な声のほうに顔を向けると細い柱の前に魔導師が立っている。

柱だと思ったものは木の根が重なり合って出来たモノで、木の中心あたりが歪に膨らみ、光っている。

「何をしたんだ？お前」

「一級魔導書の魔力を封印したの」

ほらつとユーリは革ベルトに縛られた魔導書を見せる。

「修繕室には、魔導書が万が一暴走した場合に対応して魔力を直接

封印する魔導機があるの」

「なるほどな」

魔導書を縛り上げるベルトを魔導師がちらりと見る。

「それが暴走した魔導書の1ページ？」

「ああ」

歪に膨らんだ木の根の間から紙の切れ端が見えた。

「それで、どうするの？」

「まあ、見ている」

魔導師は木の根を強引に引き剥がすと、露わになった魔導書に触れる。

「『我が力を糧にし、眠れる力を喚び醒ませ。在るべきモノよ。在るべき姿に変われ。変わりしモノよ力の糧たる我に従い、鎮まれ』」

魔導書の1ページに描かれた魔導陣がふわりと輝き、消えた。

「終わった、の？」

魔導書の1ページを持ったまま、動かない魔導師にユーリは恐る恐る声をかける。

「お前、名前は？」

「は？名前？って」

（最初に言っただけど……）

戸惑うように見上げると、振り返った魔導師に不機嫌そうに眉をひそめられた。

「早く言え」

横柄な物言いにムツとするが、司書たちを助けてくれた恩人だと自分に言い聞かせる。

「ユーリ。ユーリ・トレス・マルグリット」

「ユーリか」

魔導師は最初にあつたときと変わらない無表情でユーリを見下ろす。

「このお守り、ありがと。返す」

差し出したお守りを魔導師はちらりと見下ろし、パチンツと指を鳴らした。

軽い音とともに結界が消え、司書たちが安堵の言葉と表情を浮かべて外に出ていく。

「それは、持っている」

「え？何で？」

ぐいっと押し返されたお守りを見てみると、外が騒がしくなった。

「ユーリい！！この壁どうなってるんだあ！？出れねえぞ！！」

「あ、みんな待って！！いま別の抜け道開けるから！！」

部屋の奥にある柱時計のふたを開け、振り子の中から鍵を抜き出し、時計の真ん中に突き刺して右に回す。

すると、キリキリときしむ音とともに時計が後ろに倒れてゆき、その奥から扉が現れる。

「これが出口か」

「うん。図書館入り口に向かい合う驚と一角獣の銅像があったでしよ？その一角獣のほうの台座に繋がってるから」

「そうか」

魔導師は言葉少なにうなずくと何か思案するようにユーリを見、手の中の魔導書の1ページを見下ろす。

とりあえず、ユーリは抜け道を抜けて外に出て、外から修繕室の壁を取り外してやることにしてみんなに待ってもらおうよう魔導師に頼んでユーリは外に出た。

バックヤードに戻ると副館長や魔導科の魔導師たちが壁の前に集まっていた。

彼らに簡単に事情を説明し、壁を解除してみんなを助けだす。

もはや原形を留めていない修繕室を見た副館長が真っ青になってガ

クガク震えているのを、見やりながら司書たちはバックヤードを後にした。

魔導師も事情を知りたがる魔導師や副館長と一緒に消えた。

ひとりこっそり修繕室に残ったユーリは柱時計を元に戻し、ふと思いついて、折れた机の下を覗いて回る。

「あ、あった」

魔導文字が書き込まれた紙が入った木箱。

魔導師が手に持っていたモノと同じく、魔導書の1ページらしい。その中の1枚を手取る。

「やっぱり、あの魔導師が持ってた魔導書と似てる？」

夕陽が差し込む部屋の中、魔導書はいつそう妖しく、不気味に見えた。

ガラッ

「っ!？」

思わず持っていた魔導書の1ページを取り落としてユーリは振り返る。

「何だ。魔導師さんか。脅かさないでよ」

赤い光を浴びた魔導師は長い手足を操って足場の悪い中を優雅に歩く。

「アヴィリスだ」

「は？」

「俺の名前はアヴィリス・ツヴァイネルーロウ・スフォルツィアだ」

(うわあ、長ッ)

そう思ったのが伝わったのか、睨まれた。

「っ、スフォルツィアさんはどうしてここに？」

「アヴィリスでいい。コレと同じものがまだここにあると聞いてな取りに来た」

「あ、これ？」

木箱を渡すと、アヴィリスの表情が変わる。

「何故、お前が持っている？」

「あ、あたしもコレが落ちてるのに気づいて、とりあえずどこかに保管しようと思ったんだけど？」

見上げると、アヴィリスは眉をひそめ不機嫌そうな顔で睨みつけてくる。

非常に機嫌が悪そうだ。

(う、でも……仕方ないか)

何しろユーリが突き飛ばしたせいで関わる必要もない魔導書の事件に巻き込まれた（しかも明らかに司書の過失）のだし、そのうえもう閉館時間で図書館の案内も本の検索も出来そうにない。

「あの、すみません。本の検索と図書館の案内はまた日を改めてします」

口調と姿勢が改まったユーリにアヴィリスが怪訝そうにこちらを見る。

「今日は本当にご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

深く折れ曲がったユーリの背中を見てアヴィリスはバツが悪そうにそっぽを向いた。

「構わん」

ぶつきら棒な声に顔を上げるとアヴィリスが無表情にこちらを見ていた。

「馬鹿な司書のせいで迷惑は被ったが、探し物は見つかったからな」

「え？」

訊き返したユーリにアヴィリスはいや、と歯切れ悪く口ごもる。

「まだ、完全に見つかったわけではないな」

アヴィリスは大事そうに魔導書の1ページを指でなぞる。

「借りを返せ」

「は？」

唐突な言葉に目を丸くすると、アヴィリスはにやりと意地の悪そうな笑顔を浮かべた。

「その様子では、俺が探しものに来ていたことを知っているんだろ
う？」

「ええ、まあ。うつすらと」

意味深な口調にユーリは嫌な予感がする。

いや、もはや苦勞フラグが天を突き抜けんばかりに立ちあがっている！！

これ以上話を聞くなと警戒警報が鳴り響いている！！

「俺の探している魔導書はこの通りばらばらになっている。おそろく図書館中に散らばっているだろう」

ユーリが口を開く前にアヴィリスはにっこりと微笑んだ。

「ユーリ・トレス・マルグリット。俺と共に散らばった魔導書を探し集める」

始めてみたアヴィリスの綺麗な笑顔を見てユーリは固まる。

おそろく、初心な貴族の令嬢だったらポツと頬染めるか、黄色い悲鳴を上げる美貌の前で、断頭台にのぼる死刑囚のような凍りついた表情でユーリはか細い抵抗をする。

「……あたし、学生で授業、あるんだけど？」

「副館長のレイヴンがどうにかすると聞いていた」

「……明日になれば、魔導書に詳しいギズーノンさんが来るから」

「70近い爺に今回のような臨機応変な動きが出来るか？」

「今回みたいなことが起こるの前提！？あたしは魔導はシロートだよー！」

くわつとユーリは噛みつく。

「無理！！絶対無理！！ってゆーか、ぜえっつたい、いやあああつ」

ぎゃんぎゃん騒ぐユーリを面白そうに見ていたアヴィリスは木箱を持って踵を返す。

「まあ、明日になれば、……いや、そう言えばレイヴンがお前を探していたな？」

肩越しににやりと微笑みかけられたユーリはすべてを悟る。

おそらく、明日、もしくは今日中にもアヴィリスの手伝いをするように、副館長に命令されるだろう。

だって、そうなるようにこの王都の宮廷魔導師が副館長に言いつけやがったんだろうからー！！

ユーリの逃げ道は、最初っから塞がれていたのだ。

しかし、せめて、吠えさせてもらおう。

負け犬らしく。潔く。

「こおの、陰険魔導師がああああっ！！！」

10P夜のお茶休憩(前書き)

ちよつと残酷な描写入ります。

そろそろR15にするべきでしょうか。

10P夜のお茶休憩

その日の夜。

<ふむ、なるほどな。魔導師の探していた魔導書はバラバラに分解されてしまっていたのか>

ユーリは『禁制魔導書』階に来ていた。

今日はお気に入りの紅茶をポットに入れて、マフィンやクッキーを持って。

「そう、だから魔導師はどこに魔導書があるのか分からず、魔導師が呼んでも魔導書は帰ってこなかった」

ユーリは今日の出来事を話しながら、紅茶を口に含む。

魔導書は盗難防止を兼ねて、所有者の魔導師が呼ぶと手元に戻って来るよう、魔導師たちは魔導書に魔導をかける。

『禁制魔導書』階にある『禁制魔導書』のように遠の昔に所有者の魔導師が死んでいたり、魔導書自体が魔導師より強い魔力を持った場合は別だが……。

しかし、今回のようにバラバラに分解されていけば、いくら魔導師が魔導書を呼ぼうともそれも叶わなくなってしまう。

<それで、“迷子”か>

魔導書達が不機嫌そうに黙り込む。

魔導書達は自分たちと同じ魔導書が所有者の下に帰れないほどバラバラにされ、その上この広大な王立学院図書館にばら撒かれたことが気に食わないようだ。

(人間で言ったらバラバラ死体を自分の家に遺棄された気分だよね)

自分の表現に気分が悪くなったユーリは慌てて紅茶をのみ込む。

<天罰だ>

「は？」

物騒な声が聞こえたと思った途端、魔導書達が口々に喋り出す。

<ああ、そうだ！！この王立学院図書館で魔導書をバラバラにするなど、不届きなことをしてかした者に目に物見せてくれよう！！>

そうだ、そうだ、天誅だ！！と口々に賛同する魔導書達にユーリは慌てる。

「待って！！待ってよ、みんな！！暴力は反対だからね！」

<なにい！？ユーリ！！お前一応司書のはしくれだろう！？魔導書がどれだけ希少か、お前にはわかってるだろう！？>

<そうだ、良い魔導書は我らの仲間になる可能性もある！！未来ある魔導書をコケにしたものには相応の報いを与えねばならん！！>

「ダメ！！人を傷つけてしまったらあなたたち、ここに居られなくなる！！人を傷つけるような魔導を魔導書が使ったって知られたら、本当にあなたたちは燃やされてしまっただってば！！」

ユーリが思わず叫ぶと魔導書達は押し黙る。

「バラバラにした犯人捜すより、まずはバラバラにされちゃった魔導書を探すほうが先！！」

それに、とユーリはやけくその様に定位置の椅子に座った。

「迷子の魔導書を元に戻さないとあたしは授業に出られないんだから！！！」

憤懣やる方ない口調でユーリは吐き捨てる。

そういえば、ユーリは大嫌いな副館長に魔導師を助けて魔導書を探すように命じられていたことを魔導書達は思い出す。

ああ、それで大好きなお茶休憩をティー・ブレイクここでしているのか。と魔導書達は納得する。

図書館内は飲食禁止だが、その法を破つても大好きなお茶休憩をティー・ブレイク作らないとやっていられないほどユーリはすすんでいるのだ。

<と、時にユーリや。おま、家に何を隠し持っている？>

「え？ああ、アレのこと？」

恐る恐る口を開いた魔導書にユーリは事も無げに応える。

「今日、魔導師にあたしが見つけた魔導書の１ページ、木箱に入ってた分は渡したんだけど、１枚だけ部屋に残ってたの。明日渡そうと思って、置いてるんだけど……」

<なにっ！？魔導書のページ！？>

<なんでここに持ってもなかった！？>

<見せる！！今すぐここで見せる！！>

魔導書達はそれを聞くと大騒ぎ始めた。

「わかった、わかった！！持ってくるから、ちょっと待って！！」

<これが、迷子の魔導書の１ページか>

持ってきた魔導書の１ページを魔導書達は興味深げに見下ろす。

しばらくすると魔導書達はざわざわと騒ぎ始めた。

<ふむ、皆のもの。やっぱりコレであるようだぞ？>

<ああ、コレだ。この感じだ>

「なに？どうしたの？みんな」

ユーリが問うと、魔導書達はどこか得意げに答え始めた。

<ワシらもな、この魔導書が起こした騒動に気付いた後、この図書館内の魔力に変化はないか調べてみたんじゃ>

<そしたら、小さいが魔力を含んだものが点々と存在していることに気付いた>

<感じられない魔力だったけど、小粒も小粒、粉粒ほどの魔力だったから、放置してたわけ>

「え？それっていつから！？ていうか、どこに？」

そのうち消えると思ってたもんね、と話している魔導書に声をかける。

<うーん。一般図書階あたり？>

<小さいから詳しくはわからないなあ>

<結構最近だよね>

魔導書の最近は全く当てにならない。(なにしろ、何百年も生きている)？(魔導書だ。時間感覚がかなり希薄なのだ)

けれど、彼らの魔力感知能力はそれなりに当てに出来る。

「やばいじゃない。それ……」

ユーリは足元がゆらりと傾いた気がして、椅子に座り込む。

魔導書を保管する魔導階、魔導による仕掛けがある専門階には魔導に対する防護、対抗のための安全装置がいくつも張り巡らされている。

だから、もし魔導師が魔導階でうっかり魔導書の魔導を発動させたとしても、魔導の効果は四分の一以下に下げられる。

しかし、一般図書階はそうした安全装置がほとんどない。

だからこそ、今日のような騒動が起こったともいえる。

もし、今回のような騒動が一般図書階で起こったら……。

ぞっと背中を冷たい汗が伝う。

今回はほとんどモノのない修繕室で起こったからいいものの、迷路のように本棚が張り巡らされた一般図書階であの惨事が起こったら
！！

ユーリはゴクリと喉を鳴らす。

魔導師がどういう方法で魔導書の1ページを探すのか知らないが、彼はここの造りをほとんど知らない。

どうしたものかと考え込むユーリをよそに、魔導書達は暢気に噂話を始める。

<うむ、しかし、なかなかいい魔導書だな？>

その言葉に次々と肯定の言葉が返る。

<込められた魔力もなかなかですが、何よりこの魔導の構築式も構造理論も無駄なく整っています>

<うん、完本の魔導書にぜひ会いたいな>

その言葉にユーリは目を丸くする。

気位の高い魔導書達が魔導書を褒めることは珍しい。

大体、この前来た魔導書のようにこき下ろしてけなしまくるのが常なのだ。

<でも、あの若い魔導師がここまでの理論に達するものかしら？>

<あ、それは思った。それにこの魔導書の魔力、明らかにあの魔導師の魔力とも違うし>

<師から貰い受けたものじゃないか？>

<いや、昔の恋人から貰ったものじゃないのか？>

<生き別れになった兄弟からかもよ？>

やいのやいのと自分勝手な解釈を魔導書達がするうちに、魔導師、アヴィリス・ツヴァイ「ネルーロウ・スフォルツィアには生き別れの両親や兄弟、果ては病気で死んだ運命の恋人がいる設定になった。

(どんな波乱な人生だ。アヴィリス魔導師……)

苦笑しながらマフィンを頬張る。

木苺ジャム入りのマフィンはユーリの好物だ。

甘酸っぱいジャムの風味としつとりと滑らかな生地は舌鼓をうつ。

いま、下手に魔導師達の話に茶々を入れると彼らの機嫌を損ねかねない。

(それより、魔導師はどうしようかなあ)

一般図書階に紛れ込んだ魔導師はやはり魔導師がいないとどうにもならないだろう。

(やっぱり、明日、魔導師と一緒に探すことになるのかなあ)

広大な一般図書階を歩き回るのを想像すると、想像だけでぐったりした。

一方。

<やっぱり、別れた恋人の女魔導師だつて>

<いや、禁断の関係を結んでしまった妹魔導師からかも知れんぞ>

<甘いな。魔導師を夫に持つ人妻が夫の目を盗んでこの魔導師を渡して、魔導師がこの魔導師を研究して偉くなったらその人妻と一緒になるって寸法だ!!!>

ゴバツ

おかしな所に紅茶が入ったユーリは噎せた。
鼻の奥がツンツと痛み、生理的に涙が浮かぶ。咳が止まらない。

(な、なにを、言って)

あの無表情魔導師が人妻と？

(あの魔導師が聞いたら絶対怒るよね)

いや、人は見かけによらないと聞く。もしかしたら……。

(熱愛中の恋人くらいいるよね。あの顔だし)

ここで考え込むあたりでユーリも魔導書達に毒されているのだろう。
残念ながら、本人はまだ気づいていないが。

ふと、やんややんやと騒ぐ魔導書を見ながら、ユーリはほっと安堵
したように息を吐く。

話題はいつの間にかやら今日来た魔導師の美形っぷりに関する話にな
っていた。

< なよなよ系の学者っぽい奴かと思ったら、意外としっかりしてる
じゃない >

<戦闘系の魔導従事者かのう？ユーリが言うには無詠唱で魔導の発動をしておったようだし>

<女っぽくないけど品のある顔してる男って希少よね>

<いや、ああゆづ品のいい顔してる奴ほど腹の中は真っ黒だって>

それは当たっている。

うんうんとユーリはうなずく。

<そうそう、ああいう奴ほど裏でいっぱい女を泣かせてるんだって
!!-->

<じゃあ、やっぱり魔導書は人妻からの贈り物か？>

<いや、生き別れの妹もよくねえ？>

初めは、ここに来るのは怖いし、面倒臭いし、嫌だった。そう、思っていたと、思う。

でも、あの時、ここが無くなるのは嫌だと思った。たとえば、クビになつたとしても、失いたくないと。

何百年も生きていくせにミーハーでゴシップ好きで下品な話題が好きで、ツッコミどころ満載で、わがままばかり言う魔導書達。その魔導書達が会ってみたいと言つた魔導書。

「どんな魔導書かなあ」

お祭りのように騒ぐ魔導書達を尻目に、ユーリはのんびりと紅茶を

味わう。
ぬるくなつた紅茶はちよつとほろ苦かつた。

どこからか、歌声を聴いた気がする。

藍色の髪を夜風に揺らしながら、魔導師は王立学院図書館を見つめる。

セフィールド学院内にある来客用の宿泊施設の一番いい部屋はあの副館長が用意したものだ。

最初は近くの宿泊施設を借りようと思つたが、図書館から近いため、ありがたく利用させてもらっている。

(しかし、こんなに早く探し物が見つかるとは、な)

さらりと木箱の中の魔導書の1ページを撫でる。

王立学院図書館の広さは王都でも有名だ。何日か泊まり込むことは覚悟していた。

しかし、王立学院図書館に着いた途端、副館長や女司書たちにべたべたされ、不愉快な思いをした拳句、この年で迷子になるという屈辱を受け、嫌になつた。

いざとなれば伝手を使って図書館を丸裸にしたのち、魔導書を探そうと思つていた。

いまとなつては副館長室で踏み止まってよかつたと断言できる。

(あの司書には、悪いことをしたがな)

黒にも見えるほど濃い栗色の髪と吸い込まれそうなほど深い漆黒の瞳を持つ女子学生。

小柄でひ弱な体つきでありながら、危険な場所に立ち向かう無謀な少女。

『禁制魔導書』階に連れていくと言った時には何の冗談かと思った。聞く気も行く気もなかったが、不快な思いをさせられた憂さ晴らしに少女を困らせてやろうと意地の悪い気持ちでついに行った。

どうせ、着いた先が『禁制魔導書』階だと証明できるものはない。そう、高をくくって着いて行った先は、異世界だった。

一般公開されている魔導書階でさえ魔導にあふれ、その上隠し通路や隠し部屋の宝庫だ。

図書館を丸裸にして魔導書を探せばいいという甘い考えは消し飛んだ。

迷子が続出する、その理由を本当の意味で理解した。

そして、その上でこの王立学院図書館を理解している協力者が必要だと思った。

バラバラにされた魔導書を見てきつく目を閉じる。

学生の身で無理を強いるのは承知の上だ。

しかし、こちらにも引くことは出来ない。

この、魔導書は大事な、大事な。

「」

魔導師は声にならない声で呼んだ。

その声にならない声を聞いたように、バラバラにされた魔導書の1ページ達はざわめいた。

10P 夜のお茶休憩（後書き）

11Pミッション・イン・ポッシブル

次の日。

「それで？どこから探すんですか？」

「……」

朝、開館時間になると魔導師、アヴィリスは一番にやって来て、開館前準備を手伝っていたユーリを驚かせた。

とりあえず2人して図書館入り口の大ホールのソファで作戦会議。

だが、

「もしかして、無計画ノープラン？」

昨日と同じく無表情だが、若干目を逸らせ気味のアヴィリスを見て、恐る恐る聞く。

すると、アヴィリスはバツが悪そうに今度こそ目を逸らせた。嫌な予感、大的中。

話をよく聞くと、アヴィリスは昨日の夜、魔導での探索術を使ってみたが、図書館内のどこにあるのか全く分からなかったらしい。

昨日の司書たちはこんな初歩的なことも魔導師に教えていなかったらしい。

「あの〜。ここ、魔導が張り巡らされている分、魔導的なものにごく敏感になるよう作られていて……」

ユーリは大雑把にこの図書館には魔導をうまく使えないよう細工がしてあること、魔導師に渡す図書カードには魔導師の魔力を制限する機能が付いていることを簡単に説明した。

アヴィリスは昨日とは打って変わって、無表情ながらもきちんと話を聞いてくれた。

「と、言うわけで、魔導師には窮屈な場所ですけど、ご了承ください
い」

司書見習いのおきに叩きこまれたマニュアル通りの口調で魔導師に伝える。

「わかった」

うなずいてくれたはいいが、この後どうするか。

王立学院図書館の広大さは折り紙つきだ。

この中から闇雲に魔導書の1ページを探しまわっても時間ばかりかかるだけだ。

そうこうするうちに魔導書の1ページが市民の手に渡ったら、大惨事だ。

（ただでさえ、魔導書が一般図書階にあるって魔導書達が言ってるのに！！）

のんびりしている暇はない。

アヴィリスもそう思っているのか、顔を引き締めてユーリを見た。

「昨日の騒ぎが起こった部屋にあった魔導書のことなんだが」

「あ、それで思い出しました。はい。これ、落ちてましたよ」

ユーリが持っていた1ページをアヴィリスに渡す。

「一応司書たちにもあの後、気をつけて探すように伝達はしてあるんですけど、一体魔導書は何ページあるんですか？」

「2800枚」

「にっ!?!」

2800枚。2000枚と800枚をこのやたらめったら広い、隠し部屋が多い王立学院図書館で見つけると言うのか。

しかも、無計画ノープラン、情報なしノーヒントで!!

「あの、果てしなく無謀なこと言ってるって気づいています?」

「何日か、ここの来客用の宿泊施設で泊まり込む」

「この場合、休暇期限が切れても、王都に帰れないことを覚悟して下さいね」

つい冷たくなってしまった口調にアヴィリスはムツとしたようだが、口をつぐむ。

「君には迷惑をかける」

表情は硬いながらも、どうやら謝罪（？）してくれているようだ。副館長のように自分に従うのが当然とされているような傲慢な態度を、彼がとらなかつたことに少し好感度アップだ。

「魔導書が昨日みたいに大暴れされるほうが困るんで、協力はしますよ」

そのかわり、とユーリは魔導師に笑いかける。

「王都で王立学院図書館のすごさ、言い広めてくださいね？」
アヴィリスはどこかニヒルに口角を上げてうなずく。

「そうしよう」

ちょうど空気が和んだところでアヴィリスは口調を改めた。

「ところで、昨日魔導の被害を受けた部屋なんですが」

「修繕室が、何か？」

「あの部屋は誰でも入れるものなのか？」

「いいえ？あそこに入れるのは司書のみです。一般の人は立ち入れません」

「魔導師でもか？」

「転移系の魔導を封じる細工があるんです。昨日動かしたタイルみたいに」

そう言うと、魔導師の表情が渋くなる。

気を悪くするかもしれないが、という前置きの後、アヴィリスは話し始めた。

「昨日、ロランという司書から聞いたところによると、今回修繕に回された本のほとんどが一般図書階の返却図書を保管する本棚にあったものらしい」

その話はユーリもロランから聞いた。

返却された本は基本的に借りた図書があった階に行つて帰すのが基本だが、一階の中央カウンターには各図書階に通じるポストがあり、そこに本を入れると各階に本が届く仕組みになっている。

返却された本はその階で修繕が必要な本とそのまま書架に戻る本に分けられ、貸し出しがされることになっているのだ。

しかし、修繕に回す図書をより分ける仕事をする司書と本の保存状態を確認する司書まで仕事をおろそかにしたせいで、修繕しなければならぬ図書まで出回った。

その悪事は一週間ほどで他の司書によって明かされたのだが、一般図書階の司書たちは三日間通常業務に加えて修繕図書を探しまわるはめになった。

結果としてロランがうんざりするほどの修繕図書が山のように積み上がったのだ。

たまたま、授業の都合で仕事を休んでいたユーリはそのことを知らなかったのだが……。

「悪いが、俺は司書の中に魔導書をばら撒いた奴がいると、思っている」

「え」

嘘だ、と否定する声が口の中で消えた。

返却図書を保管する棚は、図書館関係者しか中に入れないバックヤードにある。

それに、返却と保管業務の司書がどれだけサボろうとも何か挟まっていれば、さすがに気づく。

けれど、魔導書の1ページは修繕室でようやく見つかった。つまり、それは。

「修繕のために保管していた図書の中に魔導書の1ページを紛れ込ませた？」

「大方、捨てられる本だと思っていたのではないか、というのが口ラン司書の見解だ」

「司書の中には貴族出身の人もいますからね」
苦笑しながら、ユーリは溜息をつく。

壊れた本の中に入れておけば、そのまま捨てられるだろうと思って
いたのだろう。

「だが、その反面、俺はばら撒かれたページはフエイク罫だと思っている」
「罫？」

怪訝そうに訊き返すと、魔導師はうなずく。

「表紙さえ見つければ、魔導書を元に戻せる。もちろん、手元にある程度の魔導書のページは必要だが」

「そうなんですか？じゃあ、表紙を優先して探すべきですよね？」

訊き返すとアヴィリスはぐったりと溜息をついた。

「表紙の魔力をたどった先がここだったんだが……」

結局、探すものが多少変わったただけで結果は一緒らしい。がっくりとうなだれたユーリはぼやく。

「何で魔導書のページをばら撒くのよ。何の罪もない市民を危険にさらして良心は痛まないわけ？」

「良心のある奴が人の魔導書を盗んでばら撒くかつ」
ムツと眉を寄せてアヴィリスは言い捨てる。
けれど、ふと、思案顔で宙を睨んだ。

「いや、表紙の魔力を弱らせるため、か？ 罔に気を取られて探しまわっていれば、完本じゃない魔導書の表紙はほとんど魔力が低下する。さすがに表紙の魔力が無くなってしまえば、魔導書を元に戻すことが難しくなる」

それこそ、とアヴィリスはどこか途方に暮れた顔で大ホールの天井を見上げる。

「本当に2800枚の魔導書を自力で探し回る事になるだろうな。
この王立学院図書館で」

「家に帰れなくなるフラグ確定ですよ。王都の宮廷魔導師さん」

「お前は授業に出れずに留年するフラグ確定だな。司書見習いの女子学生」

お互い睨みあっていたが、ふと、ユーリが笑いだした。

「なんだ。そっちが素なんだ」

「は？」

「さつきから喋るごとに口調が砕けてきてるよ。魔導師さん」
ついでに表情も、とユーリは付け足す。

「お前も口調が崩壊してきているぞ、それに、アヴィリスでいい」

アヴィリスは言い捨てると仏頂面に戻った。

「戻したほうがいい？」

「いや、昨日の今日でいまさらだ。好きにしる」

拗ねたようにそっぽを向いたアヴィリスを見て、ほつと息を吐く。

「あなた、口調が砕けたほうがいいよ。昨日のあなたはちょっと怖かった」

「それは、悪かったな」

本人を前にして堂々と『怖い』などというあたり、ユーリは結構肝が座っている。

「で、魔導書を完本にするのに必要な魔導書のページってあと何枚ですか？」

「いま、手元にあるのが15枚。最低でもあと100枚くらいはいるな」

事も無げに言つてのけた魔導師にユーリはがっくりと頭を下げる。

あと、100枚。このとんでもなく広大な図書館で、あと100枚。

2800枚よりマシだ。マシだと言い聞かせながら、ユーリは心を決める。

とにかく、一般図書館階の魔導書のページだけでもどうにかしなければ

ばならない。

けれど、王都から来た宮廷魔導師のくせにアヴィリスは微妙に役に立たない。

しかし、無計画ノープラン、無情報では魔導書のページは見つけられない。

（『禁制魔導書』階の魔導書達に助けてもらおう）

<で、結局、今日は魔導師と図書館巡りをしただけか>

「うん。でも、アヴィリスさん『図書館の細工をくぐり抜けられる魔導書を見つける』って真剣に図書館まわってたよ」

<馬鹿じゃねえか？>

ユーリは今夜も『禁制魔導書』階にいた。

魔導書達は今夜もさわさわとおしゃべりをしながらユーリを出迎えた。

<ところで、ユーリその箱は何だ？>

今日、ユーリが持ってきたのはストレス発散のためのお茶とお菓子ティー・セットや学術院のレポートでもなく、白や茶色の紙で出来た箱。

この王立学院図書館で本を整理するのに使う本立てブックエンドに似ている気がする。

「みんな。力を貸してほしいの」

ユーリは魔導書達を見まわしながら言う。

「この王立学院図書館のどこに魔導書のページがあるのか、わかるのはもうあなたたちだけ。この図書館を守るために、この箱の中に入れてほしいの」

ユーリが考え付いたのは、『禁制魔導書』達をブックエンドのふりをさせ、一般図書階、専門階、魔導書階にばら撒くこと。

そうすれば、この『禁制魔導書』階の結界で阻まれてあやふやな彼らの魔力探知能力もより確実になる。

もちろん、リスクは高い。

魔導書達が真面目に探してくれるかも危ういし、その上、彼らの魔力の高さも問題といえれば問題だ。

うっかり外装が剥がれて『禁制魔導書』とバレてしまえば持ち逃げされる危険もある。

幸い、明日1日乗りきれば、明後日は休館日。

(あとは、魔導書達が乗り気になってくれれば……………!!)

<外に、出るのか……………!!>

魔導書達は一斉に浮足立った。

「でも、外に出れるのは30冊だけ。しかも、この中に入れる大きさで、魔力はもちろん最低限に抑えなきゃダメ」

ユーリがそう付け加えると、非難と歓声がわき上がった。

<なんじゃ、つまらん。ワシは無理じゃな>

<あ、おれはいけるぞ>

<わたしも、ぎりぎり行けるかしら？>

厳選に次ぐ厳選と公正なるくじ引きの結果、栄えある30冊が決まり、偽装が施された。

「いい？みんな。ちゃんと魔導書のページを探してあげてね？」

<おう、任せとけ！！>

<土産話、してくれよ～>

ユーリは30冊の『禁制魔導書』と共に夜の図書館を駆け回って、魔導書捕獲網を仕掛ける。

さあ、ミッション・スタートだ！！

12P 赤点のテストの隠し場所

一般図書階は本棚で出来た迷路だ。

部屋の内装自体はそれなりに品よく、居心地がよい様に整えられているにかかわらず、専門階や魔導階と並ぶ異様さで利用者たちを圧巻する。

しかし、今日は利用者もなく、図書館はがらんと静まっている。

「ユーリ」

昼食を終え、図書館に戻ったユーリは名前を呼ばれて立ち止まる。図書館の門の前に女学生が四人いた。

「なんだ。アリナとフィーナ、それにセリーズとマイ。どうしたの？」

いいながら、ユーリはほっと息を吐く。

「セリーズとマイからユーリが学院を休んでるって聞いたから来てみたよ」

フィーナがフレームのない眼鏡をちょっと押し上げてユーリを見まわす。

元気そうで良かったよ。とちょっとそっけなく言うフィーナの胸には医療科の生徒であると示す青いエンブレムがかかっている。

「図書館で魔導が暴走したのでしょうか？心配していたのよ」

アリナが言うとフィーナの隣からマイとセリーズが顔を出す。

「ねえねえ、その事件、宮廷魔導師が解決したって本当!？」

「どんな人!？どんな人!？ねえ、ねえ!！」

亜麻色の髪 of 少女と淡い茶色の髪 of 少女の興奮した様子でユーリに詰め寄る。

「え?あの、ちょっと、あたしこれから仕事が……」

「その仕事、宮廷魔導師の手伝いだって本当!？」

きらきらと好奇心で輝く目で見つめられ、詰め寄られ、ユーリは口をつぐむ。

普通科でよく同じ授業を受けることのある2人だが、それほど親しいわけではない。

むしろ、真剣に心配してくれているのは他の学科から来たアリナとフィーナだろう。

2人はそれに便乗して、王都から来た宮廷魔導師のことを知りたいらしい。

「ねえ、どんな人よ。教えなさいよ」

視線が険悪になってきた二人にどう対処するか真剣に考えていると、腰のポーチに入れたトランシーバーが鳴った。

『ユーリ、来てくれないか?少し訊きたいことがある』

「はい」

アヴィリスの声に短く応えたユーリは四人に向き直った。

「ごめん。仕事に行かないといけないから、今日はこれで……。心配してくれてありがとう」

「ええ！？待ってよ。宮廷魔導師様のこと教えてよ！！」

「すごい美人なんですよ！！どんな人！？」

ユーリの進路を塞ぐように立った二人にとうとう、アリナの我慢が切れた。

「あなたたち。いい加減になさいな。ユーリは仕事だとわからないの！？」

貴族然とした物言いにシリーズとマイが不満げに黙る。

「あんた達、本を返しに来たんじゃなかったっけ」

フィーナに指摘された二人はユーリに持っていた本を渡す。

「はい。確かに、一般図書階に返しておくね。今日は心配してくれてありがとう」

ユーリは二人に向かってにこやかに笑い、アリナとフィーナの横を通り抜ける際、

「ありがとう。助かったよ」

そう言つて、セリーズやマイに向けた笑みとは違つ、安堵したような笑みを授けて図書館の本棚の中に消えた。

「いつも通りみたいだね」

「ええ、本当に」

少しばかり呆れた様にアリナは溜息を吐き、ぶつぶつ文句を垂れるセリーズとマイを睨みつける。

アリナの吊り上がった眼力に二人は縮こまって図書館を去っていく。

「『あたしたちもユーリが心配だもん』はやはりウソでしたか」

「あはは、困つたもんだねえ」

暢気に笑うフィーナをアリナが不満げに見下ろす。

小柄な医療科の女学生は苦笑しながら、ひとつに結わえた真っ直ぐな赤髪を耳にかける。

「三年前の戦争で“純白の魔王”つて呼ばれた隣国の大魔導師を破つた“英雄”アヴィリス・ツヴァイ・ネルーロウ・スフォルツィア。会つてみたいって思う気持ちはわかるよ」

でしょう？と訊き返されてアリナはそっぽを向く。

「ユーリは元気そうでしたし、私たちも行きますわよ」

貴族らしい毅然とした足取りで前に行くアリナをフィーナが肩をすくめて続く。

学生である二人は今日は図書館の中に入ることはできない。

王立学院図書館の門の前には『休館日』と看板が立っていた。

アヴィリスは魔導階のカウンター内で入荷した魔導書の一覧を見ていた。

ユーリからの提案で、ユーリと司書たちが魔導書のページの搜索、アヴィリスは表紙の搜索をするよう二手に分けることにした。

王立学院図書館は迷路のように入り組み、広大だ。魔導師とはいえ、なにも知らない人にうろつろつされて迷子になれるのは困る。ということらしい。

若干、蚊帳の外に押し出された気がしないでもないが、しかたがない。

実際、司書たちはよく働いてくれていて、いくつかの魔導書のページを探し出してくれた。

昨日よりはるかに早いペースで魔導書のページが集まってくる。

(本当に能力に差があるらしいな)

ちらりと顔を上げると、その視線の先に魔導階の本棚を引き出し、丁寧に魔導書の整理を行う老司書がいた。

今日、魔導階でユーリから紹介されたギズーノン・ドライ・セル・ベルツという老紳士だ。

彼は実地的確にアヴィリスの質問に答え、必要な資料を集めてくれ

た。
アヴィリスの魔導書が紛失した日から、この王立学院図書館に入荷した魔導書一覧もギズーノン司書が集めてくれたもので、本当に助かっている。

（表紙が見つからなかったら、本当に魔導書は元に戻らないだろうな）

もはや決定された悪夢を見ないようにしながら、希望の網たる一覧を見つめる。

隠し部屋や隠し通路が多いこの図書館で、たった一冊の魔導書の表紙を隠すことくらい簡単だろう。

（それにしても、魔導書のページはすぐに見つかったが……）

ふと、アヴィリスは足元の小さなトランクを見下ろす。

魔導書をバラバラにして一枚ずつ隠すのは簡単だっただろう。

なにしろ広大な王立学院図書館だ。その上、隠し部屋がある。

それなのに、魔導書のページを隠した（？）犯人はさっさと捨てられることを願って失敗した。

（魔導書のページを持っていることが怖くなったか？）

それにしても、引っかかる。

怖いなら、魔導書階に隠せばいいだろう。

知識と探求心に飢えまくった魔導師がわんさかやってくる魔導階、

魔導書の1ページを魔導師が見つけたら持ち逃げされることは必至だ。

それに、この階には嚴重に魔導封じの細工がされてある。

この前の魔導書の事件も、ここでなら起こらなかっただろう。

どうにも、今回のことは司書も1枚噛んでいるようなのだが、それにしてはずいぶんお粗末な隠し方しかしていない気がする。

例えば、あのユーリに魔導書のページを隠されでもしたら、二度と魔導書は元に戻らないと断言できる。

(犯人はそれほどこの図書館に詳しくない?)

「ギズーノン司書」

「はい、何でしょう?」

綺麗な白髪をきちんと撫でつけ、目尻に皺が浮く鳶色の瞳の老紳士は70歳近い老人と思えないきびきびとした歩調でこちらに寄ってくる。

「この司書たちはどの程度、図書館に詳しいんだ?」

「どの程度、ですか……」

問うと、きょとんと老司書は目を丸くして考え込む。

「そう、……ですね。大体、専門階、魔導階を走り回る司書はほとんど大体の図書館の仕組みに詳しいですよ」

「魔導書階でも、専門階でも迷うことなく動き回れる。と?」

「ええ、あなたが初日でされたようなことは……」

口を継いで出てしまった言葉にギズーノンは気まずそうに言葉を濁す。

「少しばかり、特殊です」

曖昧な表現で返ってきた言葉にアヴィリスはなるべく無関心を装って問う。

「一般図書階の司書たちは専門階や魔導階の構造に詳しくない。と？」

「……………それも一部の司書だけのものであると思いたいのが、本音でございませうが……………」

やけに長い沈黙の後、好々爺な老司書は苦虫を噛み潰したかのように呟く。

「専門階や魔導階の構造が全くわからない司書もいることは確かです」

貴族の家に仕える執事を思わせる美しい所作で嘆かわしげに頭を振るギズーノンをそれ以上問い詰めはせず、アヴィリスはギズーノンからトランシーバーを借りてユーリを呼び出す。

「どうしたんですか？アヴィリスさん」

呼ばれた魔導階のバックヤード。

その一室でギズーノン司書とアヴィリスが難しい顔で机の上をにらんでいる。

机の上には簡易の図書館の見取り図が載っている。

「これを見てくれ」

示されたのは一般図書階の見取り図。

迷路のように並んだ本棚の間に赤いバツテン印がぼつぼつと記されている。

「この印が見つかった魔導書のページがあった場所」

バックヤードの修繕室にはひときわ大きなバツテン印がされている。なるほど、とユーリが見取り図を覗き込む。

「あ、ここと、ここにも魔導書のページがありましたよ」

返します。と言いながら、ごそごそと紺色のエプロンから魔導書のページを出す。

渡されたページは司書たちの中でもダントツに多い。

アヴィリスは渡された魔導書の束を見ながら、問う。

「ユーリ、お前一体どうやって魔導書のページを探してるんだ？」

「……………カン？」

魔導書たちに助けてもらってる。なんて言える訳がない。

しかし、隠された魔導書を探すうち、ユーリには大体どこに隠されているのか読めてきた。

「大体、人が入ってこないようなことう行き止まりの所や、辞書しか置いてないような所とか、人の出入りが少ない所にあるような

んです」

ユーリが指差したところには確かに魔導書のページが見つかった。
いる。

「特に上の方の本棚とか、本棚の上に何枚かピンで留めてありま
したよ」

ほら、と指差された魔導書にはピンの跡がついている。

「……………試験で赤点をとった子供じゃあるまいし」

沈痛な表情でギズーノンはこめかみを押さえた。

魔導書と一緒に見つかった赤点の答案用紙は忘れ物を入れる箱の中
に入れておいた。

恥ずかしい成績が人々に見られる前に持ち主が見つけてくれること
を祈るばかりだ。

一方、試験で赤点など取った事のないアヴィリスだが、ギズーノン
司書の言いたいことはわかる気がする。

隠し場所が就学前の子供レベルだ。

「ところで、ユーリ、気になるところがあるだろうか？」

「気になる？」

ユーリは地図を見回してみるが、特におかしなところはない。

「どこか、おかしいですか？」

「お前が魔導書のページを隠すとしたら、人目のある一般図書階に

隠すか？」

「あ」

ぽんつとユーリが手を打つ。

探すのに夢中で、そこまで考えなかった。

そういえば、今のところ一般図書階以外で魔導書のページは見つからない。

「そっか、隠し部屋とかに隠してしまえばいいんですね。そうしたら永久に見つからないし」

しかし、今回の犯人は一般図書階にしかページをばら撒いていない。つまり、

「魔導書をバラバラにしたのは間違いなく魔導師だが、ページをばら撒いたのは別の人物で、しかもあまり図書館に詳しくない」

しかも、司書であることは聡明なギズーノン司書は気づいているだろう。

苦い顔のギズーノン司書を見たアヴィリスはユーリに声をかけ、一枚の紙を渡す。

「ここに記されている魔導書を一度調べたい。持ってきてくれるか？」

「お安い御用です」

魔導書探しにようやく日の光がさして見えた。

13P 魔導書たちの矜持（前書き）

魔導書たちのおしゃべりタイムです。

二話連続です。

若干、差別的な表現が入ってしまいます。

13P 魔導書たちの矜持

<ふむ、しかし、調べた魔導書の中にめぼしい魔導書はなかった。>

ユーリは今日も『禁制魔導書』階に来ていた。

と、言うよりもばら撒いていた魔導書たちを回収し、元の棚に戻しに来たのだ。

幸い、魔導書たちは一冊も欠けることなく本棚に戻ってこれた。

「うん。まあね」

ユーリは少し残念そうに溜息を吐く。

結局、魔導師が一覧に書き記した魔導書からめぼしい魔導書は見つからなかった。

とりあえず、また明日、今日調べ切れなかった分の魔導書を調べることになったのだが、ユーリの表情は明るい。

「でも！！図書館中に散らばっていた魔導書のページはもうなくなつたんでしょ？魔導書を元に戻すのに必要な分の魔導書のページも集まったみたいだし、後は表紙を見つけるだけ！！」

ユーリはううんと背伸びをしてふかふかのソファに倒れこむ。

図書館中を走り回って疲れたことには疲れたが、達成感もある。

「司書としてやることはやったし、後は魔導師さんががんばってくれるでしょ〜」

のほほんとしてソファの上でユーリはのんびりする。

一方、魔導書たちは二日間見聞きして集めてきた話を留守番をしていた魔導書たちに披露していた。

<あの魔導師は四年前に終結した戦争で“純白の魔王”と呼ばれた隣国の大魔導師を破った“英雄”だそうだ>

それを皮切りに、魔導書達はアヴィリス魔導師と、彼を取り巻くお家事情に興味深々で話し始めた。

アヴィリスは入学試験が難しく、選ばれた人間しか入学できないとされる王立魔導学術院にストレート合格して、類稀なる才能でもって飛び級に飛び級を重ねてたった五年で王立魔導学術院を卒業。当時王都で一番の宮廷魔導師オリヴァー・クエロリアルス・ネルーロウ師の二番弟子として、王都で暮らし、軍に入り、二十歳そこで魔導専門の一個師団の長を勤め上げていた。そして、終戦後から宮廷魔導師として王に仕えているらしい。

<そのせいで宮廷魔導師としてはずいぶん浮いているらしいねえ>

「軍属だった魔導師が宮廷魔導師になるのっておかしいの？」
何故？と首を傾げるユーリに魔導書達が知識を披露してくれた。

魔導師にとって、魔導は『世界の真理』へ繋がる道標であり、『崇高なる知識』の欠片でもある。

それを『万人のため』に使うのではなく、万人を傷つける戦争に使う『軍属』魔導師は魔導師達にとって嫌悪の対象らしい。

特に魔導を『崇高なる』モノとしている貴族出身の魔導師や、王の

御許で魔導の研究を許された宮廷魔導師にはその傾向が強い。……らしい。

それゆえに、魔導師たちは『軍属』の魔導師を、『墮落した蛇』と呼ぶ。

「……………」

なんだか、胸の奥にずんつと鉛のようなものが押し掛かった気分だ。国を守って、魔導を使った魔導師がそのような蔑称を使われているなんて知りたくなかった。

しかし、魔導書たちは俄然あのアヴィリス魔導師と彼を取り巻く周囲とその背景に夢中だ。

<あの魔導師は親に幼いころに捨てられ、王立魔導学院に入るまでの出自が知れないらしいねえ>

<ああ、その話は私も聞いた。そのせいで何かとやつかみも多いそうだ>

<と、言うことは今回魔導書をバラバラにした奴は、魔導師に恨みを持ってやるやつか>

魔導書達がちよつと黙る。

<おれが聞いた話だと、貴族出身でちょうど同じ時期に魔導師になった魔導師たちが何人かいるらしい>

魔導書達が次々にあげる魔導師の名の中にはアヴィリスから頼まれて探した魔導書の著者と同じ名がいくつも出てきた。

アヴィリスはアヴィリスで自分の立場を重々承知していたらしい。

< 兄弟子や弟弟子たちもあの魔導師を面白く思っていないわな >

< いや、魔導師たちからの噂によると、弟子たちの仲は悪くないらしい >

< ふん。そりゃあ、人目のあるところでは仲良くせざるを得ないだろうさ。師匠の面目を潰す様な事、弟子がするはずないじゃないさ >

< そういえば、王都から1人魔導師が来ているらしいぞ? >

アヴィリスの事ではなく、別に観光目的で王都から魔導師が来ていることを魔導師たちが噂し合っていたらしい。

< なんでも、見目のいい好青年らしいな。振る舞いが貴族らしくて、いい男ぶりだったらしい。名前は、る、る、ルキアルレス >

< ルキアルレスとはあのへんてこ魔導師を書いた魔導師だったなあ >

< ああ、そういえば、そうだったね >

< そういえば、近頃あれの気配は感じないが、どうしてるんだい? >

「あの魔導書なら『一級魔導書』階に置く事になって、いまはアリナが借りてるよ」

< アリナが? あの娘は確かセイス師の弟子だろう? 占星系の魔導は分野違いじゃないか? >

<あの娘はもつぱら四大元素からなる魔力、特に火炎系の魔導の利
用を得意としておったはずだろう？『一級魔導書』からの情報だ。
間違いは無い>

『禁制魔導書』クラスの魔導書になると、ある程度高い魔力を持つ
た魔導書と意思の疎通ができるらしい。

きつと、『一級魔導書』達からユーリの友人であるアリナのことも
聞いたのだろう。

「うん。分野違いで、アリナは占星系の魔導はほとんど使えないし、
精度も悪いみたいなんだけど」

アリナは占いが大好きだ。

「『星が過去を、未来を知っている。その叡智を手に入れる法なん
て神秘的で素敵』なんだって」

<まあた、メルヘンな>

<貴族の小娘は夢見がちだな。そんなんじゃあ『世界の真理』に到
達できないぞ>

「あなたちも充分メルヘンな存在だけどね」

鼻で笑う魔導書達にユーリはムツと言い返した。

<あゝんな魔導書のどこがいいんじゃ？>

<魔導師の顔がよかつたんじゃねえか？おれを作った魔導師なんか残念な顔だったもんだから、魔導書が売れなくてなあ。それで、一発逆転目指して媚薬研究に没頭してた時期があったな。』王国中の女を侍らせてハーレムの魔導王になる！！』て>

「それは、顔うんぬんより魔導師の性格に難があるんじゃない？つか、そんな馬鹿なこと言う魔導師が作った魔導書が何でここにあるの！？あんたたちの魔導師って本当に歴代最高の魔導師だったわけ！？」

<魔導師にも、イロイロあつたんじゃ>

「あんたら作った魔導師たち、むちゃくちゃイロモノぞろいじゃない！！幼女趣味とか恐妻家とか！！」

<幼女趣味言うな！！あいつはかゝいらしくい男の子も大好きだったぞ！！>

「余計悪いわ！！」

<節操無いのはよくないぞ。ワシを作った魔導師は綺麗で可憐な男の弟子をそれはもうたっぷり困っ…>

「やめてくれない！？この話はやめてくれない！？あたしまだ15歳だから！！18歳以上になってからにしない！？」

ユーリがわめくと魔導書達は不満げに黙った。

<しかし、あの魔導書を作った魔導師より我らを作った魔導師のほうが優れておるのは確かじゃぞ？ユーリや>

しんつと静まった部屋にその声がぼつりと響く。

ユーリは、ハッと周りの魔導書達を見まわす。

魔導書達は静かにユーリを見下ろしていた。

威厳。

そして、矜持。

魔導書達はどれほど自分を作った魔導師がイロモノだろうと、自分を作った魔導師に並々ならぬ誇りを持っている。

だから、けして妥協しない。

どれほど魔導師が変わりモノでも、胸を張って自分を作った魔導師を語る。

<そうだ！！あんなモノ作って世に出すなど、よほど気が狂った魔導師しかあり得ん！！>

<あの魔導書は、魔導書などではない！！>

同意する声があったるところから聞こえる。

新しく入ってきた『一級魔導書』をここまで魔導書達が嫌うのは珍しい。

魔導書たちは魔力の強い魔導書に一定の敬意を払う。

けれど、ルキアルレスの魔導書は始めから、魔導書たちに嫌悪されていた。

(どう、して?)

魔導書達は口々に言う。

<あれは、魔導書の形を被ったまがいものだ!!>

14P 魔導書達の噂(前書き)

14P 魔導書達の噂

ルキアルレス著の魔導書批判に飽きた魔導書はまたアヴィリス魔導師が探す魔導書に注意が向いた。

<そういえば、魔導師は司書の中に犯人がいると考えているんだろ
う?>

問いかけられたユーリは不承不承うなずく。

その話を聞いた途端、魔導書たちは色めき立った。

<なんと!! 図書を守る司書が魔導書をバラバラにする手助けをし
ただと!?!>

<ゆるせん!! 見つけ出して成敗してくれ!!>

轟々と嵐のような非難と怒りの声をユーリが必死で切り裂く。

「ちょっと!! 暴力は反対だからね!! それに司書は、魔導書のペ
ージをばら撒くのを手伝った、共犯者だろうって話だよ」

<魔導師と協力?>

<一介の司書が、か?>

訝しげな様子で魔導書が黙る。

<司書の中には貴族出身の奴もいるからねえ、ちょいっと甘い言葉

で誑かすくらい簡単さねえ>

<没落した司書の娘には王都で働く魔導師は、そりゃあ、立派に見えるだろっさ>

アヴィリスを案内しようとして迷子になった副館長や、アヴィリスが頼んだ本を探せずに迷子になった司書たちをあげつらったの言葉だろっ。

ユーリは苦笑するしかない。

確かに、司書として働く人の中には貴族出身の人がいる。

礼儀作法を学び、ついでに書物への造詣を養うために来ている彼らは、仕事ぶりがいまいちよくない。

それどころか、問題を起こすこともあり、司書を監督する立場であるギズーノン司書を困らせている。

もちろん、ギズーノンのように一生懸命働く人もいるので一概に貴族出身者が悪いとは言えないのだが…、魔導書たちに反論も出来ないのは確かだ。

<魔導師様に一言褒めてもらおうと、やっきになる司書たちの面白かった事!!>

その一言を皮切りに、魔導書たちはこの二日間の司書たちの奮闘ぶりを面白おかしく話し始めた。

<フローレスがねえ、普段慣れない専門階に入り込んで!!渡り廊下が動き始めた途端、死にそんな悲鳴をあげて!!>

<セイズなんか魔導階で本棚を引き出せずにレリーフに手を齧られ

て泣きべそをかいてたよ>

<貴族出身の男は根性が無いねえ>

「くいやいや、庶民出の男も似たり寄ったりさ。ブレイイなんかレリーフを動かせたは良いが出てきた本棚に腰抜かして泡吹いてたよ>

<男はだらし無いねえ、女はしたたかだよ？シーリンなんか、シーズが見つけた魔導書のページを何枚かちよるまかして魔導師に渡してたよ>

「げ」

ユーリは気の優しいそうな男性司書とおっとりとした聖女のような女性司書の姿を思い出してうめく。
深窓の姫君と言ってもおかしくない可憐な美少女の悪行に凍りついた。

<うわあ、怖いのが。女って>

「くいやいや、乳の谷間をチラ見せされただけででれでれして魔導書のページ預けるシーズも情けないさ>

（う、でも、女のあたしでも羨ましいくらいシーリンの胸元は立派……じゃない！！ない！！）

ぶんぶんとう首を振って、ユーリは魔導書に言う。

「乳っていつのやめてくれない？」

ユーリにふと魔導書たちの視線が向く。

「な、何？」

一斉に向いた視線にユーリがたじろぐと、魔導書たちは一斉に溜息を吐いた。

<いや、ユーリ。……がんばれ>

何だか、一斉に視線を逸らされた気がする。

<一応まだ15でしょう？がんばればまだ大きくなりますよ>

「ちよ、何をがんばれと？」

何だか、こう、ムカツとするのは何故なのでせうね？

<いや、無理だろう？もう15であの寂しさじゃあ、希望は無いだろう>

<胸元のふくらみが幸せの源じゃないわ、ユーリ>

「……………人を見て、何を言うと思ったら、人の胸元の話かい！？人の胸見て溜息吐いたのか、あんたらは！！！」

思わず声を荒げると、気遣わしげ(?)に魔導書達が言う。

<何、胸元にふくらみが無くても、お前は司書としての腕はまあまあ良いから良いではないか>

<しかし、夢も希望も無いふくらみだな。お前の胸元は>

「うつさい!」

最後の発言をした魔導書をユーリは思いっきり睨む。

「あなた達、これ以上あたしの胸に文句つけるんだったら、もう新聞持ってこないからね!? ラジオニュースもなし!」

ギツと睨むと、さすがに魔導書たちも黙る。

<そうじゃ、女は胸じゃなくてし……>

「や、め、な、さ、い!」

ユーリの眼光に危険を察知したのか、魔導書たちは白々しく話を交える。

<そ、そういえば、名誉挽回・汚名返上を狙ってた副館長はどうした?>

<一番だらしなのは副館長だよ>

<あいつは一般図書階でも迷子になりかけていたんだから>

<うわあ、あいつなんで副館長になれたんだ?>

<司書たちが言うには、もとは王都の小役人だったそうだが、政戦に敗れた、というより、他人の尻にくっついて甘い汁を吸おうとしていたのが、目論見が外れて王都で居場所がなくなっただけなんだ>

それで、セフィールド大学院の理事の一人だった兄だか姉だかに泣きついて、この王立学院図書館の副館長になつたらしい。

<しこたま賄賂でも贈つたんだらう>

<まったく、エリアーゼも使えない者をよくまあ、困い込むこと>
魔導書たちは憂いがちに溜息を吐く。

<何とやらと鉄は使いようって言うだらう？金しかない馬鹿な理事やら貴族やらを黙らせるのにあいつらを使ってるんだらうって、口ランが言つてたらしいぜ>

<まあ、今回の件で副館長はどんどん窓際に追い立てられるだらうつてな>

<それでも居座るあたり、図太いねえ>

(うわあ)

ユーリは知らず顔をひきつらせる。
そんな学内裏事情知りたくなかった。

(あたしは一介の司書見習いで勤労女子学生なのに！！)

<まったく、ここの司書は実にはだらしが無いな>

憤然とある魔導書が言う。

<よく仕事をサボるしねえ>

<広い図書館というのも考え物だね。ここは隠れる場所が多いから、人目のつかない所でけしからん事をする奴らの多いこと!!>

<そうそう、一級魔導書たちに聞いたんだが、この前言ってたリドル教授が、あんまり使われてない自習室で男子生徒と(自主規制)……)>

「あの、リドル教授の話やめてくれない?あの教授、何しに学院に來てるの!?’

<あ、それならフローレスとキルレも逢引にここ使ってるよ>

「ここは火遊びアバンチユールの場所じゃないつづの。人目について恥ずかしい思いするって考えないわけ?’
ぐったりと愚痴ったユーリに魔導書が爆弾発言をする。

<リドル教授が言ってたけど、見られるかもって言う危機感スリルと知識の宝庫でする背徳感が快……>

「変態教授の趣味なんか知ったこっちゃないよ!!そんなに危機感スリルが欲しけりゃ野犬にでも喧嘩売ってりゃいいじゃない!!’

<かてえ事言ってるなよ。あいつ魔導科の教授陣の中じゃあ微妙な立場にいるんだから、鬱憤は小出しに出さないと爆発するぞ?>

「小出しどころか、もう爆発してるじゃん。生徒に手を出したあたりで人生破滅してるでしょ」
溜息を吐いたユーリはリドル教授の話題で楽しむ魔導書たちから離れる。

下手にこれ以上、話を聞いていたくない。

ユーリはソファの上に寝転がるのをやめて暖炉の前の定位置に座る。

<あ、そうそう、ロジーとアントワがさあ、一般図書館の辞書棚のところまで逢引してたよ>

<え？ロジーってエイリーと付き合ってたっけ？>

<それが、随分前に別れてたらしいぞ>

原因はロジーの心変わりらしい。

もともと、一般図書館の司書のロジーとはユーリはあまり関わりが無かったが、浮気性で仕事に不熱心で甘ったれな人らしいことは聞いていた。

何でもロジーは二股、三股はざらで随分女性と浮名を流し、そのたびエイリーと喧嘩になっていたらしいが、とうとうエイリーがロジーに三行半を叩きつけたらしい。

<その時、ロジーはディアンナって女と付き合ってたんだけど、エイリーだったらその女とロジーをめぐって取っ組み合いの喧嘩してたんだけど、その騒ぎを聞きつけたロジーの自称恋人たちがわんさか集まってきて、女四人で大決闘^{バトル}。いやあ、ぜひとも見てみたかったねえ>

「あの〜、悪い夢見そうなんだけど」

そんな司書同士のどろどろ恋愛劇、知りたくなど無かった。

（この中に普通のまともで平和な雑談をしてる魔導書はいないの！
？）

表情がひきつったユーリをよそに、魔導書達は司書たちの恋愛事情に興味深々だ。

<しかし、別れた男と同じ職場とは居心地が悪いねえ>

<ロジーはいずれ家督をついで当主になる貴族だろう？没落貴族のエイリーがそう簡単に手放すか？>

<いや、それがさあ、男がいるらしいんだよ。しかも、王都にいる金持ちの>

<何故わかるんだい？>

<エイリーが近頃、随分高価な香水やら化粧品を持ち歩いているらしい>

<なんでも、その香水は王都の王族御用達化粧品屋から買って貰ったものだそうだ>

<ミリアリアがセイラに悔しそうにこぼしてたからね。確かだよ>

(あいつらっ!!)

ユーリは自分が助けだした女司書三人を呪う。

「あの三人がしたヘマのせいで危ない橋を渡らされた挙句に、あたしは授業に出られなくなったのよ!!仕事をサボってだべっていたのが化粧品と男の話なわけ!?……………っ!!」

くわっとなみついたユーリに魔導書達は面白そうに噁し立てる。

<おゝ、おーこった、おーこった、ユーリがおーこった>

「怒らずにいらいでか!!あんにやろう!!エリアーゼ館長にチクってやる!!ギズーノンさんに言いつけてやるうっう!!」

やんやんやんと騒ぐ魔導書と一緒に騒いでいる時点で、ユーリは立派に魔導書たちのお仲間だ。

そして、この大騒ぎがたまに外に聞こえることがあるらしく、

・誰もいないはずの図書館から真夜中に不気味な叫び声が聞こえる。

という怪談の原因になっていることをユーリは知らない。

14P 魔導書達の噂（後書き）

お気を悪くされた方、いたら、すいません。

ユーリさん、魔導書たちに結構遠慮がないです。

15P 事前確認は大事

翌日。

ユーリは寝不足の目を擦りながら、開館前の門前掃除をしていた。魔導書たちから聞いた事が消化不良を起こしたように、ぐるぐると頭を回っている。

アヴィリスの立場、王都から観光目的で来ている魔導師と彼が作った魔導書の事。

そして、知りたくもなかった学内裏事情。

(どうしたもんかなあ)

ユーリは掃き集めたごみを集め、あくびをする。

ふと、魔導馬車の姿を見つけてユーリは顔を上げる。
アヴィリスが来たのだろうか？

しかし、魔導馬車に乗っている人物を見たユーリは目を丸くする。

「アリナ？」

魔導馬車に乗っていたのは黄金のような波打つ金髪を持つ少女が魔導馬車の中で身を縮めるように座っている。

昨日の今日で、一体どうしたのか。

魔導馬車から降りたアリナのいつもは勝気な青い目にいつもの光はなく、沈んでいる。

「おはよう。アリナ、どうしたの？」

「ユーリ」

いつもは貴族然とした品と威厳のある声まで覇気がない。

一体どうしたのか、アリナを見つめると、彼女は紫色の布に包まれた何かを持っている。

「魔導書が。借りていたルキアルレス著の『ルキアルレスの占星魔導』書が壊れてしまっただんですの」

「え？」

ユーリはアリナが持っている紫色の布包みを受け取る。

布包みは袋状になっていて、丁寧に折られた袋口を開けると、ペー
ジが表紙から外れかけた魔導書が確かに入っていた。

アリナの話によると魔導書を持って少しばかり移動しようとしたところ、魔導書を落とし、バラバラにしてしまったらしい。

「復元魔導も効きませんし、もう、どうしていいやら」

アリナの細く、白い花のような両手が胸の前で強く握り締められて色を失っている。

その白い手に少し荒れたよく日焼けした健康的な色の手が重なる。顔を上げたアリナにユーリが微笑みかけていた。

「大丈夫だよ、アリナ。図書館の魔導書には魔導が効かない細工がしてあるから魔導が効かなかっただけ。修繕にちよっと変わった方法が必要になるんだけど、大丈夫。元に戻るよ」

泣き出しそうなアリナにそう告げて、慰めるように手を握る。
アリナはようやくくほっとしたような笑顔を見せた。
アリナと軽く話をした後、魔導馬車を見送ったユーリは箒を放り出した。

(まずい、 まずい、 まずい！！)

ユーリは一直線に大ホールの大階段を駆け抜け、魔導階の扉を叩き開ける。

魔導階に着いたユーリは、マナー違反承知で魔導階を走り、抜け道を駆け回って家を目指す。

破損した魔導書はとても不安定で、魔力の暴走を起こしやすい。
一般公開されている魔導書以上の魔導書は、ページが一枚折れ曲がっただけ、ちよつと破けただけでも即修繕室行きだ。

アリナのところで魔導書の魔力が暴走しなかったのは幸運以外のなんでもない。

本来なら、この魔導書を持って修繕室に駆け込みたいが、魔導書用の修繕室も壊れて工事中だ。

(よりにもよって、こんなときに！！)

ユーリはタペストリーの影から這い出て溜息を吐く。

魔導階にも結界の張れる場所があるし、修繕用の道具がある。

けれど、ページが表紙から離れかかるほどの破損を起こした『一級魔導書』を封じ込めて安定させるには魔導階の設備は心許ない。

それに、『禁制魔導書』たちとは違い、自我は無いがそれなりの魔力のある『一級魔導書』、『一級危険魔導書』達にこの魔導書を近

づけたくない。

自我が無いが故に『一級魔導書』、『一級危険魔導書』達は魔力に引き込まれやすい。

もし、この魔導書が魔力を暴走したら、『一級魔導書』、『一級危険魔導書』達まで暴走してしまう。

修繕室と魔導階以外で魔導書の魔力を封印できる設備があるのは最上階の植物園だけだ。

(はやく!!)

最上階の植物園の芝生がようやく見えるころには、ユーリの足は生まれたての小鹿のものより震えていた。

自宅最短距離、最短帰宅時間の記録を更新したせいだ。

頭はパンクしそうだし、息が上がって辛い。

しかし、歩みを止めるわけにいかない。

(急がないと!!)

気力だけで足を前に踏み出したユーリは、階段の最後の段を踏み外して芝生の上に派手にこけた。

「ああっ!!」

その途端、紫の布袋から魔導書がこぼれて落ちる。

芝生の上に魔導書が散らばった。

思わず、ユーリは目を閉じて体を伏せる。

しかし、

……ピー、ちちちちちちっ

さわ、さわさわさわ……

「？」

いつまでたっても、魔力の暴走は感じられない。

「なんで？」

顔を上げると芝生の上でぽつんとバラバラの魔導書と品のいい布袋が転がっている。

「それは、こっちの台詞だ」

上から声が降りてきた。

驚いて顔を上げると、藍色の髪的美丈夫が上衣を肩にかけ、シャツとズボンとブーツのみの軽装でユーリより一段下の階段にたつて、ユーリを見下ろしていた。

ユーリについて走ってきていたのか、その麗しい美貌に汗が浮き、息が少し荒い。

「な、なんでっ！？」

出来る事なら今すぐ立ち上がって、アヴィリスから離れたいが、がくがく震える足では満足に立ち上がることもできない。

膝丈のスカートの下で編み上げブーツに包まれた足が面白いほど震えているのを見たアヴィリスはとりあえずユーリを持ち上げて芝生の上に座らせた。

「何でここにいるの？」

「ああ、図書館に着いたら、お前が血相を変えて走っていくのが見えてな、呼び止めようと追いかけていたらここに着いた」

首元のタイとシャツを緩めながら、魔導師は事も無げに言う。

きつと、途中で声をかけるのをやめて、ユーリにこっさりついてきたんだろう。

(これからは、後ろに気をつけておうちに帰ろう)

心の中でそう誓ったユーリは芝生の上に転がる魔導書に気づく。

「ま、魔導書が！！魔力が暴走しちゃう！！」

立ち上がるうとしたユーリは派手に転ぶ。

「おい、大丈夫じゃ……ないな」

手を貸そうとしたアヴィリスをさえぎって、ユーリは言う。

「あの魔導書を早く噴水にもって行かないと！！」

「噴水？」

アヴィリスが首をめぐらせると、野原をイメージした芝生庭園の奥に、生垣があり、その上の辺りで水が跳ねているのが見えた。

「あれか」

アヴィリスがつばやき、振り返る。

「噴水の水を吐いている獅子像には魔力を封じ込める魔導がかかけられているんです！！あの中に魔導書を入れないと！！」

ユーリの顔は緊張と緊迫で張り詰めていた。

しかし、

植物園入り口の階段の手すりに？まって立つ姿は初めて掴まり立ちに成功した赤子の様。

生まれたての小鹿か？と思うほどに足は震え、腰が不自然に曲がっている。

貴族の娘ならば縁談話が一つ二つ舞い込んでくるはずの年頃の娘なのに、実に無残な格好だ。

本人の必死さがわかるだけに、……………笑えてくる。

「……………抱えてやるから、無理をするな。……………やめてくれ」

笑いを必死で堪えながら、立っているのもやっとな少女を腕に抱える。

「わわっ！！あ、歩きますよ！！アヴィリスさん！！」

「そういう減らず口は足の震えを止めてから言え。……………いいから、

「まっっている」

ぐんつと近くなったアヴィリスの美貌に、ユーリは無性に気恥ずかしくなる。

「魔導書というのは、これか？」

「はい。それです!!」

ひょいっとその魔導書を拾い上げたアヴィリスは表情を曇らせる。

「ルキアルレスが占星魔導書を書いたのか？」

「お知り合いですか？」

「知り合いというか、同じ時期に宮廷魔導師になった奴だ」

彼はユーリを芝生の上を下ろし、魔導書のページを拾う。

魔導書のページを拾うアヴィリスの顔がしかめられる。

「間違いだらけだな」

「え？」

「星座の見方からして根本的に間違えている。この方法ではどんなに頑張っても星の魔導は使えない」

「そう、なんですか？」

「やっぱり？」

禁制魔導書達の意見はやはり正しかったらしい。

アヴィリスが解説する小難しい理論はさっぱりわからないが、現役魔導師が顔をしかめて罵りたくなるほどダメな魔導書だということだ。

(じゃあ、何でこの魔導書は一級魔導書に劣らない魔力を持つてるの?)

間違った理論から魔導は生まれなければ、魔導の源である魔力がどうして宿っているのか。

そもそも、

(どうして、魔導書の魔力が全然暴走しないの?)

魔導書が暴走する前の空気が震えるような、あの感覚が全くやってこない。

ユーリが壊れた魔導書を見てみるとアヴィリスと目が合う。

「どうして、こんな魔導書が公開されているんだ?」

「さあ?そんなの知らないけど……、三ヶ月くらい前からある魔導書だと思うよ?」

そう言うと、アヴィリスの表情がすうつと無くなった。

無表情になったアヴィリスは魔導書の表紙を眺め、魔導書の表紙を覆う青い革に切れ目を見つけた。

アヴィリスが魔導書のページの暴走時に大活躍したナイフを出した。

「あの、そのナイフで、何を……」

そして、

「ああーっ!!」

アヴィリスは一瞬の躊躇もなく表紙の青い革を剥いだ。

「何してくれてんの!! あんた!! 大事な魔導書が!!」

ぎゃいぎゃい騒ぐユーリを尻目に、アヴィリスは無表情で青い革を刻んでいく。

「……………あつたぞ」

「はい?」

涙目になったユーリの目の前で、青い表紙だった魔導書の下から濃い臙脂色の革の表紙が現れる。

(何で、魔導書の表紙の下に違う表紙が?)

「俺の探していた、魔導書の表紙がこれだ」

「そ……………」

……………ぞわり

背中を寒気が駆け上がり、肌がピリピリと震える。

空気が重い。

喉が干上がったように渴き、心臓が泣きわめくように鳴る。

先ほどまで風に戯れていた草木の音もしない。

この感覚を、ユーリは知っている。

「魔力が、乱れている？」

アヴィリスがあたりを見回して呆然と呟く。

ユーリはふと、アヴィリスに破り取られた青い革の元表紙の裏に魔導文字や円陣が描かれていることに気付いた。

「アヴィリスさん、この青い革の裏に書いてある魔導陣、何かなあ」

「封印の魔導陣だな。おそらく、この表紙の魔力を封印していたんだろう」

封印。

その一言にユーリは顔をひきつらせる。

そして、ふと、ガタゴトとおかしな音がすることに気付いた。

「あれは」

小さな、日本で言うA4サイズの大きさのトランクが階段の手すりの近くでガタゴトと暴れている。
まるで、あの中に何かの生き物が動き回っているかのようだ。

「あの中に何か飼ってる？アヴィリスさん？」

色を無くした顔で、あり得ないことを期待を込めて訊いてみる。

「あのトランクの中には魔導書のページを保管している」

希望はあっさりと叩き伏せられた。

「ば」

「ば？」

おかしな声を上げたユーリにアヴィリスは首を傾げる。

「ば、ば、ば、ば、ばっ」

「婆？」

俯いていたユーリがくわつと顔を上げた。

「馬鹿ーっ！！」

「は？」

「馬鹿！！バカバカバカ！！大馬鹿魔導師！！」

「は？なっ！？」

ムツと見下ろしたユーリは半泣きでアヴィリスに詰め寄った。

「壊れた魔導書のページをろくに封印もせず置いておくなんて何考えてるの！！壊れちゃった魔導書はむちゃくちゃ不安定で、魔力が暴走しやすいんだってば！！」

「あ」

アヴェリスが呆けたようにポンッと手を打つ。

そう言えば、そうだった。

とでも言いそうな行動にユーリはキレた。

「あたしの家が壊れたら弁償してもらうんだからね！？」

「は？家？……ここに住んでるのか！？」

ぎよつと目を見張った魔導師を遮り、ユーリの悲鳴が響いた。

「いやあああつ！！トランクが開くつづつづつ！！」

「まずい」

アヴェリスが即席の魔導陣をトランクに描くが、それを拒むようにトランクが輝く。

呼応するように表紙が強く光る。

それに乗ずるように魔力がうねり、放電する。

(間に合わない!!)

何の防御を持たずにただ佇んでいる少女に駆け寄り、アヴィリスは防御陣を展開しようとする。

息苦しい空気の中、強い光が王立学院図書館の最上階秘密の植物園を飲み込み……。

歌が、響いた。

16P 迷子は帰る

……こぼこぼ

迷路庭園をの奥、木立の中の隠れ家のようなログハウスの中、丸いテーブルの上でティーカップに緋色の液体がポットから注がれる。たつぷりと紅茶が注がれたカップをアヴィリスは優雅に持ち上げ、口に含む。

テーブルの上の籠に入れられたビスケットを取ろうとした手は、細い手に叩かれて落ちた。

ムツと顔を上げたアヴィリスの目の前にはユーリが座っている。

アヴィリスの手を叩いたのも、ユーリだ。

ユーリはむっすりと黙ったまま、違うカップにお茶を淹れ、アヴィリスを睨んだ。

二人は険悪ムードでありながら、生きていた。

魔導書の暴走で命を落としてもおかしくない状況にあったにもかかわらず、最上階の植物園も、そこに建つユーリのログハウスも無傷だ。

しかし、ユーリは怒っていた。

「魔力を帯びた魔導書がどれだけ危ないか、魔導師なら知ってるはずですよね？」

「悪かった」

睨まれたアヴィリスは気まずそうに頭を下げる。

今回の事は自分が悪い。

探し求めていた魔導書を前にして、興奮し、注意を疎かにして危うく大惨事を起こすところだった。

足元には嚴重に封印したトランクがある。

あの時。

(間に合わない!!)

何の魔導知識も身を守る術ない少女にアヴィリスが駆け寄った。

少女を背に庇い、魔力の嵐の下、なんとか魔導を発動させようと自分の魔力でもって魔導を紡ぐ。

だが、

魔力の嵐の前に自分の魔力は塵にも等しく、魔力の嵐に魔導は壊され、魔力は吸収され、成す術がなかった。

(もうだめか)

せめて潔く自分を消す魔導は何なのか見極めようとした。

「 炎よ、大地よ、響け、響け、

我らの敵が、迫りくる

炎よ、大地よ、吼えろ、吼えろ

我らの敵を、追い返せ

ああ、どうか、我らに救いを

ああ、どうか、我らに光を】」

ユーリが聞いた事のない言葉を紡いで歌った。
聞いた事のない旋律が止むとともに、どこからか吠える声が聞こえた。

……グオオオオオオ

「なっ!?!」

振り返った先には白い獅子がいた。

生垣を割って、芝生庭園の青々とした芝生や小花を抉りながらこちらに駆けてくるのは、獣の王。

一直線にこちらに駆けてくる白い獣から小柄な少女を守るためにア
ヴェリスが前に出た。

その瞬間。

獅子はアヴェリスの前で高く跳躍した。

白い残像を残し、空を舞う獅子は、

………暴走して光り輝き、宙に浮いた魔導書の
表紙を飲み込んだ。

「はっ!？」

白い獅子に魔導書の表紙が飲み込まれた途端、魔導書のページが静かにトランクの中に戻る。

白い獅子は一仕事終えて満足したような悠然とした姿で、自分が抉った芝生や小花の後を踏んで歩く。その背に従うようにユーリが続く。

……ぴー、ちちちちっ

平和に小鳥が鳴き、草木の囁きが聞こえるなか、アヴィリスは、ぽつりと取り残された。

しかし、慌てて魔導書のページを数え、トランクに仕舞い、トランクに新しく魔導陣を描くと、ユーリと獅子の後を追う。

生垣の向こうには白い大きな噴水を中心に貴族の中庭のような豪華な花壇が設えられていた。

噴水には水瓶を持った乙女、牝牛、そして尾が二つに分かれた魚の白い像がそれぞれ別の方角を向くように設えられてあり、四方の一角がぼかんと空いていた。

白い獅子はユーリに頭を撫でてもらうと、満足したように噴水の水の中を進み、白い像のぼかりと空いた場所に静かに佇んだ。

それと同時に獅子は白い獅子像となり、大きく開いた口から水を吐き出し始めた。

驚きの光景にさすがのアヴィリスも唾然としていると、むっつりと顔をしかめたユーリが振り返った。

「とりあえず、ついて来て下さい」

その言葉に従うままに迷路のような庭園を抜け、木立に隠れるように建っているログハウスに入った。

そして、いまに至る。

ユーリが溜息を吐くと、ピツと二本指を立てた。

「これから言う二つの事を約束してくれるなら、封印した魔導書の表紙を返します」

ユーリの言葉にアヴィリスは眉をしかめ、黙考する。

「……」

しばらく黙っていたアヴィリスだが、細く息を吐くと、口を開いた。

「内容にもよる。どんな約束か、聞かせろ」

ユーリは一本指を立て、

「ひとつ、この最上階の植物園とログハウスの存在を誰にも言わないこと」

もう一本指を立て、

「ふたつ、あの歌を調べたり、広めたりしないこと」

「その理由を聞いてもいいか？」

アヴィリスが訊くと、ユーリは溜息を吐いた。

「ここの存在の事は、まあ、あたしのためです。ここで住んでるのバレたらいろいろ面倒なんで」

でも、とユーリはアヴィリスをしっかりと見つめる。

「あの歌は、【語られてはいけない歌】なんです。歌を調べたり、歌を広めただけで死罪になります」

「どこかの部族の伝統歌か？」

「それすらエリアーゼ館長は教えてくれませんでした」

『知ってしまったら、ユーリさん。あなたも死刑になってしまえますよっ。』

にこりともせずエリアーゼ館長は言った。

「約束、守ってもらえますか？」

知られてはいけない歌を知らせてしまったユーリは悔恨の思いでアヴィリスを見つめる。

「守らなければ、表紙を返してくれないんだらう？」

アヴィリスは首を竦めて紅茶を飲む。

「今回の件は、俺に落ち度がある。魔導書の表紙を返してくれるな

ら、その約束、守ろう」

「約束ですよ？」

「ああ」

ぐっと握り合った手は初めてした握手とは違い、温かかった。

アヴィリスは恐ろしく集中していた。

力の循環を顕す円陣を何重にも描き、その中に魔導的な意味を持つ図形、力の在り様を示す魔導文字を踊らせる。

自分の望む魔力の道筋を描き、魔導として顕現させるそのためだけに、自分の持てる知識と魔力を込めて魔導陣を描く。

たとえ、

魔導陣を描いている場所が王家の庭園のように美しかろうと知ったことではない。

その結果、

対称に並ぶ美しい花壇、甘い香りを漂わせる薔薇園、噴水から湧き上がる水で作った小池に浮かぶ花々、その中心に立つ白い噴水の獅子像……のド真ん前に、巨大な魔導陣が描かれることになった。

「さて、と」

アヴィリスは魔導陣を描いていた絵筆を捨て、樫の木で出来た杖を持つ。

異常というか奇妙な光景の中、無駄に美貌な魔導師は噴水の縁に座

っている少女を振り返る。

濃い栗色の髪に漆黒の瞳、顔立ちに特色することはないが、華奢で小柄な体つきに似合う幼さを残した普通の少女だ。

彼女は魔導師の綴る魔導を興味深げにただ見ていた。

しかし、魔導師は知っている。

彼女がこの『賢者の迷宮』と呼ばれる王立学院図書館の秘密を知っていることを。

そして、その神秘をいま、自分が欲していることを。

「始めようか、ユーリ・トレス・マルグリット」

その声に応じるように少女は歌う。

「【 我らは歡喜する、感謝する。」

炎のいと猛々しき恩恵によって

大地のいと強き慈悲によって

ああ、我らの敵は眠りについた

ああ、我らの災いは鎮まった

どうか、炎と大地の番人に高き感謝を

どうか、我らのいとしき友に安らぎを【」

その旋律と歌によって獅子像が水を吐くのをやめる。

歌が終わると同時に獅子像は白い獅子となって、ユーリの隣に座っ

た。

「出して。もう、大丈夫」

ユーリがそう言いながら、獅子を撫でる。

獅子は子猫のようにごろごろと満足げに喉を鳴らす。

……ゲルルルウ

獅子が大きく喉を開け、唸るように鳴く。

それと同時にユーリの膝の上に深い臙脂色の魔導書、の表紙が乗った。

「それを渡せ、ユーリ」

「言われなくっても!!」

ユーリの膝の上に魔導書の表紙が乗ったとたん、ピンツと空気が張りつめた。

ユーリは慌ててアヴィリスに魔導書の表紙を投げる。

「『 …… 我は喚ぶ、我は告げる』」

でたらめに投げられた魔導書の表紙を魔導師は片手で受け取る。

それと同時にアヴィリスが朗々と魔導の詠唱を行う。

静かに開かれ、魔導陣の中心に置かれた魔導書の表紙を前に、櫛の木の杖を持つ手とは逆の手で愛用のナイフを握る。

朗々とアヴィリスが歌うように唱える詠唱の意味がユーリにはわからない。

けれど、アヴィリスの声に合わせて魔導陣が輝き、形を変えていく。

「我、アヴィリス・ツヴァイネルーロウ・スフォルツィアがジオラルド・フォン・アルス・エックハルツの名の下に汝が銘『始まりの叡智』にこの場の力を捧げる」

魔導書の表紙の奥、魔導陣の中の小さな円陣の中にあつたトランクにアヴィリスがナイフを突き刺す。

「『されば、汝、『始まりの叡智』の血肉の欠片を解放し、開放し、この場の力と銘において、汝を在るべき姿に成す！』」

詠唱と同時に魔導陣が強く輝いた。

目がくらむ閃光。

王立学院図書館の最上部が光に包まれた。

「あ」

光が消え、目が視力を取り戻す。

噴水庭園に描かれていた魔導陣は消え、いつもと同じ庭園の光景の中に魔導師が立っている。

彼の手に唯一在るのはナイフと深い臙脂色の本。

「元、戻ったんだね」

「ああ」

アヴィリスは手の中の魔導書をぱらぱらとめくる。

「元に戻った」

アヴィリスがほっとしたように、魔導書に向かって微笑む。

いつか見た死刑宣告のような綺麗な笑顔でも、皮肉っぽい笑顔でもない自然な表情でアヴィリスは笑った。

ユーリはその一言にほっと息を吐く。

迷子の魔導書は魔導師の手の中に帰ることが出来た。

それは、ユーリに平穩の訪れを意味する。

明日から授業に出られるし、普通の生活が舞い戻ってくる。

それはユーリにとって喜ばしいことだ。

しかし。

がっしりと、誰かに手を掴まれた。

「え？」

顔を上げたユーリの上で、アヴィリスが無駄な美貌を引き締めてユーリを見ていた。

17Pデッド・オア・ライフ

ユーリは『禁制魔導書』階に来ていた。

「魔導書に触らないでくださいよ？アヴィリスさん」

ユーリに肩越しに睨まれたアヴィリスは伸ばしかけた手を渋々引っ込めた。

未練がましく本棚に鎮座する魔導書達を見ながら、アヴィリスは古い魔力と魔導が溢れる部屋をぐるりと見回す。

そして、暖炉の中に油紙と布で嚴重に保護した、5cmほどの厚さの四角いものを隠す。

王立学院図書館で迷子になっていた魔導書だ。

その厚さで2800枚が入っているのか疑問に思う厚さだが、何らかの魔導が働いて、大きさを一定に保っているらしい。

『禁制魔導書』階から出て、名残惜しげなアヴィリスを引っ張るように魔導階に戻るユーリは溜息を吐いた。

……さらさら、しゃわしゃわ……

噴水から湧き出る水が優しい音を立て、美しい花壇の中で花々は春の栄華を誇って花開く。

どこかの城の中庭、そう言ってもおかしくない風景の中、手を取り合う男女の絵は傍から見れば一枚の絵画のようにも見える。

特に、男が美丈夫ならばなおさらだ。

たとえ、相手の女が女というにはおこがましい貧しい体型でも、顔

立ちが十人並みで童顔でも。

そんな一枚の絵を演じる当事者たち、男のほうは切れそうなほど真剣なのに対し、女のほう、つまりユーリの顔は引き攣っていた。

……これを絵画の題材にしようとする画家はいないだろう。

「頼みがある」

真剣な顔で美貌の魔導師に言われたユーリは反射的に一歩引いた。細いくせにがっしりとした骨格と硬い肌の手に囚われた腕はそれしきの逃げではユーリに自由を与えることが出来ない。

そんなユーリを知ってか知らずか、アヴィリスはユーリの腕を掴む力を強める。

「この魔導書を『禁制魔導書』階に置かせて欲しい」

「何でその必要が？その魔導書と一緒に王都に帰ればいいでしょ？」

（もう、これ以上の厄介事はご免なんだけど……）

そんな気持ちを込めてユーリは言う。

貴族、とはいってもほぼ平民に近いくらいの立場であるユーリにとつて、ここしばらくのドタバタや胃が痛くなるような吊り橋渡りな日々は刺激が強すぎる。

（あたしは、平穩無事な日々を送りたい一市民なのに……！）

顔を上げると若干すまなそうな顔をした（？）アヴィリスがいた。

「それは出来ない」

「なんで？」

「この魔導書が元に戻ったということは、この魔導書をバラバラにした奴にも知られているだろう。……またこれをバラバラにされたり、利用されるのはご免こうむる」

「え？何で犯人も魔導書が元に戻ったって気づくの？」

「魔導書を元に戻すのに少しばかり特殊な魔導を使ったからな。あの魔導で魔導書を元に戻すときに、ここ以外にばら撒かれていた魔導書のページが無理やりここに戻って来たような感覚があった」

「つまり、犯人の手元にあった魔導書のページまで戻って来たから、犯人に気付かれたかもしれないってこと？」

「そうだ」

「だからって『禁制魔導書』階に隠さなくても……」

「いや、『禁制魔導書』階でないとこの魔導書の魔力は隠せないし、何より、お前の命を守るためでもある」

「え？」

何か、ついでのようにさらっとものすっごく重要なこと言われたよ
うな気がするんですけど！？」

「命？」

「ああ」

「誰の？」

「お前の」

まるで落としたハンカチをさし出すような軽さで言い捨てられた。そのせいだろう。

ユーリが言葉を飲み込むまで、数秒、沈黙が続いた。そして。

「はあっ！？何で！？何で魔導書が元に戻ったらあたしが他人に命狙われなきゃいけないわけ！？」

思わず叫ぶと、アヴィリスはおやっと眉を上げた。

「なんだ、知らないのか？お前が俺の手伝いをしていることは最早、学院中に知れ渡っているぞ」

「それくらい知ってるよ」

ふんつとユーリは鼻を鳴らす。

そのせいでシリーズやマイに詰め寄られたのは昨日の事だ。ただでさえ、図書館で大騒ぎがあったのだ。

アヴィリスとユーリの事は知れ渡っているだろう。

「だから？それがあたしの命が狙われる理由にどう関係するわけ！？」

「俺の魔導書をバラバラにした奴が、このまま魔導書を完本のままにしておくわけがないだろう？……誰がこの魔導書をバラバラにしたのか、それはわからんが、魔導書が元に戻ったならば、自然、犯人の目はこの王立学院図書館に向くだろう？」

確かに、そうだ。

魔導書をバラバラにした理由はわからないが、アヴィリスがわざわざ魔導書を取り戻しに来たほど、この魔導書はアヴィリスにとって価値のあるものだ。

アヴィリスの事を面白く思わない人にとっては、この魔導書はアヴィリスと同じく邪魔だろう。

そうなると、と魔導師は意味深に口を切る。

普通の女性ならば老いも若きもうつとりしそうな流し目に、ユーリは背筋を凍らせた。

にやりと吊りあがった口元が悪魔の笑みに見えたのだ。

「魔導書を元に戻すことに貢献した司書を魔導書をバラバラにした犯人が捨て置くわけがないだろう？」

「え？」

それって、つまり？

「まさか、その魔導書を、バラバラにした犯人があたしの事を狙ってる、なんてこと言うんじゃない？」

おそる、おそる、信じたくない気持でユーリは言う。

「狙ってる。いや、いまから狙われる。だろうな」

アヴィリスはユーリの希望を一瞬で打ち砕いた。

「うっそだあああつ！！」

ユーリは叫んだ。

小さな親切。大きな後悔。

魔導書を完本に戻す手伝いをしただけだというのに、何故に他人から狙われるような事態に巻き込まれなきゃいかんのだ！！

（助けるんじゃないかった！！）

とほほほ。と泣きながら、ユーリは膝をついてがっくり頂垂れた。

「まあ、そういうわけで、安全そうな場所にこれを安置したい。手伝ってくれるな？」

一方、アヴィリスはしれっとした顔でユーリを見下ろす。

罪悪感の欠片もない澄ました美貌が腹立たしいほどに麗しかった。

「手伝わなきゃいけない事態に巻き込んでよく言っね！！」

ユーリの呪いを含んだ目を魔導師は笑顔で受け流した。

「事態が収束するまで、この魔導書を守ってくれ。ユーリ・トレス・マルグリット司書」

「難題がさらに難易度を上げた！！」

「ちなみに、この魔導書を守ってくれないなら、俺はお前の命を守らんぞ」

「え？あたしの命が魔導書と同レベル！？ってゆーか、むしろ魔導書のほうがあたしの命より上！？」

思わず噛みついたユーリにアヴィリス魔導師は大きくうなずいた。

「当たり前だろうが」

さも当然のようにさらっと吐き捨てられた！！

「じのっ！！」

大きく息を吸ったユーリが吐き捨てた声が、王立学院図書館の最上階に響き渡った。

「陰険鬼畜魔導師がっ！！」

(あ、思い出したら腹が立ってきた)

魔導階のホールでアヴィリスと向かい合ったユーリは、その秀麗な美貌を睨む。

そんなことを毛ほども気にしていないアヴィリスはユーリを下ろし、詰襟の制服の首元をいじり始めた。

「これをお前に渡しておこう」

アヴィリスが差し出したのは、絹製の青いタイとそのタイを留めていた銀の丸い金具。

それだけで、上等な首飾りのようなタイと銀の丸い金具を受け取る。

ループ・タイのような青い絹製のタイには何の変哲もないが、そのタイの先についた金具を見てユーリは目を見張る。己の尾を噛む竜に守られるように中心に描かれた五芒星と、その五芒星の上で吼える翼が生えた獅子。それが描かれるモノを掲げられるのは、魔導師のとある互助組織しかあり得ない。

「<クラン>の紋章エンブレム!!」

この国で、いやシオン大陸一、有能な魔導師が多数所属し、数多の魔導結社と同盟を組んでいる、最大の組織。

大陸中の魔導師たちの憧れの的ともいえる組織の会員の証がこの紋章だ。

「こんな、大事な物、あたしなんかに渡していいの？」

ユーリが手の中の紋章と澄ました顔の魔導師を交互に見る。

「これは、そのお守りより強い護符になるからな。念のため、持っている」

「これが必要になるような事態に巻き込まれる事前提!？前提なの!？」

あっさり言い捨てられた爆弾発言に思わず噛みつく。

「ああ、一度俺は王都に戻るからな」

「え、？」

あっさりと頷かれたユーリは固まる。

「あの、耳が遠くなったのかな？おーとに戻るって？」

「ああ、調べることがあるからな。王都に戻る」

「はあ！？魔導書をここに置いて行くつもり！？」

「だから、お前にあの魔導書を守れと言っただんだ」

批難の声をあげたユーリをアヴィリスが鬱陶しげに見下ろす。

馬鹿にしたように見下ろすアヴィリスに、これ以上の抗弁は無駄だと判断した（というより叫びすぎて疲れた）ユーリは溜息を吐いた。

「で？王都に戻って何するんですか？」

「魔導書をバラバラにした犯人を叩きのめす」

「……………」

さらっと吐き捨てられた言葉にユーリは固まる。

あの、アヴィリスさん。吐き捨てられた言葉が凍りつきそうなくらい冷たいんですけど？

いつもと同じような無表情がものすごく不穏なんですけど？視線が切れそうにヤバいんですけど？

「あの〜。お手柔らかに、…………この件で死人が出たなんて嫌なんで

……………」

青褪めたユーリが一応、忠告してみる。

魔導書は元に戻ったんだし、アヴィリスの個人的な恨みによる殺人に関わるのはご免だ。
夢見が悪くなる。

その気持ちに気付いたのか、アヴィリスはわずかに表情を緩ませた。
「ああ、安心しろ」

その言葉に安易に安堵した自分を、ユーリは一瞬で後悔することになる。

「死んじまったら、苦しみを味わえないだろう？」

にっこりと口角を上げ、笑みを形作る目。

笑顔のような顔なのに、目の奥が笑っていない！！

吊りあがった口が獲物に食らいつく肉食獣の口に見える！！

「安心しろ。死ぬ一步前まで追い詰めて、いたぶり倒すのは得意中の得意だ」

「あのく、……… 宮廷魔導師っていつの間に拷問官まで兼任するようになったんですか？」

(余計に不安なんですけど！?)

ユーリが恐る恐る訊くと、アヴィリスは意味深に微笑んで魔導階に背を向けた。

「あの魔導書を守れ。俺にお前を虐めさせないでくれよ？」

魔導階から一般図書階に通じる扉が閉まった。

アヴィリスの言葉を残して。

アヴィリスは自分にユーリを虐めさせるな。と言った。
つまり、それは。

あの魔導書に何か起こったら、ユーリもただで済まないということだ。

「あ、悪魔」

朝から走り回り、いろんな意味で叫んだユーリは疲れ果ててその場に座り込んだ。

（なんて厄介な迷子なのよ）

探すのにさんざん苦労した拳句、保護者は悪魔のような魔導師。

そんな魔導書に関わってしまったことに今更ながらに後悔した。

18Pフォローにならない(前書き)

久しぶりの投稿です。
微妙にネタづまり気味……。

18Pフオローにならない

「と、いうわけで、魔導書は元に戻って、魔導師は王都に犯人をし
ばき倒しに行きました」

仕事と学校がお休みのユーリは『禁制魔導書』階にいた。
本当は今日もアヴィリスが探していた魔導書の表紙を探す予定だっ
た。

けれど、今日、魔導書がこうして元に戻ったため、急遽お休みにな
ったのだ。

<それで？何でお前はそんなにむくれてるんだ？>

「むくれたくもなるってのよ！！あの陰険魔導師！！」

ユーリが不満をぶちまけると、魔導書達からおざなりな相槌が返っ
て来た。

<ふむ、なるほど。魔導書を元に戻したせいでお前が狙われると>

<と、言うことは、魔導書をバラバラにした無礼者もここに来る可
能性があるっていうことか？>

「さあ？魔導師がしばき倒しに行ったから、来ないんじゃない？」

<え〜>

ユーリのそっけない返答に魔導書達が不満げな声を上げる。

<四大元素の魔導で生き地獄を味わってもらおうと思ってたのに>

<ぬるいなあ。七大惑星の魔導でぼこぼこにするのが先だろう？>

<七大惑星なんて面倒なことをせずに七大地獄にさつさと落としてしまえばよいのでは？>

<いやいや、属性魔導の閻属性の魔導で生と死の混沌を味わうのがよからう。心身ともに破滅する良い魔導だぞ？>

魔導に詳しくないユーリにはさっぱりわからないが、話の雰囲気から危険を察知する。

魔導書達は嬉々として、魔導書をバラバラにした犯人を懲らしめる方法を話し合っていたのだ。

「あんたら!!」

魔導書達は久しぶりに暴れられる機会だと、張り切っていたらしい。

(てゆうか、こいつらもあたしの命は二次か!!)

思いつきりこの状況を楽しんでいる魔導書達をぐるりと睨みつける。一冊くらい本気で燃やしてやろうかと、ユーリが真剣に考えている

<ん?>

<おや?>

<ほお?>

魔導書達は何やら感嘆の息をついて鎮まり始めた。

「え？なに？どうしたの？」

<ユーリよ。この『始まりの叡智』という魔導書は随分と良い魔導書だぞ>

「え？」

ユーリが思わず暖炉のほうに目を向ける。

隠された魔導書をそつといつも使っているテーブルの上に置く。

<言葉こそ話せないが、ある程度の自我がある。『一級危険魔導書』クラスの魔力がある>

<あと、数十年もすれば我らと同じく『禁制魔導書』になれるだろう>

「すごい！！あの陰険魔導師、何でそんなにすごい魔導書を持っているの！？」

<うるさい。ユーリ、お前は黙っておれ！！>

<いま、『始まりの叡智』殿の話聞いているんだ>

「す、すいません」

魔導書達に一喝されたユーリはしゅんつと首をすくめる。

(あれ？何であたしが怒られてるの？)

疑問に思わないでもなかったが、ツツコミを入れるのは控えた。

いま、これ以上魔導書達の機嫌を損ねたくない。

「わたくし、『始まりの叡智』の銘をもつ、わたくしは、ジオラルド・フォン＝アルス・エックハルツさまより作られました」

『始まりの叡智』は自我はあっても言葉を作ることが下手らしく、どこか拙い様子で魔導書達に話しかけた。

「アヴィリス、という魔導師は、ジオラルドさまのところに、ある日、どこからか来た子で、はじめて見た時は実に小さく、ジオラルドさまが亡くなるまえに、あのこのそばにいるようにと手渡されて以来、あの子の側にいました」

「なんだ。師からの預かりものか」

「ああ、いえ、ジオラルドさまはアヴィリスの師ではなく、養父^{ちち}なのです。きれいな身なりの男が、あるひ、あの子と希少な魔導薬を交換したんです」

「ふうむ。人間とやらはよくわからんな。同族をワインのように売りさばくことに抵抗が無いとはな」

「売られたっていうんじゃないあ、ユーリがきゃんきゃん吼えるように性格もねじれるさね」

「はい。売られて来た時は陰気でかわいらしくない子でした。けれど、性格がねじれ曲ったのは、ジオラルド様が亡くなって、学校で魔導を学び始めてからです」

と、『始まりの叡智』が締めくくる。

「なるほど」

魔導書達は同意したようにうなずく。

<魔導師同士の蹴落とし合いはえげつないからな>

<お前さんもそれに巻き込まれてバラバラにされるとは災難だったな>

<はい。あの子しか触れられる事のない日々に、確かに飽いてはいましたが、まさかこわされるなんて思ってもいなくって>

その時のことを思い出したのか、『始まりの叡智』がコトコトと震える。

魔導書達は深く『始まりの叡智』に同情した。

この『始まりの叡智』は主人の死後、主人の養い子を遠く近くで見守り続けて来たのだ。

そんな忠義な魔導書をバラバラにした奴を許せるか？
いいや。

<ううむ。許せん>

<ユーリはガタガタ五月蠅いが、これは黙って見過ごせるもんか！>

<魔導師より早く犯人を見つけ出してしばき倒してやる!!>

意気込んだ魔導書達は『始まりの叡智』に声をかける。

<で？お前をバラバラにした不届き者はどんな奴だ？>

<ええと。アヴィリスの弟弟子の男で、親のコネで宮廷に入ったと
もっぱらの噂の魔導師で、変幻魔導がうまい魔導師だったようです。
その魔導で見目のいい魔導師に化けて、ここに送られたのです>

<何？汝はここでバラバラにされたというのか！？>

<はい。ここにはわたくしと同じようにどこか壊れた魔導書が二つ
ほど置いてある部屋に連れて行かれ、そこでバラバラにされたので
す>

<修繕室か>

<本を治す場所で魔導書を壊すとは！！>
魔導書達は苦虫を噛み潰したように呻いた。

魔導書専門の修繕室には嚴重に魔力暴走予防の魔導が張り巡らされ
ている。

そして、魔導書を治すことが出来る道具は、逆に魔導書を壊すこと
もできる道具でもあるのだ。

何度か修繕室のお世話になったことのある魔導書達は一様に怒りを
あらわにする。
癒しの場で破壊が行われたことが許せない。

<しかし、送られた、ということとは郵便か？>

<はい。ここに送られてすぐ、貴族の娘に運ばれて、修繕室で魔導
師にバラバラにされました>

<あんたをここで受け取った女っていうのはどんな女だった？>

くいえ、わたくしの魔力封じの布やらなんやらで覆われていて、顔は見えていないのですが、一度アヴィリスに詰め寄って来た貴族の娘から漂う空気と同じものを感じましたので、貴族の娘ではないかと、

(貴族の娘が纏う空気?)

魔導書達は声をひそめているつもりらしいが、ユーリ以外人のいない『禁制魔導書』階に魔導書達の声はよく響いた。

ユーリは彼らの言葉に耳を傾けながら、そつとノートを開いて、メモをとる。

残念ながら『始まりの叡智』の声は聞こえないが、魔導書達が『始まりの叡智』の言葉がある程度声に出して反復するので大体の話はわかった。

アヴィリスが魔導師を探し出してとつちめれば、こっちは万々歳だが、自分の命が危ない以上、他人任せにしっぱなしというのも気味が悪い。

(魔導師はアヴィリスに任せるとして、問題は司書のほうだよね…)

まず、アヴィリスの弟子がアヴィリスの魔導書を盗んで、王立学院図書館に送られ、ここの修繕室で破壊された。

破壊に手を貸したのはココで働く貴族の娘。

(しかも、司書だよね)

一般の人は修繕室に入ることには出来ないが、司書が修繕室に入るのは難しい事じゃない。

司書なら修繕室使用の許可も簡単に取れるし、いちいちチェックしたりしないから、他の人をこっそり招き入れることも出来るかもし

れない。

魔導書を壊したあと、弟子は魔導書のページをいくつか持ち去った。

（自分の魔導の研究に使いそうなページを持ち去ったってとこかな？）

魔導書のページを一般図書階にばら撒き、表紙は封印して他の魔導書の代わりにして出した。

（ばら撒いたのは大体三ヶ月くらい前？）

あの魔導書の気配にここの魔導書達が気づいたのは三ヶ月前、魔力に敏感な『禁制魔導書』達だ間違いはないだろう。

ユーリは首を傾げながら、疑問点を書きあげていく。

（まず、どうやってエセ魔導書を『一級魔導書』階に置いたんだろう？）

魔導書が入荷したら、入荷記録に記され、魔力測定をされ、魔力量に応じて特別な“紋”が押される。

この“紋”は王立学院図書館の図書であるという証明にもなるので必須だ。

しかし、今朝の暴走事件の後に調べてみると、『ルキアルレスの占星魔導』という魔導書は“紋”は押されていたが、入荷記録に載っていないかったのだ。

（魔導書の入荷記録と“紋”を押せるのは館長と副館長から信任された司書と館長と副館長本人だけ……）

信任された司書は全員男性で入荷記録にない魔導書に“紋”を押すような不精な事をしない。

彼らならば“紋”を押す前に『ルキアルレスの占星魔導』の不審に気づき、今回の『迷子の魔導書』事件はユーリを巻き込む前に終わっていただろう。

と、言うことは……。

・司書の協力者は貴族の女性で魔導書管理に関わる司書？

ユーリはノートに書いた文字をじっと見つめる。

(この条件にまるまる当てはまりそうな人は一人だけいるけど……) ちらりとノートの隅に書いた文字が引つかかる。

・魔導書のページをばら撒いた司書は図書館の構造に詳しくない。

金髪碧眼巨乳美女にはこの一点が当てはまらない。

(じゃあ……)

・魔導書を運んだのは貴族の女性司書。魔導書の偽造に関わったのは別の司書？

(大体、魔導書のページが何で三ヶ月間も隠し続けることが出来たのか、わからないんだよね)

利用者の多い一般図書階にはら撒かれたページ。

人目が少ない場所に隠されていたが、いままで一枚も見つけられない

事がなかったというのはちょっとおかしい。

・ページをばら撒いたのはつい最近？

(アヴィリスの弟子がアヴィリスの動きに気付いて魔導書のページをばら撒くように指示した?)

『禁制魔導書』たちの時間感覚が全く当てにならないのが痛手だ。いつ頃ばら撒かれたのか知れば、ちょっとくらいヒントになるかもしれないのに……。

(うーん……)

しかし、わからない事はわからないなりにでもノートに書き連ねていくとちょっとずつわかる事や繋がる場所が見えてきた。

(とりあえず、近いうちに修繕室の利用申し込み記録とか郵送記録とか調べてみればいいか……)

<そこの体が貧しい娘も一応貴族だが……こいつは違つか?>

「ちょっと待てい!! あんたら、あたしを疑うなんてどーゆー事!」?

ぎよつと顔を上げたユーリに魔導書達は事も無げに言い捨てる。

<捜査では公正かつ客観的な視点が必要だからな>

<協力していた身内が実は財産を狙う泥棒だった。何てことはよくある話だろっ?>

「あんたら！！あたしがどれだけ苦労して魔導書を元に戻したか知ってるでしょうが！！」

本当に燃やしてやろうかと危険な思考に陥りかけたユーリを『始まりの叡智』の静かな声が鎮める。

<ああ、いえ。この娘は違います。わたしを運んだ娘ではありません>

<ほう？>

<何でこの娘が犯人じゃないとわかるんだ？>

どうやら、『始まりの叡智』が弁護してくれているらしい。

なあんだ、と若干つまらなそうな魔導書達に文句を言おうと口を開いた。

途端、何故か同情するような視線を感じた。

「な、何？」

<あのな、『始まりの叡智』がな。『わたしを運んだ娘はもっと胸元がやわらかく、纏う空気も華やかでした』だってさ>

(この魔導書、燃やしてもいいかな？)

魔導書の通訳を聞いたユーリは真剣に考え始めた。

18Pフオローにならない(後書き)

お気に入り登録、ありがとうございます。

話も佳境に入ってきました!!

そろそろ最終局面に向けて頑張ります!!

最初は中編にしようと思っていましたが、やたらと長く……。
ネタが空から降ってくればいいのに……。

19P 逢魔が時

久しぶりに授業に出たユーリは、各先生方が出した課題をレポートにして提出するよう言われた。

副館長に授業を休まされたユーリに配慮して、エリアーゼ館長が先生方に掛け合ってくれたらしい。

課題にはいくつか本が必要になるため、一般図書階の三階にいた。

ここは一般図書階の中の資料階と呼ばれている。

専門階ほど高度な内容は記されていないが、それなりに専門的な事が書かれている本や図鑑がそろっているためだ。

「……つと!!」

ユーリは書架に掛けられた移動式の書架梯子に登って本を引き出していたが、はずみで一段踏み外してしまう。

慌てて体の態勢を立て直したものの、揺れた反動でポケットからはみ出していた封筒がひらひらと絨毯の上に落ちた。

四方を薄水色のリボンで縁どられ、野薔薇を意匠にした薄紅色の封緘で閉じられているその手紙は、エリアーゼ館長からのものだ。

ユーリは落としてしまった本と共にその手紙を拾うと、閲覧用読書机の椅子に腰かけた。

今日、図書館に入る前にエリアーゼ館長の家に仕える家令と名乗る壮年の男がユーリに手渡したのだ。

(何でわざわざ人を使って手渡させたんだろう?)

ユーリへの手紙ならば図書館に直接届けたほうが早いし確実だ。

それなのにエリアーゼ館長はわざわざ第三者を介入させてまでして

ユーリに手紙を届けた。

(なんか、嫌な予感がするなあ)

ユーリは手紙の上でくるりと指で円を描き、その中で十字を描く。アリナに教わった魔除けのおまじないだ。

魔導の成績がよろしくなかったから効果があるかどうかはわからないが、ちよつとは気が軽くなった。

封筒を開くと中からふわりと花の蜜とさっぱりしたハーブの香りが漂った。

ミリアリアやエイリー達のような貴族の女性司書達がつけている香水とは違って、爽やかで優しい気持ちになれる香りだ。

鳥の意匠を透かした品のいい便箋にはエリアーゼ館長らしいおやかな筆跡が躍っている。

しかし、その筆跡が綴る穏やかではない事実と文字にユーリは顔をひきつらせた。

「ユーリへ。」

ギーズノン司書達から詳しい事は聞きました。随分と苦勞をかけているようですね。

今回、あの魔導師を『禁制魔導書』階に連れて行った事は特別に不問にしてあげますから、

とにかく図書館でうっかり死人を出さないように。

昨日の朝、うっかり死人が出そうなほど膨大な魔力の暴走があった事は内緒にしておこうと、ユーリは誓う。

そうそう、その事件をさっさと終わらせるために、わたしも色々

と調べてみたのです。

残念ながら時間もないせいであまり調べることはできませんでしたが、いくつか情報があります。

おそらく、犯人はアイギス・フュイン＝ネルーロウ・ファージェイウスという魔導師でしょう。

理由はいろいろありますが、あなたは知らずとも良いでしょう。それよりも、気をつけるべきは内なる敵。彼に協力した司書たちの事です。

追い詰められた彼が逆恨みして、司書達に計画を狂わせたあなたを殺すよう命じるかもしれません。

(おいおいおい!!!)

綺麗な手紙でさらっと命の危機を告白された!!

魔導師なんかに関わるんじゃないやなかつたと今更ながらに後悔する。

残念ながら、彼に関わる司書の事はわからなかったのですが、彼はここ半年ほど前から何度も、チューリに出入りしていたそうです。そして、気になるのが、その際に誰ぞの使いで化粧品や香水を持ち歩いていた事。

言いたい事はわかりますね？ユーリ。

香水の匂いと偽物に気をつけなさい。

わたしもどうにかして早く帰れるようにしますから、あと二日、無事でいなさい。

P.S

学校を休んでいた間の事は心配いりません。学部長や先生方に頼んで手を打ってあります。

学生の本分を忘れずに。 けして無理はしないように。

エリアーゼ」

読み終わったユーリは天井を仰ぎ見た。

(どー気をつければ良いっていつのさ……)

むしろ、現場に居ずして今回の事件の黒幕を調べ上げたエリアーゼに驚きである。

それとも、エリアーゼが気づくほど、アイギス魔導師が不審な行動をしていたという事なのだろうか？

(ん〜、わからん……)

借り出した本を両腕に抱えて持ちながら、一般図書階二階の学習室に向かう。

学校を休んでいる間の出席日数と授業をレポートで補えるのは良いが、面倒と言えば面倒だし、大変だ。

魔導師のなんやらかんやらに付き合う暇はない。

(とりあえず、事件の事は魔導師に任せて、あたしは学生の本分を果たせばいいか)

……考えるのが面倒になって、丸投げしたわけである。

学習室は半個室状態になっている机と椅子が整然と並ぶ部屋だ。

学習室の扉と学習室の奥に配置してある柱時計に動物を象った意匠が施されているため、その意匠に關した名称で呼ばれる。

例えば、いまユーリがいるのは双頭の鷲が柱時計に君臨する『鷲の学習室』。

一般図書階に数ある学習室の中で一番不人気な学習室である。

理由は王立学院図書館の奇っ怪な噂のせいである。

曰く

・学習室で居眠りをするとう頭の鷲に狙われる。

(大げさな……)

噂の真偽はともかく、いつでもここは空いているので空いている机を探して動き回らずに済むのは楽だ。

「あ、エンブレム落としてる」

本を机の上に置いたユーリは胸ポケットに付いているはずのエンブレムの不在に気付いた。

(あゝ、あの時に落としたかな?)

脳裏に梯子の上で足を滑らせた光景が浮かぶ。

(取りに行くてくるか?)

面倒臭そうにユーリは溜息をついて立ち上がった。

埃が立たないように特別に作られた深い色の絨毯の上に、セフィールド学院の普通科を示すエンブレムが転がっていた。

「あゝ、あつたあつた」

(エンブレムの再発行してもらおうの面倒なんだよねえ)

身分証明書でもあるため、コレがないと授業を受けるために面倒な手続きをするはめになる。

そんな面倒は勘弁と、ユーリは手元に戻って来たエンブレムをきちんと着け直した。

「ん?げっ!?!」

資料階から出ようと本棚の迷路から抜け出す直前で、ユーリは慌て

て本棚の影にへばりついた。

ユーリの視線の先には本棚を背に向かい合う男女。

黒縁眼鏡をかけた小太りの中年男性が髪の高い女性と立っている。

(副館長！？何でこんな所に?)

動くとぶるるんつと震えそうな下っ腹と神経質そうな顔を見たユーリはこそこそと本棚の影に隠れた。

副館長は普段からユーリに難癖をつけながらも、色々ときき使ってくる。

仕事は休みでも、今日の様に授業に必要な資料を集めに来ていたとしても、図書館で奴に見つかるかどうかでもいい雑用から、他の司書のミスの尻拭いまで無駄に働かされてしまう。

(今日という今日は勘弁してよね!!)

たださえ理不尽な理由で命の危機にさらされているのに、先生方からレポート提出も命じられている。

副館長の難癖につき合う暇はないのだ。

(ん?)

いそいそと別ルートからの脱出しようとしたユーリは、甘い花のような匂いに気付いて立ち止った。

「本の借り出しをここでしていますから、まだ遠くには行ってないと思います」

(この声は……)

鼻に付くほど甘ったるい香りに似合う、高く甘ったるい声にユーリは聞き覚えがあった。

ユーリはそつと彼らのいる本棚に近づき、覗き見た。
窓から夕陽が差し込み、絨毯の上に長く伸びる暗い二つの影。
赤い光を浴びているのは、華奢な体躯に似合う可憐なワンピースを
纏う女性。

ドレスと言っても通用しそうな服を纏い、鳥の雛のようにふわふわ
した髪と愛らしさが強調されるような化粧が施された顔には見覚え
があった。

(やっぱりエイリーか……)

アヴィリスが来た初日に助けだした時と同じ匂いだったため、気に
なったのだ。

(それにしても、なんでエイリーがここに?)

エイリーは没落したとはいえ貴族の娘。

ご多分に洩れず、彼女も労働に意欲的ではないタイプなので『埃っ
ぼくて辛気臭い』という理由で一般図書階の資料階に来て仕事をす
る姿を見た事はないし、この先永久に見る事はないとユーリは思っ
ていた。

(しかも、副館長と一緒に?)

エイリーの対面で立っているのは黒縁眼鏡の中年男。

ミリアリアやセイラ達と『気持ち悪い』やら『無能』やら副館長の
陰口を嬉々として言いまくっているエイリーが、何故当の副館長と
一緒にいるのか。

「しかし、件の司書はいないじゃないか」

(は?)

副館長の口から、聞き慣れない声が聞こえた。

若々しい、けれど居高な口調の声が副館長の丁寧に整えられたちよび髭の下に鎮座する唇から出た。

その事に気付いたのか、副館長が顔をしかめる。

「くそつ、この図書館。魔導が使いづらい」

副館長が自分の手を見下ろして苦々しく吐き捨てた。

上質な絹布のように張りのある綺麗な肌に包まれた細い手が、副館長の手首から出て来ている。

顔や腹がたぶたぶして、肌もくすんでたるんでいるのに、手だけが綺麗なのは異常。というか、気持ち悪い。

(てゆうか、魔導って……)

(＜魔導師は変幻魔導に優れた魔導師で……＞)

(『偽物と香水に気をつけなさい』)

『始まりの叡智』とエリアーゼの手紙が知らせた情報が脳裏に浮かぶ。

(めっちゃストライクじゃん。つーか、あの陰険魔導師何しに王都に行ったわけ？あんたの標的はココにいるっつーの!!!)

ひとしきり本棚の影でアヴィリス魔導師に文句を言っていると、二人が動き出した。

ひょいっと覗いてみると、副館長姿の魔導師(?)が閲覧席の机の上で何かを描いている。

「アイギス様。それは？」

「搜索の魔導を使う。図書館のどこかにいるならすぐわかる」

(げっ!?)

二人の会話と詠唱を聞いたユーリは慌てて立ち上がった。図書館内には魔導をうまく使えないように細工がしてある。しかし、一般図書階は魔導に対する細工がゆるい。

もちろん、細工がないわけではないから、ここで魔導を使うと膨大な量の魔力を消費することになるし、あのニセ副館長のように魔導がきちんと発動しない事が多い。

けれど、いま、ユーリは彼らにあまりにも近い場所にいる。

搜索の魔導がどう発現するかわからないが、一瞬でも居場所を示されたら捕まってしまう。

詠唱が終わった瞬間。

ユーリの近くで光がはじけた。

「わっ!?!」

驚いて声をあげてしまった。

「こっちだ!?!」

(げっ!?!)

走ってくる足音と声。

なりふり構わず走り出したユーリが一瞬だけ振り返る。

貴族らしい華美な服を夕陽の赤に染めた一組の男女が、獣のようにぎらついた目をしてユーリを見ていた。

19P 逢魔が時（後書き）

ちよつと書き直しました。（六月十二日）

20P 闇の中 (前書き)

アヴェリリスの話です。

彼も頑張っているんですよ。

20P 闇の中

ここで少しばかり、時間は巻き戻る。

柱時計の時間をくるくる回して、一日前の時間に戻そう。

アヴィリス魔導師がユーリを脅して王都へ帰った、次の日。

ユーリがエリアーゼからの手紙を受け取る、一日前。

丸い、青白い光が暗い空間の中、ぼんやりと浮かんでいた。

光は部屋に対して小さく、光の届かないところはどろりとした闇で覆われていて、部屋の広さが測れない。

手入れが一切されていないらしい部屋は黴臭く、埃が絨毯のように敷き詰められている。

装飾も、家具もないがらんどつな部屋はひどく陰気で湿っぽく、まるで牢屋の様だ。

その部屋の灰色の壁に、足を一本無くした椅子がぶちあたって砕けた。

「くそっ!!!」

吐き捨てるように舌打ちをしたのは藍色の髪的美丈夫。

ユーリが言うところの『陰険魔導師』ことアヴィリス・ツヴァイ!!
ネルーロウ・スフォルツィアがいた。

そして、

「うぐ、んーっ!!!」

ずりずりと這いずる音と共に、丸い糞虫みのむしのような生き物が闇の中から出てきた。

糞虫のような生き物は、何故か黒縁の眼鏡をかけていた。

それもそのはず、糞虫のような生き物は、布で猿轡を施され、両手足首を後ろ手にしっかりと拘束された中年男性。

黒縁の眼鏡をかけ、貴族の礼服を纏った小太りの男は、この王立学院図書館の副館長。

王都から王立学院図書館に戻って来たアヴィリスは彼と共に隠し部屋に閉じ込められたのだ。

不明瞭な声で叫ぶ、五月蠅い糞虫にうんざりしたのか、藍色の髪的美丈夫は青白い光と共に副館長から一番離れた壁際に座り込んだ。

（体が重い。こんな小さな魔導を発現させるだけでこんなに魔力を消費するとは……）

ふわふわと頼りなく浮かんでいる人魂のような光はアヴィリスが魔導で発現させたものだ。

ここの空間を破るためにいくつもの魔導を使おうと試みたが、発現できず、この人魂のような灯りだけが唯一発現出来た。

それも本来ならばする必要のない詠唱を行い、不必要なほどの魔力を犠牲にして。

その上、この灯りを維持するのにさつきから莫大な量の魔力を消費し続けている。

魔力の消費は心身に様々な影響を及ぼす。

いまは疲労を感じる程度で済んでいるが、魔力を消費尽くすと精神と肉体が崩壊してしまう。

（このままでは敵の思う壺だな）

アヴィリスは体から力を抜いて壁にもたれかかった。

それと同時に部屋を唯一照らしていた光が消える。

一片の光も無い完全な闇の中、遠い闇の向こうで押し殺したような悲鳴が上がったが、アヴィリスは無視する。ぐったりと目を閉じて体を休めていると、ぐずぐずとすすり泣く声が聞こえた。

「怨むんなら、この図書館に勤めていながら、ここから出る事の出来ない自分の無能さと俺を嵌めようとした自分の愚かしさを怨むんだな」

アヴィリスの刺々しい口調にすすり泣きが消えた。

静かになった部屋の中で魔導師は、唯一助けになりそうな司書を思い浮かべる。

(あいつは、無事でいるのだろうか)

「ユーリ・トレス・マルグリットはどこだ!？」

あの時、何故ギズーノン司書を頼らなかったのか、後悔してもしきれない。

二日前、王都についたアヴィリスは弟子を探した。

『始まりの叡智』と銘打たれた、養父ちちの魔導書を覆っていた題名タイトルはルキアルレスの名を冠していたが、それに騙されるほど人が好くない事は自覚している。

しかし、探した弟子はいなかった。

しかも、記録によると一週間ほど前から王都を出ていると聞いた。

理由は家庭の事情となっていたが、チューリに向かったのだらう」とはすぐに分かった。

急いでチューリの王立学院図書館に向かい、副館長室に飛び込んだのが、ユーリと別れた次の日の午後。

ユーリの居場所を問いただすと、『一級魔導書』階にいと副館長に言われた。

案内を頼み、『一級魔導書』階の扉の前につく。

狼を意匠にしたノッカーがついた、観音開きの重厚な扉の前で。

背中を強く押された。

「なっ!?!」

驚いて振り返ると、小太りの神経質そうな中年男がアヴィリスを扉の中に閉じ込めようとするようにぐいぐい背中を押している。

「何を……」

怒りと共に吐きだそうとした声は、掌に感じた違和感でかき消えた。背中を押されて、とつさに扉についた右手が扉の中に吸い込まれている。

扉に吸い込まれた右手を引っ張り出そうとするのを、ぐいぐいと背中を押す力がそれを妨害する。

吸い込まれていった右手に力を込めるが、右手の感覚がない。

「やめろ!?!」

言い知れぬ恐怖を感じたアヴィリスは後方に向けてとつさに魔力を放った。

「ひいっ!?!」

魔導によってカタチを顕現していない純粹な魔力は衝撃波に似た効果を顕わした。

しかし、

「くそっ!!」

悲鳴を上げて尻餅をついただけの副館長を見てアヴィリスは舌打ちする。

本来ならば、この周辺を瓦礫の山に変えてもおかしくないほどの魔力をこめたというのに、大の大人を昏倒させることすらできていない。

『王立学院図書館は魔導師には窮屈なつくりになっている』

(ユーリが言ったとおりか、畜生!!)

この王立学院図書館にかけられている魔導が発動したのか、それとも下手に暴れたのが悪かったのか。

扉が体を飲み込む速度が速くなり、それと同時に倦怠感が体を侵食する。

もはや右腕の感覚すらなくなっているアヴィリスはこちらに近づいてくる副館長を睨みつけて牽制する。

「俺に触るな、レイヴン・ツヴァイ・クレルヴォー」

“英雄”もその格好では無様ですね」

アヴィリスの眼光に一瞬ひるんだようだったが、彼が動けないと悟ってか、副館長 レイヴンは傲慢に口を歪めた。

「誰に頼まれた？」

「それを言うと思いますか？」

悠然とレイヴンはアヴィリスに近づく。

もはや、抵抗の力もないと見越したのだろう、優越感に酔ったレイヴンは無防備にアヴィリスに両手を突き出した。アヴィリスの左腕の上衣に労働を知らない、丸く膨らんだ手がかかる。

その刹那。

アヴィリスはレイヴンの腕をさっと避ける。

空を切った腕をそのままに、アヴィリスはレイヴンの脇腹に左手を差し入て派手な上衣を掴み、彼の太い足を払った。

とつさに、レイヴンは両手を扉についてしまう。

ずぶりとレイヴンの腕が半分ほど、扉の中に消える。

甲高い悲鳴を上げて暴れるレイヴンの体を、アヴィリスは左腕と足を使って扉の中に叩き入れる。

元『軍属』だったアヴィリスの蹴りと腕力に、レイヴンはまた違った悲鳴を上げる。

「さあ、どうする！？ このままじゃあ、お前も俺と一緒にこの王立学院図書館の隠し部屋とやらに閉じ込められるんだろつよ！！

あのエイリーとか言う小娘はユーリに助けられたが、俺たちはどうかなあ？おい！！」

言いながら、アヴィリスは無慈悲にレイヴンの体を扉に押し込む。

「や、やめろ！！やめてくれえええええ！！」

「あ？ お前は曲がりなりにも司書だろう？ 閉じ込められても、出られるんじゃないのか？」

「む、むむつ、無理だ！！そ、そそつ、そんなことは！！ 私の仕事ではない！！ そんなくだらない仕事は！！ 下賤な庶民が、労働者どもがすることだ！！」

唾を飛ばし、どもりながら叫ぶ、この王立学院図書館の副館長の肩書きを持つ男。

それをアヴィリスは軽蔑をこめて見下ろす。

「もういい、黙れ」

言い終わるより先にレイヴンの頭がアヴィリスの手によって扉の中に押し込まれる。

じたばた暴れる足を適当に蹴っ飛ばしながら、彼は廊下の奥に視線を送る。

「これで満足か？アイギス」

じろりと睨みつけた先には、カaramel色の髪を緩く結った青年。

虫を殺したこともなさそうな柔和そうな顔の下に、貴族特有の傲慢さと魔導師特有の強欲さが息を潜めていることをアヴィリスは知っている。

「何のことですか？アヴィリスさん」

きよとりと目を丸くして首を傾げる姿は一見すると本当に何も知らないのではないかと錯覚しそうになる。

しかし、アヴィリスはゆっくりとこちらに近づいてくる青年を見据えた。

「しらばっくれるのは止めてくれ。ただでさえ馬鹿の戯言を耳元でわめかれて気が滅入っているんだ。鬱陶しい言葉遊びをしたい気分じゃない」

気怠そうに睨みつけてくるアヴィリスに、青年は花が綻ぶかのような爽やかで優しい笑顔を浮かべた。

「ああ、とつくのうちにバレていたんですね」

「あれだけ証拠を残しておきながら何を言う。魔導書を覆っていた革布に記された封印魔導式とそれにこめられていた魔力の残滓からお前を割り出すことくらい、息を吸うよりたやすい」

気負うでもなく、子供に花の名前を教える親のように、当たり前的事实をアヴィリスは口にする。

しかしその瞬間、アイギスの柔らかな笑みが崩れ、氷のように冷たい無表情になった。

アヴィリスが当たり前のように口にした“事実”を“実現”するのに、どれほどの才と知識、そして研鑽が必要か。

アヴィリスの“当たり前”に到達する前に挫折する魔導師がどれだけいるか。

「図に乗るなよ。アヴィリス・ツヴァイ＝ネルーロウ・スフォルツィア」

アイギスの口から低くかすれた声が吐き出される。

それをアヴィリスはすでに下半身すら扉に飲み込まれながら聞く。

「その畏は対魔導師用に特化しているらしい。精神が崩壊して魔導が使えなくなるまでそこに居続ければいいさ」

絶対勝利を確信した優越感と、加虐感に陶醉した冷酷な口調でアイギスはアヴィリスを見下ろす。

それを怠そつに聞きながら、アヴィリスはアイギスを見上げる。

「ひとつ、訊いてもいいか？」

「ええ、どうぞ」

「何故、偽装した魔導書の題名を『ルキアルレスの占星魔導』にしたんだ？」

問うと、小馬鹿にするようにアイギスは鼻を鳴らす。

「たいした理由はありませんよ」

「ああ、そういえばお前とルキアルレスは研究内容が似通っていたな」

アヴィリスが事も無げに吐き捨てる。

ずっとアイギスは顔をなくす。

その瞬間、アイギスの手でアヴィリスの体が扉の中に押し込まれた。

「さつさと消える。『墮落した蛇』が！！」

「……………うっ……………っ」

アヴィリスは寝転がっていた床から体を起こす。

目を開けたつもりなのだが、一片の光もない暗闇の中、自分が起きているのか眠っているのか。

それすらわからなくなる。

うんと伸びをしたアヴィリスは、ひとつ欠伸をする。

眠ったせいか、魔力が大分回復しているようだ。

少なくとも、閉じ込められた当初の倦怠感と頭痛は無くなっている。

ここに閉じ込められる前の出来事を夢に見た気がする。

(鬱陶しい)

ぐったりと溜息を吐く。

魔導師間にはそれなりに派閥がある。

所属している魔導師互助組合同士だったり、師事を受けている師によるもの、研究内容について。

挙げればキリがないほど、魔導師同士はつまらん事で対立しあう。

夏頃に王都で大きな魔導研究発表会があり、アイギスとルキアルレスの研究内容がたまたま同じだった。

たまたま、敵対する魔導師への宣戦布告として研究内容をわざと同じにする輩がいなくてもないが、今回は本当に偶然らしい。

研究内容を変える事はできるが、どうやら今回はどちらも譲らなかつたらしい。

まあ、そのあたりはよくあることだ。

ルキアルレスは気に留めていなかったようだし、アイギスは……気にしていたんだろう。

(偽の魔導書を他人の名で出すなんてな)

魔導師にとって魔導書は大事な研究記録であり、魔導師としての力量を知らしめる媒体であり、総じて魔導師の魔導師としての生き様や在り様を伝える“分身”といって過言でないモノなのだ。

つまり、魔導書は魔導師の信用や信頼問題にかかわる代物。

ルキアルレスの名であのようにおかしな魔導書が出たと知られると、ルキアルレスは少し厄介な目に遭う。

もちろん、ルキアルレスは作っていないと言い張り、断固として戦

うだろうが、それでも調査の間は魔導に関わる行為を禁じられるだろう。

おそらく、アヴィリスの養父の魔導書をバラバラにした後、突発的に考え付いた事なのだろうが、ルキアルレスにとっては、とんだとばっちりだろう。

(そうだった意味では、あいつは魔導師としての自覚がなかった、ということか……)

魔導師として、決してしてはいけない行為を行った弟弟子をアヴィリスは思う。

溜息を吐いたアヴィリスは、ごろりと寝転がり、……また起き上がった。

さつきから、物音ひとつしない。

自分が動いた衣擦れの音、床をなぞる音。

人が動けば必ず聞こえるはずの音が聞こえない。

(どうなって……)

アヴィリスはハッと目を見張る。

声を出した、はず。

しかし、声は聞こえない。

(『その罫は対魔導師用に特化しているらしい。精神が崩壊して魔導が使えなくなるまでそこに居続けなければいいさ』)

アイギスの声が脳裏に閃く。

(そういうことか……)

光もない、匂いもない、音もしない。

常人ならば、パニックを起こしている状況。

常人ならば、いずれ発狂する現実。

しかし、“英雄”と呼ばれた宮廷魔導師はくつと口角を上げて何も見えない闇を睨みつける。

(俺が壊れるのが先か、ここが壊れるのが先か、勝負するとしようじゃないか)

アヴィリスはゆっくりと目を閉じて思考する。

この魔導の正体を思案し、打ち破る魔導のパターンを計算し、シュミレーションする。

危機的状況でありながら、アヴィリスは嬉々としてこの状況の打破を考えていた。

結局のところ、魔導師とはこういう存在なのだ。

魔導に己の全てを捧げて生きる生き物。

死の一瞬まで魔導を考え続ける事が出来るかどうか。

端的にいえば、それが出来る魔導師の事を世間は“一流”の魔導師と呼ぶのだ。

20P闇の中(後書き)

アヴェリスさん。犯人を目の前にして大ピンチ？

彼は悲しいくらい魔導オタクです。

21P 闇の中、駆ける(前書き)

ユリさんが活躍(?)します。

21P 闇の中、駆ける

……タタタッ

ユーリは赤い夕陽を浴びながら、走っていた。

彼女を追うのは、二つの影。

カラメルのような褐色の長い髪を頂のあたりでひとつに結び、緑の目をもつ柔和な顔立ちの男性。そして、鳥の雛のような髪を持つ可愛らしい女性。

二人はこれからどこかのパーティに出てもおかしくないような品のある格好と容姿をしているのに、夕陽の赤い光を浴びて走ってくる姿は、この世のものでない生き物に見えた。

特に男のほうは獲物を見つけた肉食獣のような目をしている。

彼がアイギスという魔導師なのだろう。

ユーリはそれだけ確認すると足をさらに速く動かす。

あっちは二人がかりで追って来ているが、エイリーは小綺麗なワンピースに踵が高く細い靴を履いているし、アイギスらしい魔導師も綺麗なクラバットで首元を飾り、凝った装飾がされた綺麗な上衣を纏っている。

そのせいか、二人とも動きが悪い。

一方、ユーリは機能性重視の制服姿で、丈夫で走りやすいと定評を受けている学院指定の編上げのロングブーツだ。

(魔導師のほうは魔導が使えないみたいだし)

背中を見せて走るユーリに攻撃ひとつ仕掛けずに闇雲に走って追いかけて来るのがその証拠だろう。

(だったら……)

ユーリはいきなり方向転換して本棚の角を曲がる。

「待てっ！！！」

慌てて声を荒げた魔導師の視線の先で、セフィールド学院の制服のスカートの裾がくるりと本棚の角の向こうに消えた。

(くそっ！！！)

さっきから魔導師の詠唱を行っているのだが、どれも発現しない。

おそらく、魔導がうまく発動しないように細工がされてるのだろう。だから、走って追いかけているのだが、少女はすばしっこいうえに本棚の小さな隙間を縫う様に走る。

わずかに差し込む夕陽の不気味な光の中、ちらり、ちらりと見える制服の裾を追ううちに、方向感覚すら怪しくなってくる。

認めたくはないが、地の利は少女のほうにあるらしい。

「仕方ない。資料階の入り口で待ち伏せをしよう」

どうせ出入り口はひとつしかないのだ。

少女もそこを通らなければ外には出られない。

そう考えたアイギスは少女を追うのを諦めて踵を返す。

「ま、待って下さいませ！！アイギス様！！……きゃあ！！！」

短い悲鳴にとっさに足を止めたアイギスは、暗い道の真ん中で振り返る。

数メートル先でエイリーという女司書が倒れている。

攻撃を受けたわけではなく、ただ単に転んだらしい。

早く立つように命じようとしたアイギスは、ふと、あたりを見回す。

黒い大きな柱のような本棚が乱立し、アイギスとエイリーを取り囲んでいる。

夕陽の赤い光が消えて行き、天井や足下から柔らかな光が落ちて来る。
月明かりを集めたかのように優しい光は、王立学院図書館のみで使われる、セフィールド学術院で開発された特別な照明だと聞いた。
柔らかな光が絶対なる威厳をもって、王立学院図書館が誇る膨大な数の図書とそれを内包する書架を照らす。
ぞくりとアイギスの背中に寒気が走った。

王立学院図書館は『賢者の迷宮』。

「ここは、どこなんだ？」

呆然とした彼の声がむなしく響いた。

「はあ……っ！……はあっ！……」

資料階から学習室に逃げ込んだユーリは、椅子に座り込んだ。

（やった……）

とりあえず、魔導師とエイリーを撒く事が出来たらしい。

（でも……）

荒い息を整えながら、ユーリは立ち上がる。

残念ながら魔導師の側にいるエイリーは一応司書だ。

例え、資料階にあまり顔を出さなくても、一般図書階の司書ならば本棚の迷路を抜けるコツくらいわかっている。

（たいした時間稼ぎにはならないよね……）

本を回収して、足早に学習室を後にする。

茶色の革靴に包まれた足先が向いたのは王立学院図書館の不思議の一つに謳われる、『一般図書階二階の階段踊り場の大鏡』の前。

(この時間なら……)

森の植物や花々を意匠にあしらった楕円の鏡。

鏡はいま夕陽の赤い光を浴びて鏡面に写る全てを緋色がかって見せている。

その緋色の世界に栗毛の小柄な少女が写る。

少女は緋色に染まる自分の姿をその星夜のような漆黒の瞳で見つめ、装飾のひとつに手を伸ばす。

その瞬間。

鏡面がぐにやりと歪む。

その歪みは一瞬で元に戻り、鏡面は赤い世界の中にまた少女を写す。しかし、少女の姿は鏡面の外にはない。

ユーリは真っ直ぐに目の前の光景を睨む。

王立学院図書館の一般図書階二階の階段踊り場に似た風景。

階段を上ると、また一般図書階二階の階段踊り場と似た風景が広がる。

ユーリはその鏡に次は何もせず飛び込んだ。

鏡面は少女を飲み込み、彼女の真っ直ぐな背中を鏡面に写す。

鏡の中の世界を、小柄な少女が走っていく。

<むっ?>

<おやあ?>

『禁制魔導書』階の魔導書達がさわりさわりと騒ぎ始める。

<誰かが魔導を使っているようだねえ>

<ふむ？何者かな？>

<ここでは魔導が正常に働かないというのに無駄な……>

さわさわと魔導書達は己達の領域を乱す者を探る。

<うん？魔導師は二人か？>

<一般図書階でうるついている奴と、一級魔導書階の罨にはまっている奴がいるね>

図書館内を探っていた魔導書達はふと、こちらに向かって来ている気配を感じる。

隠し通路や隠し部屋、たくさん罨を紙一重でくぐり抜け、正しい道を進む者は自分達がよく見知っている気配を纏っている。

<おや、ユーリだ>

<随分焦っているようだねえ>

<魔導師に狙われているというのは嘘ではなかったようだの>

<ふむ、という事は>

どこか嬉しそうに魔導書達は口を開く。

<我らの手で魔導師を懲らしめる事が出来るのだな！！>

<やっぱり、七大惑星の魔導を使おう！！>

< いやいや、闇の魔導で精神崩壊をさせたほうがいい、命は助かるかもしれないが、二度と魔導が使える苦痛は魔導師には痛手だろうか？>
< うわっ、ねちっこい！それなら、ずぱっと七大地獄の魔導が良くない？>

< いやいや、ここは伝統的にオソドックス四大元素の魔導で……>

その言葉を皮切りに魔導書達は嬉々として魔導師の懲らしめ方を話し続ける。

ふと、魔導書達は一瞬おしゃべりをやめる。

その瞬間、『禁制魔導書』階の扉が派手な音と共に開いた。

「や、やっと着いた……」

見慣れた『禁制魔導書』階の光景に、足の力が抜けた。

(久しぶりに違うルート使うと、想像以上に疲れる……)

へろへろといつもの定位置のソファに座りこんだユーリに視線が集まる。

< 今日はいつにまして騒がしいな、ユーリ>

< おかしな魔導の気配を感じたが、魔導師が来たのだろうか？>

嬉々として問う魔導書達に、ユーリは諦めの溜息を吐く。

どうやら、彼らに隠しておく事は出来ないらしい。

「『始まりの叡智』をバラバラにした犯人の魔導師がここに来たの」

<やはりか!!！>

<『飛んで火に入る夏の虫』とはこの事だな>

<これで奴に始末をつけれるというものだ!!！>

<そうと決れば、話は早い!!！ユーリ、我らを外に出すのだ!!！>

魔導師達が剣呑な口調で騒ぐのを聞きながら、ユーリはむっくりと体を起こす。

「うん。まあ、そうなんだけど、いま魔導師がどこにいるのか、わかる?」

<うん?ユーリ。我らをここから出してくれるのか?>

「まさか。あたしはこのまま二日間、あの魔導師から逃げ切って、エリアーゼ館長の帰りを待ちます」

魔導師達の期待をユーリは一言でぶった切った。

<何とやる気のない!!！>

<情けないぞ、ユーリ!!！>

「うるさいなあ。あたしは普通の女学生なの!!！あんた達だってあたしの魔導師の成績が最悪だったの知ってるでしょう!?!」
ぎゃんぎゃん不満をたれる魔導師達を一喝する。

ユーリは魔導師が使えない。

魔導というものの仕組みと概念はわかる。

けれど、魔力が魔導として発現させる事が出来ない。

だから、初等科の最終学年の時に魔導科に進む事は全く視野に入れていなかった。
むしろ、初等科に実技試験があったらユーリは初等科卒業すら出来なかっただろう。

<だから、我らを連れていけばいいだろう？>

<そつだ！！お前が危なくなったら、代わりに我らが魔導師を成敗してくれる！！>

（あたしが危なくなる事、大前提かい！？）

思わずムツとしたが、大きく息を吸う事でやり過ごす。

「じゃあ、訊くけど！！あたしはあんた達の中からどの魔導書を選べばいいの！？」

ユーリの問いに魔導書はぐっと黙る。

<それは……>

お互いに最強の魔導書であるという自負がある魔導書達。

『自分が行きたい』、『いいや自分だ』、と言い合う魔導書達に呆れた視線を投げかけながら、だらりとだらしなくソファにもたれかけた。

<ユーリ！！>

<起きろ！！ユーリ>

魔導書達の声に気付いて、ユーリはソファから体を起こす。

どうやら気付かないうちに眠ってしまっていたらしい。

<外に出る魔導書が決まったぞ!!!>

「え？」

ヤケクソで言い放った言葉を、魔導書達はまともに受け取っていたらしい。

<『始まりの叡智』殿を連れて行け>

「ええっ！？だって、魔導師がここに保管してらって……」

<その魔導師は一級魔導書階の罨に囚われているぞ>

「え？」

どうやらアヴェリス魔導師はここに来てはいるが、一級魔導書階の罨に嵌められていたらしい。

<ちなみにもう一つの魔導師の気配はまだ資料階だ>

「まだ迷ってるんだね……」

ポケットから丸い懐中時計を出す。

王立学院図書館から支給されている懐中時計を開くと、閉館時間をとっくに過ぎている事を知らせてくれた。

窓を見てみると月が半分だけばかりと闇の中に浮いている。

いつからアヴェリス魔導師が罨にかかってしまったのだろうか？

アヴェリスが王都に旅立ってから今日で二日目。

(ぎりぎり、かな?)

あの部屋には光が一片もささないし、温度の変化もない。

その上、ある一定以上の時間をあの部屋で過ごす、じわりじわり

と五感が麻痺していくよう魔導が仕掛けられている。
光もなく、音もなく、温度の変化のない部屋に長時間閉じ込められると、人は精神の崩壊を起こすと聞く。

精神の崩壊した人間はどれほど強大な魔力を持っていても魔導は使えない。

あの部屋は対魔導師用に特化した部屋なのだ。

「ああ、もうっ!!」

ユーリは頭をがしがし掻きまると、足音も高く暖炉の中に手を突っ込む。

取り出したのは布でしっかりと保護された魔導書。

「一緒に来てくれますね？」『始まりの叡智』

ユーリの声が届いたのか、布の中で魔導書がふわりと輝いた。

22P 闇の中、集う(前書き)

何か、微妙にぐでぐで……。
思いつきで書くからだ。

22P 闇の中、集う

アヴィリスは闇の中にいた。

視覚は一切効かない中、嗅覚と聴覚が殺されたと気づいてから、どれほどの時間が経ったのか。

口に入れた指をしゃぶり、味覚まで死んでいると気づいたのはいつだっただろうか？

さきほど、いや、もうずいぶん前？

思わず歯を噛みしめ、口の中に何かが入っている事に気づく。

五感が無くなる魔導を認識してから、自害対策のために口の中に布を入れたのだ。

触覚、その中でも生命維持に深くかわる痛覚を感じなくなるといふ事は、危険が察知できなくなるといふ事だ。

さっきのように歯を噛みしめた時、うっかり舌を歯の間に挟んでいたらどうなるだろう？

普通の状態ならば、『痛い』、もしくは違和感を感じて噛むのをやめるだろう。

だが、それを感じなくなれば、どうなる？

答えは簡単だ。

舌が分断しようが、歯が折れようが、死ぬまでずっと歯を噛みしめることになる。

（まだ、触覚は残っているようだな）

しかし、かなり鈍くなっている事を自覚する。

口腔という敏感な器官の中の異物に意識しなければ気付かなかつた。常人ならばとつくのうちに発狂している空間の中、まともに自我を持って自害対策をしているあたりで彼の魔導師としての力量が推し量れる。

けれど、魔導の浸食は間違いなく彼を蝕んでいるらしい。

さつきから脳内で組み立てている魔導理論が所々思い出せない。

(くそっ、思考まで浸食されてきているのか?)

それともこの暗闇の中、精神が悲鳴を上げかけているのだろうか？
考えれば考えるほど、思考の坩堝にはまる。
それが彼を焦らせ、彼の精神を蝕む。

(駄目だ)

目をもう一度瞑る。

意識を集中させて、深く深く、息を吸い込む。
魔導師として、自分を蝕む魔導の欠片を吸い込むように。
この絶望的空間から抜け出す一手を手繰り寄せるように。

魔導師として一番初めに養父から教わった、呼吸。

『魔導師たるもの、この呼吸を忘れてはいけない』

やんわりと微笑む、冬空を写した薄氷のような薄水色の瞳。

『アヴイリス。君はひとりだと思っているようだが、魔導師は、いや魔導師でなくとも、生き物というものはたくさん生命と関わり合い、重なり合い、交り合って存在している。私は魔導師として、君にまず君の小さな世界がどれほど広く、深く世界と繋がっているのか、教えよう』

(息をする事は、世界を飲み込む事)
養父の言葉が脳裏に浮かぶ。

魔導師のわずかな抵抗。

永遠のような時間と闇から身を守る、最後の術。

最早、魔導を打ち破る事は出来ない諦めながらも、最後まで魔導師らしくあるうとする矜持プライドの現れ。

そんな魔導師の意地が奇跡のような光を生む。

比喩でも何でもなく、部屋の中に突然小さな光が生まれたのだ。

長時間暗闇の中にいた拳句、視覚がなかったアヴィリスは、突然の刺激に目を覆う。

白に染まった視界が、焦点を結ぶ。

灰色の部屋、薄暗い中にぼんやりと浮かぶ温かい色の光、光を掲げる小柄な人影。

それを認めると同時に五感が戻って来た事も感じた。

汗で冷たく湿った服、どこからか漂ってくる異臭、自分が吐いている息の音。

「だれ、だ？」

口から吐き出された自分の声は異常に引き響いていた。

その声を聞いたのか、温かい色の光がこちらに近づいてくる。

「こんな所で、何してるんですか。アヴィリスさん」

小さな光を掲げ持っているのは肩先で切りそろえた栗色の髪に漆黒の瞳をもつ小柄な少女。

王立学院図書館司書、ユーリ・トレス・マルグリットが闇の中に立っていた。

……とぼぼぼ。

優しい音と共に、さっぱりした香りが部屋中に広がる。

ティーポットから流れ出る薄黄緑色の液体をカップに受け取るのは、ユーリだ。

彼女はそのカップを対面のソファに座る男に手渡す。

「なるほど、それであんなところに閉じ込められていた、と」

「ああ」

カップを受け取ったのはアヴィリス。

彼は疲弊した様子でカップの中を覗き込み、中身が冷えたハーブティーだと知ると、一気に飲み干した。

二人がいるのは、魔導階のカウンター奥のバックヤードにある、司書用の休憩室。

暖炉や椅子、机や絨毯に梃をモチーフにした意匠が施されている、通称『梃の部屋』。

給湯設備はない部屋だが、簡単な食事をするくらいは出来る。

あの部屋から出た二人は、とりあえず、ここに来てお互いの情報を交換し合ったのだ。

「あのお、副館長は大丈夫なんですか？」

アヴィリスと一緒にあの部屋にいた副館長を、ユーリは思い浮かべる。

アヴィリスによって縛られ、あの部屋にいた副館長は、すっかりや

せ細りぐつたりと気を失っていた。

日ごろネチネチ嫌味は言う、全く役に立たないうえに、アヴィリスを陥れようとした副館長だが、あの姿はさすがに哀れだった。

しかし、罠に嵌められた本人は全く彼を憐れんでいないらしい。

ユーリが持ってきたバスケットから、サンドイッチを取り出したアヴィリスは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「知るか」

「……」

顔も見たくない、とあの暗闇の部屋に副館長を放置しようとしていたアヴィリスを、ユーリは説き伏せて外に出してもらった。

ユーリの体格では気を失った副館長は運べない。

アヴィリスはユーリの頼みを渋々引き受けて、副館長を外に出してくれたが、同じ部屋には居たくないらしく、別の部屋に軟禁中である。

(命に別状はないって言ってたけど……)

診断した魔導師をちらりと見る。

あのそっけない様子からして、その診断に少々不安があるところだが、副館長にはかり構っていられない。

それに、命の危険が迫っているのは副館長ではなく、ユーリ達だ。

「さて」

サンドイッチを食べて人心地ついたらしい。

アヴィリスは多少機嫌が直った様子で、ふっと口角を持ち上げた。

「こちらとしては、反撃を仕掛けたいところだが」

ちら、と視線を投げかけられたユーリはさっとそっぽを向く。

「言つときますけど。あたし、アヴィリスさんに加担する気ないですからね？ エリアーゼ館長が帰ってくるまで、図書館内で大人しくしてたら問題ないし」

「おい……」

非協力的なユーリに、アヴィリスは顔をしかめる。

「あ、そうだ。預かってた『始まりの叢智』を……」

言いながら、バスケットから魔導書を出そうとしたユーリは。

次の瞬間、床に伏せていた。

体を叩く鈍い振動。

頬に当たる柔らかい絨毯の毛足。

そして、ユーリが座っていた椅子の背中に深々とナイフが突き刺さっていた。

「な……」

「動くなー!!」

体を捻って顔を上げると、アヴィリスが緊迫した表情を浮かべてユーリの前に立ちはだかっていた。

アヴィリスの視線の先には、二人の人影が立っている。

一人はカラメル色の髪をひとつに結った、緑の目の男性。

もう一つは鳥の雛のような髪を持つ、可愛らしい顔立ちの女性。

「アイギス」

唸るような声に、カaramel色の髪の男性はどこか軽薄そうに口元を歪めた。

「生きていたんだな。アヴィリス」

その隣で、女性の手元から小さな毛糸玉のようなものが零れ落ちる。それを見たユーリは、とっさにアヴィリスの足を力いっぱい引つ張った。

予期せぬ体のバランスの変化に、アヴィリスはいつそ無様に見えるほど派手に転んだ。

ばふんっ

なんとなく情けない音と共にアヴィリスは絨毯の上に大の字になる。

その瞬間。

毛糸玉がぱつと花のように開き、棘のついた蔦のような糸がアヴィリスの居た場所に突き刺さるように伸びた。

「いつ……」

したたかに打ちつけた鼻を押さえて上げようとした顔すれすれに飛び出した棘の糸にさすがのアヴィリスも息を飲む。

「あの毛糸玉に捕まっちゃダメ。あれは魔導師の魔力を吸い取って拘束力を増す作用があるから」

油断なく立ちあがったユーリは、毛糸玉を投げた女性を睨む。

「『魔封じの棘』は図書館に害を為した魔導師にしか使っちゃいけないって、司書見習いの時に習ったよね？エイリーさん」

「使えるものを使ってなにが悪いの？ それに、その魔導師は十分に図書館を害しているじゃない」

「むしろ、図書館を害するような事をしたの。そっちの魔導師だと思っただけど！？」

思わず声が荒立つ。

魔導書達の言い分が正しいのならば、アイギス魔導師は副館長とエイリーを抱き込んでここの修繕室で『始まりの叡智』を壊したのだ。

「一般図書階に魔導書のページをばら撒いたのはエイリーさん、あなたなの？」

「そっだと言ったら、どうなの？」

心底煩わしいとも言つ様に、エイリーは傲然と言い放つ。

「エイリー！！」

あまりにも無責任な言葉に、ユーリの目が吊りあがる。

「あんたもここで働く司書のはず！！司書なら、魔導書がどれだけ危険か知っているでしょう！！」

ここで働く司書はまず第一に魔導書の危険性を学ぶ。たった一枚の魔導書のページが起こしたあの騒動。

あれが一般図書階で起こったら、利用者たちにどんな被害が出るのか考えなかったのだろうか？

ユーリが遭遇した『始まりの叡智』の暴走が、もし一般図書階で起こっていたら、どうなっていたか？

司書ならば、魔導書の分解もばら撒きも、禁じてしかるべき事だ。それなのに、

「別に司書として働きたくなかなかったのよ」
さも煩わしそうに、エイリーは髪をかき上げる。

「死人が出てたかもしれないのに、そんな事を言うわけ!？」

「無駄だ、ユーリ」

詰め寄ろうと足を踏み出したユーリをアヴィリスが止める。

「馬鹿に何を言っても、効きはしない」

「何ですって!？」

キツと目を吊り上げたエイリーが『魔封じの棘』を投げる。それをアヴィリスはユーリを抱えて避ける。

エイリー達が立っている、バックヤードに繋がる扉ではなく、魔導階に繋がるほうの扉に向かってアヴィリスは走った。

その後をエイリーとアイギスが追う。

しかし、『軍属』だったアヴィリスの足は速い。

あと数メートルで扉に辿り着く。

その、一瞬。

扉が細く開いた。

……ぼーん

小さな毛糸玉が、アヴィリスの足下で跳ねる。

『魔封じの棘』だとユーリが気づいた時には、その小さな毛糸玉は花のように開いていた。

毛糸玉から出た棘がアヴィリスの体を拘束する。

「うあつー!!」

一瞬にして、魔力が吸い取られ、足が崩れた。
絨毯の上に力なく倒れ伏す。

「ぐっ!!」

詠唱を封じるためだろう、アヴィリスの喉元に棘は絡みついた。
息苦しさにもがくと、さらに棘はきつく巻きつく。

「アヴィリスさん!!」

拘束されたアヴィリスにユーリは駆け寄る。

「動いちゃダメ!! 魔力を抑え込んで!!」

棘に拘束されたアヴィリスの側で跪くユーリに影が落ちる。

癖の強い金髪を肩先で切りそろえ、洒脱で甘いマスクと夢見るようにとろりとした水色の瞳をもつ、背の高い男が、扉の前に佇んでいる。

「宮廷魔導師？」

ユーリが彼の纏う制服を見て、訝しげに言う。

一方、彼はユーリに興味なぞないのか、悠然とした足取りで近づくと、
「ルキアルレスっ」

「この人が！？」

アヴィリスが息も絶え絶えに叫んだ声に、ユーリは驚愕する。

「いい様だな。アヴィリス」

ルキアルレスは酷薄に言い捨て、アイギスは優越感に満ちた顔でにやにや笑いながらアヴィリスを見下ろす。

「ルキアルレス様！！」

エイリーが歓喜したようにルキアルレスに駆け寄り、腕をからませる。

「あなた達、全員グルだったのね」

唸るようにユーリは彼らを睨みつける。

すると、ルキアルレスはついつと眉を上げてユーリを指差す。

「この小娘がアヴィリスに協力した司書か」

「はい。図書館に詳しいだけの、何も持たない娘ですわ」

媚びるようなエイリーの声に、ユーリは眉を吊り上げる。

（悪かったわね！！）

不機嫌な顔になったユーリをルキアルレスは特に興味もなさげに見下ろす。

「おい。司書の娘、その男を渡せ」

アイギスがナイフを片手にユーリに近づく。

「渡さなきゃ、殺すって?」

「殺しはしない。しかし、この事を他言されても困るからな。この事は忘れてもらう」

平然と言い捨てられたルキアルレスの言葉に、ユーリの顔がこわばる。

忘却魔導は精神の崩壊につながるほど危険な魔導だ。

宮廷魔導師とはいえ、よく知りもしない魔導師にかけられて無事でいられる保証はない。

それに、

「あんた達のせいで、あたしがどれだけ大変な思いしたと思ってるの?」

すつくとユーリは二人の魔導師と一人の司書の前に立つ。

「あたしが大好きなこの図書館をむちゃくちゃにするような危ないことした、あんた達なんか大っ嫌い!!」

魔導師二人は駄々を捏ねる子供を見下ろすように溜息をつき、ユーリは馬鹿にするように噴出した。

「では、どうする?司書のお譲ちゃん」

小馬鹿にするようなアイギスの言葉に、ユーリはにっと笑う。

「王立学院図書館司書、舐めてたら痛い目にあうよ?」

ユーリの手の中には『始まりの叡智』があった。

22P 間の中、集う(後書き)

1 エートルは 1 m です。

記号だと 1 E。

長い事投稿せずにはいません。

23P 落とされた火蓋。

「そんな魔導書で何が出来る？」

アイギスがあからさまに馬鹿にしたようにナイフを揺らす。

「司書の癖に、ここじゃ魔導が使えない事も忘れたの？」

エイリーの馬鹿にする声に、ユーリはにやりと笑う。

「魔導師の魔導は。ね」

ユーリの手の中には王立学院図書館支給の懐中時計がある。

「この魔導書達は“紋”を押されると、確かに魔力が制限されてしまっただけど……」

懐中時計の蓋を開き、一枚の丸い紙を取り出す。

丸い紙には王立学院図書館の“紋”である、翼をもつ叡智の女神が描かれていた。

その紙をユーリは『始まりの叡智』に貼り付ける。

『始まりの叡智』が一瞬、抵抗するように震えて光り、すぐに静かになる。

「王立学院図書館司書。ユーリ・トレス・マルグリットが名の下、魔導書による魔導を使用する。其の銘『始まりの叡智』。彼の魔導書に記された魔導を、魔導階バックヤード『フクロウ梟の部屋』でのみ顕現させる」

「何？」

アイギスとルキアルレスの表情が一瞬強張る。

「『始まりの叡智』……とりあえず、アヴィリスさんを助けるくらの時間を稼いで……」

ユーリが『始まりの叡智』を魔導師たちに向けて投げる。

『始まりの叡智』はその声を受けて光り輝く。

椅子や机、暖炉や絨毯に施された梟の意匠が動き出し、三人に襲いかかる。

「なっ!？」

エイリーが悲鳴を上げ、魔導師二人は襲い来る梟にナイフや椅子を振りかざして応戦する。

その姿を見たユーリはアヴィリスの側に跪く。

「アヴィリスさん。すぐ助けるから、大人しくしててね」

体中に棘を捲きつけたアヴィリスは、同意するように琥珀色の瞳をぱちりと一度閉じた。

ユーリは彼に巻きつく棘に司書のネームプレートのピンを突き刺す。

「王立学院図書館司書、ユーリ・トレス・マルグリットの名の下、アヴィリス・ツヴァイ＝ネルーロウ・スフォルツィアを拘束する『魔封じの棘』の解除を行使する」

その声を受けて棘はするするとアヴィリスの体から引いて行く。

「っ、はあ……!」

自由になったアヴィリスは頭を振って立ち上がる。

「ああ、駄目だよ。魔力は随分吸い取られてるんだから……!」

いきなり立ち上がり、ふらりとよろめいたアヴィリスを支えながら、ユーリは言う。

「俺に加担する気はなかったんじゃないのか？」

口角を上げて苦笑したアヴィリスにユーリはムツと鼻と戦う三人を睨みつける。

「あたしだって、怒る時は怒るんですよ。王立学院図書館を何だと思ってるんですか」

「あれはどうなっているんだ？」

アヴィリスの視線の先には、宙に浮き、丸い紙を貼られて光り輝く『始まりの叡智』がある。

「一時的に『始まりの叡智』をこの王立学院図書館所有の魔導書にしました。魔導書に記す“紋”は魔導書の魔力を封じるけど、逆にいえば魔導書の魔力を解放する事も出来るんです」

もちろん、ここまで魔力を引きずり出し、魔導を顕現できるのは『一級危険魔導書』クラス以上の魔導書に限定される。しかし、

「でも、これは三分くらいしか効果がないんです。そろそろ、時間的に『始まりの叡智』を回収しないとまずい気が……」

「先にそれを言え!!」

アヴィリスが慌てて『始まりの叡智』に駆け寄ると同時に、『始まりの叡智』に貼られた“紋”が灰になり、『始まりの叡智』を覆う光が急速にしぼんでいく。

それに応じて鼻が煙のようにふっと消える。

絨毯に転げ落ちる前に、アヴィリスは『始まりの叡智』を受け止め

た。
アヴィリスとユーリの前に二人の宮廷魔導師と一人の司書が立ちは
だかる。

「私達と、戦って勝てると思っっているのか。アヴィリス？」

ルキアルレスが腰に差していた長剣を構え、アイギスはナイフを持
ち直す。エイリーは二人の魔導師の後ろに隠れた。

「さて、これからどうする気だ？ユーリ・トレス・マルグリット？
おどけるようなアヴィリスの声にユーリは半眼で睨む。

「あの二人にひと泡吹かせたいのはあんたでしょう？」
「まあな」

にいつと口角を上げたアヴィリスの手元にナイフが光る。
それを見たユーリは慌てて声を上げた。

「言つとくけど、図書館内で乱闘はやめてよね！！」

「あいつらを二人同時に相手をするのは分が悪い。魔導は使えな

いとはいえ、二人がかりではこの得物は心許無い」

「じゃあ、あの二人をバラバラにしたらいいの？」

こてんと首を傾げたユーリにアヴィリスは頷く。

「あたしに任せてくれる？アヴィリスさん」

「頼もしいな、王立学院図書館司書」

「合図したら、あたしと一緒に走って」

「何をぐずぐず喋っている？」

ルキアルレスが襲いかかって来た。

大きく振り下ろされたルキアルレスの剣を、アヴィリスは小さなナ

イフで受ける。

邪魔にならないところにさっと身を寄せたユーリはアイギス魔導師と目が合う。

アイギスはふつと歪に笑うと、ナイフを口元に当てて何かを唱え始めた。

ざわり、と背筋が泡立つ。

アイギスの詠唱と共にナイフが薄赤い光に包まれ始める。

「え？何で、ここで、そんな、魔導を使う事なんか……」

明らかな魔導の気配にユーリは震える。

同じく魔導の気配に気づいたアヴィリスは、ハッとユーリとアイギスに視線を向けた。

「ユーリ！！“紋章”を前に出せ！！」

ルキアルレスの剣を紙一重で避けたアヴィリスが叫ぶ。

「え？こう？」

胸の前に“紋章”を出したユーリに向かって、ナイフが降りかかる。
「ひっ！！」

……カッ

思わず目を閉じたユーリの前で、ナイフが高い音と共に砕ける。

淡く光る“紋章”を握りしめて、ユーリはアイギスを見た。

アイギスは、わずかに息を荒くしながら、新しいナイフを構え、こちらに歩み寄ってくる。

「何で、魔導を……魔導師の魔導の行使の許可は、副館長以上の……」

…」

呟いたユーリは嫌そうに顔を顰めた。

「そーいや、あんた達側に附いてたんだっけ副館長……」

「そう言う事だ」

ナイフを振りかざしてくるアイギスにユーリは『魔封じの棘』を投げる。

「くっ!!」

『魔封じの棘』が開き、アイギスに襲いかかる。

その隙を縫って、ユーリは暖炉に駆け寄った。

暖炉に登り、壁に取り付けられた梟の形のランプに触れる。

「何をしている!!」

「来ないで!!」

駆け寄って来たアイギスにユーリは角灯を投げ付けた。

「うわっ!?!」

飛びかかって来た火の粉をアイギスは慌てて払う。

ユーリはその隙に懐中時計のネジを素早く回して押し、時計のガラス部分を外して長針を取り出す。

ガラスで出来た梟の首元の石に長針を差し込んで回す。

ぼうつと梟に緑色の炎が灯る。

「待て!!」

「行って!! 番人!!」

アイギスの手がユーリに向かうより先に、炎を纏った梟が空をかける。

たまたま、というより、必然的に梟の進行方向の前に居たアイギスがとっさに手で顔を覆ってユーリから離れる。

（まただ、魔導使用許可を受けているはずなのに、何で魔導を使わないの？）

暖炉から飛び下りたユーリは番人の梟を追いかけながら、アイギスを振り返る。

目を覆っていたアイギスは、気を取り直したのかユーリを追いかけて来た。

一般図書階でも、ここでも、アイギスもルキアルレスもともに魔導を使っていない。

特にルキアルレスはさっきからアヴィリスと剣術で戦っている。

（魔導使用許可が、完全じゃない？）

それならば、一般図書階でユーリを見つけておきながら魔導でユーリを捕まえようとしなかった事や副館長に化けていた変幻魔導が途中で解けてしまった事も説明できる。

（多分、魔導を使える回数がほとんど無いが、アイギスかルキアルレスのどちらかしか魔導の使用許可が出来なかった？）

ユーリは走りながら、アヴィリスを見た。

小さなナイフ片手にルキアルレスの長剣をかわしているが、防戦一方である事は一介の学生であるユーリでもわかった。

「アヴィリスさん！！」

ユーリの目の前で梟は絨毯の中心に向かって飛び込んだ。

絨毯の中心に丸い炎の円が出来る。

「炎に飛び込んで！！」

「わかった！！」

アヴィリスはルキアルレスの剣を振り払い、すんでのところで避けて炎に向かって走る。

「行かせませんわ！！」

炎の前にエイリーが立ちはだかり、『魔封じの棘』を投げ付けた。狙いは、アヴィリス。

その毛糸玉の前にユーリが立ちはだかる。

毛糸玉は、こんつとユーリに当たって落ちた。

「お生憎様！！魔導師以外にこの棘は発動しない！！」

足下に転がった毛糸玉を拾い、ユーリは近くに転がっていたバスケットからティーポットを引っ張り出して投げ付けた。

「きゃあー！！」

驚いて蹲ったエイリーの横をアヴィリスとユーリが走り抜ける。

炎の中に、アヴィリスとユーリが飛び込む。

そこはさまざまな形、大きさの鳥籠が数え切れないほどたくさんぶら下がった部屋だった。

しかし、鳥籠の中には鳥は一匹も囚われていない。

鳥の代わりに籠の中に囚われているのは、炎。

無数の炎が囚われている部屋は広く、炎の光が届かない場所は暗い闇が視界を阻み、鳥籠は闇の中に浮いているように見える。

その鳥籠の中、一番大きく、一般的な釣鐘型の籠の中心にぽつと緑の炎が灯る。

その炎の中から、藍色の髪的美丈夫が飛び出してくる。

続いて、濃い栗色の髪の小柄な少女が籠の床に降り立つ。

「ここは？」

「図書館の隠し部屋のひとつ……って、悠長に説明してる暇ないから！！早く！！こっち来て！！道を閉じないとあの人たちが来ちゃうー！！」

ユーリは鳥籠の網を登り始めた。

続こうとしたアヴィリスは魔導の気配を感じて振り返る。

「アイギス!!」

飛来してきたナイフをアヴィリスは弾き落とす。

弾き落とされたナイフは床に叩きつけられた途端、灰になって消える。

「魔導を付与した武器か。しかし、何故使える？」

魔導師が使う魔導は図書館の魔導封じに引つかかるはずだ。

「副館長がこの人たちの魔導の使用を許可したんだと思う!!」

「何!? そんなこと出来るのか!？」

アヴィリスはアイギスが放つナイフを叩き落としながら、ユーリを見上げる。

ユーリは鳥籠に登り、小さな装飾をいじっている。

そのユーリめがけて飛来したナイフを、アヴィリスは手持ちの“お守り”を投げ付けて防ぐ。

「それにしても、しょぼいな」

中級の“お守り”で防いだナイフを見下ろして、アヴィリスはアイギスを睨む。

そのアイギスの背中で炎がゆらりと揺らぐ。

「ユーリ!!」

「わかってる!!」

アヴィリスの声に応えたユーリが装飾を引っ張って、開ける。

その途端、炎が梟の形に姿を変える。

小さな出口を目指して梟は羽ばたき、闇の中に吸い込まれていく。

それを見送ったユーリは装飾を元に戻し、アヴィリスの隣に飛び降りる。

「多分、魔導使用許可が不完全なんだと思う。それに、魔導使用許可があっても、図書館じゃ攻撃に關与する魔導は使えない」

「なるほど。それで魔導付与した武器を使っているのか」

おそらく、攻撃系魔導を使えないと知った後にした対処なのだろう。魔導が即席でしょぼいのも頷ける。

アヴィリスが納得していると、ユーリの胸元で甲高い音が鳴り響いた。

「何だ？」

訝しげに眉を上げたアヴィリスは、ユーリを見下ろす。

ユーリはさっきまでの気丈な姿と打って違って、顔を白く染めて強張らせている。

胸元の裏ポケットから懐中時計を出したユーリは、蓋に浮かび上がった紋様を見て泣きそうになる。

いつもはつるりとしている表面の銀に赤黒い炎の紋章があざのように浮かんでいた。

「火事だ」

ユーリはぼつりとつぶやく。

「一般図書階で、本が燃えてる！！」

24P 赤に染まる

こんな屈辱は初めてだ。

ルキアルレスは唇を噛み締めてうめく。

アイギスがアヴィリスの研究室から魔導書を盗み出したのを見つけたのは、偶然だった。

そして、それを見て話しかけたのは気まぐれだった。

アイギスは魔導書を奪い、アヴィリスをおびき寄せて懲らしめる事が目的だったらしい。

（『身分もない、ただどこぞの魔導師に育てられただけの『墮落した蛇』がネルーロウ様の弟子である事だけでも忌々しいのに、宮廷魔導師になど成り上りやがった！！』）

その怒りには自分も素直に共感できた。

神聖で高貴なものである魔導は貴族のみが理解していればいい。

その崇高なる魔導を戦場で行使して魔導を穢しただけでなく、魔導師が憧れる宮廷魔導師の座を辱めるなど言語道断、許せるものではなかった。

アヴィリスが大事にしている魔導書は、あいつにもつたいないほどすばらしいものだった。

しかし、この魔導書をただ手にしてはすぐにアヴィリスに気づかれる。

だから、魔導書をバラバラにし、修復できないほど魔力が弱まったところで改めて回収し直し、自分達所有の魔導書に作り替えることにした。

けれど、魔導書をバラバラにするのに、王都の研究室を使うとすぐに足がつく。

そこで目をつけたのは、王立学院図書館。

難しい魔導書の修復を請け負うことの多いあの図書館ならば、魔導書をバラバラにすることもできるだろうし、魔導書を隠す事もお手の物だろう。

王立学院図書館の司書である没落貴族の娘と懇意になり、その伝手で副館長を抱き込んで今回の件を実行した。

変幻魔導が得意なアイギスを密偵として使いながら、王立学院図書館の仕組みを調べ、アヴィリスの様子も監視させ、準備は万全であったはずだ。
それなのに。

(何故、こんな事態になっている!!)

ルキアルレスは死んだように眠る副館長を蹴飛ばし、後ろで縮こまる没落貴族の娘を睨みつけた。

王立学院図書館にはアヴィリスを倒すために便利な仕掛けが山のようであった。

魔導書のページを探させて、どこぞに迷い込ませて殺しても、誰も不審には思わないし、何より王立学院図書館では魔導が使えない。だから、ルキアルレス達は魔導書のページを探すアヴィリスを待ち伏せして殺さばいいだけだった。

しかし、それを覆したのは、一人の司書の存在。

「あの小娘が!!」

古い木の皮のような色の髪の毛、セフィールド学院の生徒であるらしい小さな娘が全てを滅茶苦茶にした。

魔導書のページをアヴィリスに代わって探し、自分達のチャンスを全て無駄にした。

魔導も使えない、ただこの図書館で働いているだけの小娘にコケに

されて、腹が立たないわけがない。

「ルキアルレス様」

踵を返したルキアルレスの背中にか細い声がかかる。

「あの、これからどうなさるのですか？」

どうするのか、だと？

ルキアルレスは怒りに染まった目でエイリーを睨む。

そもそも、自分がここにいるのはこの二人が役に立たなかったせいだ。

炎の中に消えたアヴィリスとアイギスを追うためにルキアルレスも炎の中に飛び込む寸前で、炎の中から梟が飛び立ち、暖炉の上のランプに戻ってしまった。

小娘と一緒にまんまと自分から逃げおおせたアヴィリスを追うために、ルキアルレスもエイリーに炎を出現させようとした。

だが、この娘はあろうことが炎を出現させる事が出来なかったのだ。それならば、と副館長を使おうとしたが、奴はがくがく震えて『知らない、知らない。私は悪くない』とわけのわからない事を呟くだけで全く使えなかった。

この場にギズーノン司書のように優秀な司書がいれば、この状況に呆れていただろうが、幸いなことに彼らはいない。

「ふん。この図書館の中に隠れているのならば、誘き出せばいいだけだ。アヴィリスは魔導を使えないが、こちらは魔導が使えるようになったのだからな」

副館長から奪った、王立学院図書館副館長を示す徽章をルキアルレスは見下ろす。

アイギスが持っていた、魔導使用許可証に記されていた印と同じ形

をしていたので、もしやと思い、身につけて魔導を使ってみた。簡単な眠りを誘う魔導だったが、それを受けた副館長はいまぐっすりと眠っている。

ルキアルレスは悠然と足を操り、魔導階を後にする。

向かった先は、一般図書階の資料階。

アイギスとエイリーが迷子になった本の迷宮。

その乱立し、森のような本棚とそこに納められた本を見つめて、ルキアルレスは嗤った。

「さあ、来るがいい。アヴィリス。格の違いを教えてやる」

ルキアルレスの手に赤黒い炎が燃え上がった。

「火事、だと？」

ユーリの泣きそうな顔を見たアヴィリスはすつと目を眇めた。

「ルキアルレスが、火をつけたか」

下種が、とアヴィリスは吐き捨てる。

「悪いけど、アイギス魔導師に構ってらんない。あたしは一般図書階に行かないとー!!」

「俺も行く。魔導の使用許可をあいつまで得ていたらいろいろ面倒だ」

「あの人、強いのか？」

「一応宮廷魔導師だからな。実力はある」

実力以上に無駄に矜持プライドが高く、選民意識が強く、自分の事を優良なる人種だと信じて疑わない貴族らしい思考が奴の研究を妨げている

ところもあるが、おおむね優秀だ。
苦笑したアヴィリスを見上げたユーリはぐつと手を握りしめる。

「それでも、あたしは行かないと!! 一般図書階の本だって魔導階や専門階に劣らないくらい大事なんだよ!!」

ルキアルレスがどれほど強いのか、知らない。
魔導が使えれば、ただの学生のユーリに勝ち目はないだろう。

しかし、ここの図書館の図書をいま守れるのはユーリしかない。

「危ないぞ?」

「そつちも危ないよ!!」

ちらつとこちらを見たアヴィリスの正面から、アイギスがナイフを振りかざして迫ってくる。

……ガキインツ!!

「ナイフが品切れか?」

風を纏って打ち込んできたアイギスをアヴィリスがナイフと護符で応戦する。

「うるさい!!」

凶星をさされたのか、アイギスはがむしゃらに打ち込んでくる。

アイギスのナイフを避け、バランスを崩した彼の足を払って距離を置いたアヴィリスがユーリを見た。

ユーリは炎を逃がした時と同じように鳥籠の網を登っていた。

「ユーリ!!」

何かし始めたユーリに向かってアイギスが襲いかかろうと風を纏う。
「っ!!」

それに気付いたアヴィリスは指先を切り、力を失い、ただの紙切れに戻った護符に新たに魔導陣を描く。

「『其は始まりにして終わりを司り、古より始まりし万物に終焉を約束する。さすれば、其の理の下、我が名と力において、この災いに永遠の終焉を齎さん!!!』」

唱えたのは中級の防護魔導。普段ではしない詠唱と中級魔導ではあり得ないほど膨大な魔力を吹き込んでアイギスに投げる。

とっさに作った魔導は何の因果か『始まりの叡智』に記された魔導だった。

アヴィリスは無意識だったが、おそらく、魔導師としての直感がこの魔導を使わせたのだろう。

斯くして、アヴィリスの直感は魔導という奇跡を呼ぶ。

「なっ!?!」

ユーリに向かって飛翔していたアイギスの体を纏う風が、護符力で?き消える。

「がっ!はっ!!!」

浮力を失ったアイギスは、重力に従って地面に叩きつけられた。

「アヴィリスさん!!!避けて!!!」

ユーリが小さな毛糸玉を握りしめているのを見たアヴィリスは慌てて隅に身を寄せる。

『魔封じの棘』はアイギスの側で一度跳ね、パカリと開いた。

拘束されたアイギスをアヴィリスは見下ろす。

「無様だな。あれほど俺を殺すチャンスがあったのに、お前の計画の結果がこれか」

「くそっ!!!」

憎悪の籠った瞳をアヴィリスは静かに見つめ返す。

「何故、正々堂々と俺に勝負を仕掛けなかった？ あんな小さな娘まで巻き込んでこんな騒ぎを引き起こす事がお前の狙いだったのか？」

「うるさい！！」

叫んだアイギスの喉元に棘が絡まる。それをアヴィリスがただ見下ろした。

「お前が作った魔導はここまでのものだったのか？ アイギス・フュイン＝ネルーロウ・ファーティウス」

アヴィリスがぼつりと零した声は彼は無意識だろうがとても寂しげだった。

「アヴィリスさん！！早く！！」
声に気付いて見上げると、ユーリは鳥籠の外で網にしがみついている。

「そこでしばらく大人しくしている。気が向いたら、助けに来てやる」

言い捨てて、アヴィリスはユーリより簡単に網を登り、彼女が開けたらしい穴から金網の外に出る。

「早いね」

金網を背中に立つユーリの隣に立ったアヴィリスに彼女は感心したように言う。

「元『軍属』だからな」

「じゃあ、ついて来て」

ユーリは慣れた様子で一番近くにあった鳥籠に飛び移り、また違う鳥籠に飛び移る。

彼女は身軽に闇に浮く鳥籠の間を行き来する。

アヴィリスは思わず、自分の乗っている籠の下を覗き見る。

底の見えない闇に一瞬足が震えた。

落ちればおそらく命は無いだろう。

しかし、自分より年下の少女が遠くから自分を呼んでいる。

「根性据わっているな。っと!！」

臆した事を誤魔化すようにアヴィリスはユーリの後を追う。

本棚が深紅に染まっている。

轟轟と深紅の炎が絨毯を舐め、黒い煙を吐き出す。

ぱちぱちと木が燃える音と共に、ゴトンと黒く燃えた木の欠片が落ちた。

真昼のように照らされた部屋で、炎にあぶられた本棚の黒い影が不気味な化け物のように揺らぐ。

（なんて事を!！）

資料階の天井から本棚の上に降り立ったユーリは絶句した。

本棚の迷路の一角、閲覧用の読書机や休息のために使うソファが並んでいる場所から炎があがっている。

（止めなきゃ!！）

いくら防火の魔導が本棚にかけられているとはいえ、炎が燃え広がれば、本棚も棚に納められた本もただでは済まない。

ユーリは炎を目指して本棚の上を駆け、飛び移り、また駆ける。もうもうと煙が立ち上がり、炎の熱気を感じるほど近くに駆け寄ったユーリは、息を整える。

深く吸い込んだ空気に煙が混じっていて咳き込みそうになりながら、歌った。

図書館を脅かす炎を煙で痛む目で睨みつけながら、強く高らかに。

「くそっ！！」

ルキアルレスは忌々しげに本棚を睨みつけた。

この本棚をすべて焼き尽くすつもりで放った炎は、本棚を燃やす事は出来なかった。

代わりに燃えたのは絨毯と側にあつた椅子や机のみ。

怒りをあらわにする彼の側で、エイリーがおずおずと本棚から抜いた本を火の中に入れていく。

本棚の中にある本は燃やせないと気づいたルキアルレスに命じられたためである。

エイリーは重くい本を火の中に入れながら、溜息を吐く。

どうしてこんなことになったのだろうか？

たくさん高価な香水や化粧品を送って来てくれた時は甘い言葉を囁いてくれた、指輪より重い物は持たせないと指先に口づけてくれたルキアルレス様が自分を蔑みの目で見下ろし、重い凶鑑を運んで燃やすよう命じた。

本当は嫌だけど、こんな事したくないけれど、ここでルキアルレス様に嫌われてしまうと同僚の娘達から馬鹿にされてしまうし、自分を見下して弄んだロージーに復讐出来なくなってしまう。

(絶対、あの二人には消えてもらわないと！！)

エイリーは大きな凶鑑を炎の中に投げ入れようと両手で持ち上げる。その瞬間、空から聞いた事のない歌が聞こえた。聞いた事のない言葉、旋律だったが、不思議とそれは『歌』だわかった。

「どこから……?」

顔を上げたルキアルレスはハッと燃え盛る炎を振り返る。

さつきまで熱いほどの熱気を感じていたはずなのに、いまは冬の陽光ほどの温かさしか感じない。

眩しいほどの深紅も弱まり、炎はゆらりゆらりと揺らぎながら、徐々に勢いを無くしていた。

「馬鹿な!!」

愕然として叫ぶルキアルレスの目の前で炎は完全に消え去った。

ぐすぐすと炭になった椅子や机から聞こえる音と焦げ臭い臭いが鼻をさす。

窓から差し込む月の微かな光を受けた闇が青く染まる。

……タンッ

「そこっ!!」

ルキアルレスが炎の玉を投げる。

しかし、その炎は何かの壁に阻まれて弾かれ、消えた。

「アヴィリス!!」

炎が弾かれる一瞬、炎の光がルキアルレスの仇敵の美貌を照らした。

「どこにいる！！アヴィリス！！」

ルキアルレスの怒声を受け、ぼうつと闇の中に光が灯る。

青白い光が、二つの人影を浮かび上げさせる。

一方は品のある鼻梁に伶俐な目元が印象的な美貌の魔導師。

そして、青白い光を掌に持つのは小柄なセフィールド学院の制服を纏う少女。

彼らは一様に怒気を露わにした、冷たい顔でルキアルレス達を睨んでいた。

「あんた達、もう許さない」

ユーリ・トレス・マルグリットが静かに宣言した。

25P 罪には罰を

青白い光を放つ懐中時計と窓から差し込む月の光が資料階の惨状を照らす。

焼け焦げた天井、炭になった机や椅子、絨毯が燃え剥き出しになった床も黒く煤けている。

そして何より、ユーリの胸を刺したのは所々に散らばる灰と黒く染まった本の表紙の残骸。

「なんて事を！！ここにある図鑑や本がどれだけの価値を持っているのか知っていてこんな事をやったの!？」

「魔導書でもない本にどんな価値があるんだ？ 焼けたなら買えばいいだけだろう？」

怒りに頬を染めるユーリを小馬鹿にするようにルキアルレスが笑う。

「勝手な事を言わないで！！」

何もかも、お金で買えるわけではない。

特にここにあるのは、

「ここにあるのは、たくさんの人々から集められた大事な知識が詰まった本なの！！ ここにある本の一冊一冊がユーリに住む人たち……ううん。このザラート王国の財産なのに！！」

「こんな黴臭い図鑑がか？」

「先人の知識を読み解こうとしない魔導師は、魔導師と名乗るに相応しくない」

アヴィリスが淡々と言い放った言葉にルキアルレスが鼻を鳴らす。

「崇高なる魔導を穢す『墮落した蛇』が魔導師のなんたるかを私に説くとは、滑稽すぎて涙が出る」
ぼつとルキアルレスの掌で炎が湧き上がる。

「少なくとも、あんたよりアヴィリスさんのほうが立派な魔導師だよ」

炎を恐れもせずにユーリはルキアルレスを睨む。

その目が、ふとルキアルレスの背に隠れているエイリーを見つける。

「この本がどれだけ大事な物かわかっていなかったんだね。エイリー」

本を本棚から運び出して燃やすエイリーの姿をユーリはしっかりと見ていた。

「その魔導師もるとも、ここに喧嘩売った事を死ぬほど後悔しなさい!!!」

「それは、こちらのセリフだ!!!私を謀った事、後悔するがいい!!!」

言うが早いか、ルキアルレスが炎を投げる。

「させるか!!!」

ルキアルレスが炎を放った瞬間、アヴィリスは魔力を炎に向けて放つ。

炎がアヴィリスの放った魔力に当たり、威力を失って消える。

「そのまま、三分時間稼いで!!!」

「わかった!!!」

アヴィリスがルキアルレスに向かうのと同時にユーリは歌う。

「【あ、あ、風よ、風よ。」

我が声をどうか届けて。

我らの嘆きをどうか聞いて。

ああ、風よ、風よ。

この声を聞いたならば、

この声を知ったならば、

我らの敵を退ける嵐になれ！！

ああ、嵐よ、嵐よ。

この声をどうか聞き届けて！！】」

（この歌は……）

アヴィリスはルキアルレスの炎を蹴散らしながら、この資料階に入
って来た時の事を思い出す。

あの時も、ユーリは歌っていた。

「あの娘、何を歌っている？」

ルキアルレスが怪訝な顔で両手に炎を纏わせ、放った。

アヴィリスは放たれた炎を魔力で防ぐ。

深紅に染まった視界の中、ルキアルレスが炎を操る姿が見えた。

（しまっ！！）

しかし、防戦一方のアヴィリスの防御の隙をついてルキアルレスが
炎をユーリに向かって投げる。

「ユーリ！！」

アヴィリスが身を守る術を持たない、一介の司書を振り返った。ぼんやりと青白い光を放つ懐中時計を持ったまま、ユーリの姿が炎に包まれる。

「【汝、罪ある者を指し示し、我らの地を穢した罪人を罰するがために、其の道を開く！！】」

聞いた事のない言葉が、ユーリの声で紡がれる。

その声が止むか、止まないか。

ルキアルレスの炎がユーリの目の前で消えた。

「え？」

アヴィリスが目点を点にして立ち止る。

炎に包まれたはずの少女は胸の前に本を開いて掲げ持っていた。

「何を！！」

ルキアルレスが炎を放つ。

しかし、その炎は本の中に吸い込まれて消えた。

炎を本が飲み込んだ事を確認すると、ユーリは本をルキアルレス達に向かって投げた。

本は空中で蝶の様に開き、吸い込まれるようにルキアルレス達のほうへ向かう。

「なっ！？」

目を見開き、本を払いのけようと伸ばしたルキアルレスの腕が本の中に消え、吸い込まれる。

「ひいつ！！」

ルキアルレスが飲み込まれた瞬間を見たエイリーが慌てて逃げ出すとする。

だが、その本がエイリーを飲み込むほうが早かった。

……ぱたん

本が静かに閉じる。

燃えてしまった机や絨毯が作った炭や灰の中に落ちそうになった本をユーリは慌てて掬いあげた。

「よし!!」

ユーリはルキアルレスとエイリーを吸い込んだ本を持ち、ほっと息を吐いた。

アヴィリスはさっきまでユーリが持っていなかった本を訝しげに見ながら、恐る恐る近づく。

「何をした？」

「ここでこれ以上暴れられると迷惑なので、別の場所に行ってもらいました」

「……どこに飛ばしたんだ？」

あっけらかんに言ったユーリにアヴィリスは色々ツツコミたいのを我慢して問う。

「多分、咎の隠し部屋に行っただと思えます」

「咎」

禍々しいその言葉を繰り返したアヴィリスにユーリは肩をすくめる。「と、いつでも実際はいろんな罠があるだけのただっ広い草原なんだけどね」

「いや、待て。何故図書館の中に草原がある？」

「さあ〜？」

「おい……」

くい〜と首を傾げたユーリにアヴィリスは呆れたように溜息を吐く。「よく知らないけど……。あそこはもともと、この図書館を守る魔導の実験場として作られた部屋だって事は聞いた事がある」

もちろん、『禁制魔導書』達からの情報である。

「じゃあ、その草原なら魔導が使えるのか？」

「うん……実際使ってる魔導師は見たことないんだけど……」

「なら、話は早い。俺もそこへ行かせろ」

「ええっ!?」

批難の声を上げたユーリにアヴィリスは眉を吊り上げる。

「あいつを叩きのめさん限り、俺の気がすまん」

「……………いま下手にあの人たちと同じ空間にいないほうがいいと思う……………」

たつぷり十数秒間沈黙したユーリはアヴィリスから視線を逸らしながら言う。

「何故？」

「それは……………」

先ほどの歌を聞きつけた『禁制魔導書』階の魔導書達が、ルキアルレス達が落ちた部屋で暴れているかもしれないからだ。

『禁制魔導書』階の魔導書達は『禁制魔導書』階から出る事は出来ないが、図書館内で起きた魔導的な事件を察知できるのと同じで、何らかの媒介さえあれば一定の魔導を行使する事が出来る。

そして、ユーリは先ほどルキアルレス達を閉じ込めるために『禁制魔導書』階の魔導書達の力を求めた。

あの歌を歌った結果、『禁制魔導書』階の魔導書達は魔導階にある『囿の魔導書』をユーリに渡してくれた。それが、いまユーリが手に持っている本だ。

しかし、あの魔導書達が大人しく普通に『囀の魔導書』を渡すわけがない。
おそらく、ユーリに渡す前に何らかの細工を施したと想像するのが容易い。

だが、そんな事をアヴィリスに言うわけにもいかない。
ユーリは溜息をひとつ吐くと、『囀の魔導書』を開く。

「危ない目に遭っても、知りませんよ？」

「心しておこう」

ユーリとアヴィリスの体が本の中に吸い込まれた。

膝丈の緑が地面一面を覆い尽くし、空には澄んだ青色が広がっている。

どこかの田舎のようにのどかで静かな景色の中、

「ここは、何だ？」

ルキアルレスはぼつりと呟いた。

彼の側でエイリーは腰が抜けた様に座り込んでいる。

「あの娘、また隠し部屋の扉を開いたか……」

忌々しげにルキアルレスが呟き、顔を歪めた。

エイリーを頼る気はないのか、ルキアルレスはその場で魔導陣を描き始める。

「『其は小さき物、風に、水に、大地に、流され流れゆくモノ。故に、汝は導く……』」

魔導を少しでも齧った者なら、彼が初級の探索魔導を使っている事

に気付いただろう。

普通の場所であれば、詠唱しなくても顕現出来る魔導。

しかし、

「っ!?!」

ルキアルレスの目の前で魔導陣が消え失せる。

「何故?!?!」

ルキアルレスが驚愕に顔を引き攣らせ、エイリーは呆然と消えた魔導陣を見つめる。

そんな二人をよそに、青々とした草がさわさわとのどかに揺れて囁く。

<おい、聞こえたか?>

<ああ、見えたとも>

<知ったとも>

「何だ?」

緑の囁きに交って、どろりと闇が溶けだしたかのような声が響く。

魔導師たるルキアルレスはその声が濃厚な魔力を帯びていると気づき、掌に炎を掲げる。

<燃やしたな?>

<焼き尽くしたな?>

<魔導の炎で>

仄暗い闇を纏った声がさらにざわめく。それに応えるように、さっきまで青かった空が徐々に濁っていく。

「る、ルキアルレス様……」

エイリーがぶるぶると震えてルキアルレスに縋りつく。

魔導師でない彼女でもわかるほど、部屋に魔力が渦巻く。

< 我らの領域を >

< 我らの知識を >

< 我らの世界を >

ざわめきが強くなるほどに、緑が震え、緑の下にあったのであろう
石板や土が盛り上がる。

< 愚かな魔導師よ！！其の罪を思い知るがいい！！ >
轟音と共に雷が二人の近くに落下した。

25P罪には罰を（後書き）

長くなったので二話に分けます。

図書館の本は大事にしましょう。

26P 罪には罰を・？

「何だ、ここは……」

アヴィリスは目の前の光景に絶句する。

大きな落とし穴がぼっかりと口を開け、大きな石柱が立ち上り、三日月がそのまま刃になったかのような巨大な鎌やギロチンが地面に突き刺さっている。

空を覆う黒雲の中、紫色の雷が竜の様に泳ぎ、大小さまざまな竜巻が巻き上がっていた。

ユーリが言うとおり、元は緑色の草が生える草原だったのであろう。石柱や鎌やギロチン、落とし穴の傍らに無残な姿で横たわる緑色の植物が過去の栄華を物語っていた。

「あゝあ、だから言ったのに」

一方、ユーリはなんとなく脱力した感じで元・草原（？）、現・戦場跡（廃墟？）を見回す。

「……図書館に草原があるだけで有り得ないのに、この異常な光景見て言う事がそれか！？」

「だから、行かない方が良いつて忠告はしたじゃないですか！！」
そう言い返されると反論のしようがないが、

「こんな光景、誰が想像できる！？」

戦場跡（確定）を指差したアヴィリスが思わず声を荒げた。

しかし、ユーリは平然とした様子で着地時にスカートについた土ばかりを払う。

「そんなことより」

(そんな事!?)

魔導という『非常識』を起こす存在である魔導師が『異常』だと言う光景を、たった一言で一蹴した少女にアヴィリスは頬を引き攣らせる。

「エイリーとあのルキアルレスはどこですか？」

「あ……」

アヴィリスはハツとしたようにあたりを見回す。

雷がパラパラと降り、無残に垂れさがっているように見えた草がざわざわと怪しげに動き、三日月のような刃が不気味な音と共に身を震わせ、大きく開いた落とし穴から低い不気味な音が響く……無残な光景。

「生きてるか？」

この惨状を目の前に、敵とはいえ彼の身を案じてしまう。

「アヴィリスさん。あまりあたしから離れないでくださいね？」

厄介な事になりそうだから

「厄介な事？」

アヴィリスが数メートルほどユーリから離れた途端、彼の足下が無くなる。

「こういう事!!」

「……………わかった」

落とし穴に落ちかけたアヴィリスの腕をユーリが引っ張って支えていた。

「この状況じゃあ、あの二人探すのも難しそうですよ」

「……………一応俺はあの二人に生きていてもらわないといけないんだが

……」
「魔導書達の気が済んだら、図書館の外に放り出されると思っけど……」
思わず呟いたユーリはハッと口を覆う。
どろろという意味か問い質そうとしたアヴィリスは、大きな魔導の気配を感じて身構える。

……ドオオオオオオオンッ……ゴロゴロゴロ

世界が白く染まる光と聴覚が消えるほどの音。
アヴィリスがとっさに防御魔導を顕現させていなければ、巨大な落雷だったと気づく暇さえなかっただろう。

「魔導が使えた……」
アヴィリスが呆然と顕現した魔導の壁を見上げる。

（何故？　そういえば、あの鳥籠でも魔導は使えた）
アイギスの魔導を無効化した魔導を思い浮かべる。
あれを使った時、不思議と魔導階で副館長を吹き飛ばした時のような疲労感を感じなかった。

（ここが『魔導の実験場』だったから、使えるのか？　それとも、魔導によって使える、使えないがあるのか？）

「アヴィリスさん！！　前！！前！！」
ユーリの切羽詰まった声に、アヴィリスはハッと思考を中断させる。
「ど……」
どうしたんだ？　という言葉は喉元で？　き消えた。
ユーリが泡を食うような光景がそこには確かにあった。

落雷のせいなのか、クレーターのような大きな穴があき、穴の周りは焦土と化している。

その穴の中心あたりに、見覚えのある金髪と鳥の雛のような頭が見えた。

「ルキアルレスとエイリーだね？ あれ」

「あ、ああ」

もしや、落雷が直撃したのではないかと顔を引き攣らせるユーリを横に、アヴィリスはふと彼らの様子に違和感を覚える。

(倒れてる……にしては角度がおかしい……？ そう、例えるなら……)

穴の中心のあたりから、花の種から出て来た芽のように、彼らの頭がよつきりと顔を出している。

(……何だ？ ものすごく嫌な予感がするぞ……。 あいつらは何故穴の中にいるんだ？)

そもそも、彼らがいる(？)場所はさつきまで平らな地面(何かいろいろ突き刺さってはいたが)だったはずだ。

それが、いきなりの落雷で地面が抉れて彼らの姿が見えるようになった。

(いや、待て。…おかしいぞ。 じゃあ、逆にいえば落雷がなければ俺達はいつらに気付かなかったわけで……) 恐ろしくタイムリーな落雷。

つまり、それは……。

「エイリー！！ルキアルレス魔導師！！聞こえる！？」

「待て！！ユーリ！！ 穴に近づくな！！」

アヴィリスが慌ててユーリに忠告するが、遅かった。

「わああっ！！！」

穴から出て来たらしい木の根がユーリに絡みつく。

「くそっ!!」

咄嗟に空気の元素に基づく風の魔導を放つ。

風の魔導は木の根に当たったが、切り裂くには至らず、魔力を無駄に消費しただけで終わった。

(やっぱり、使える魔導と使えない魔導があるようだな……)

「ちょっと!! やりすぎ!! あたしだってば!! ユーリだよって!!」

息を整えているアヴィリスをよそに、ユーリは絡みつく木の根と戦う。

『禁制魔導書』達が起こしている事ならば、魔力を通じて彼らに届くはず。

くん、あ、ユーリか。すまんすまん>

ざわりと木々が揺れるような音と共にユーリは木の根から解放される。

(つとに、もう!!)

『禁制魔導書』達は、すぐ悪乗りするし、手加減がいまいち適当で、こういう所が厄介だ。

胸の中でぶつくさ文句を零していたユーリは呆然とこちらを見ているアヴィリスに気付いた。

「お前……」

「あ、あの、これは何と言うか!!」

(どーやって誤魔化そう!?)

焦ったユーリは気づかなかった。

ユーリに従った木の根に驚いていたアヴィリスも気づかなかった。

……バシッ

「っ、きゃあっ！！」

ユーリの背中で空気が爆ぜるような音と火花が散る。

「ユーリ！！！」

アヴィリスの目の前でユーリの体が穴の中に吸い込まれるように落ちる。

「ユーリ！！！」

穴を見下ろすと、ユーリの体は地表から一メートルほど下から伸びた木の根に絡まって止まっていた。

ユーリに襲いかかっていたはずの木の根に救われるとは本末転倒だが、アヴィリスはほっと息を吐く。

（目立った外傷はない。さっきの雷系の魔導にやられて気を失っているだけだ）

「ルキアルレス！！！」

アヴィリスはユーリを襲った魔導師を睨みつける。

片手を上げ、穴の奥から這い出て来たらしいルキアルレスは忌々しげにアヴィリスを睨み上げた。

おそらく、ユーリを穴に落として捕え、アヴィリスに対する人質にするか、ここから出るための案内をさせるつもりだったのだろう。

けれど、

「一般市民に魔導で攻撃したか、この下種が！！！」

「黙れ！！私にこんな恥をかかせたその娘が悪いんだ！！！」

涙目で駄々っ子のような事を言いわめくルキアルレス。

怒鳴り返そうと息を吸ったアヴィリスは、顔を泥と涙と鼻水でぐしょぐしょにしている彼を見下ろして溜息をついた。

何だか、怒るのも馬鹿馬鹿しくなってきた。

(馬鹿に付き合っても仕方がない。ユーリを助けてここから出よう)

魔導を使って疲れたのか、ルキアルレスは喚くだけだ。

幸い、ユーリは腕を伸ばせば引っ張りあげられる程度の場所にいる。駄目もとで治癒系魔導を使って彼女が目を覚ましたら、道案内を頼んで外に出よう。

ルキアルレスはもう放っておく。

運が良かったら彼もそのうち出てくるだろうし、何だか十分酷い目に遭っているようなのでこちらの留飲も下がった。

(治癒系魔導は苦手だが、『始まりの叡智』に治癒系魔導が載っていたはず……)

魔導陣は書かずに詠唱だけでおそらくどうにかなるだろう。

(待てよ)

そういえば、あの鳥籠の中で使った魔導は確か『始まりの叡智』に記されていた魔導だ。

(何か、関係がある……)

「っと!!」

ユーリに宥められてから全く動かない木の根を警戒しながら、アヴィリスはユーリを地表に引っ張り出した。

(こいつもこいつで、色々聞きたい事はあるが……)

巻き込んでしまった負い目もある。表面には出さないが、魔導師に追い駆け回されたりして怖い思いもしているだろう。

「とりあえず、起きてもらわないといけないな」

穴から離れてユーリをかううじて残っている緑の絨毯に横たえた。

ふと、アヴィリスは穴のほうからルキアルレスの喚き声がしなくなつた事に気づく。

「どうしたんだ？」

喚き疲れて泣いているのだろうか？
そんな事を半ば本気で考えながら立ち上がる。
その瞬間、地面が揺れた。

……ゴゴゴゴツゴゴゴゴツゴツ

「な、何だ!？」

(この揺れ、魔力を帯びている!!)
ユーリを庇うように覆いかぶさったアヴィリスは、足を踏ん張って
魔力が濃い方を振り返る。

魔力はルキアルレスがいる穴から湧き上がっている。

「まさか!！」

ルキアルレスが自棄になって何かの魔導を使ったのだろうか？

(いや、それにしてもルキアルレスの魔力は感じない……)
そう考えていると、そのご本人の壮絶な悲鳴が聞こえた。絹を引き
裂くような悲鳴はエイリーだろう。

「な……。何が、起こっているんだ？」

嫌な予感がする。

予想外な事が起こる王立学院図書館ワンダーランドの中、残念なことに嫌な予感だ
けは外れてくれない。

……………ドッカーンッ

穴から大量の土と土ぼこりが舞い上がり、パラパラと降ってくる。
土ぼこりに交って緑色の巨大な物体が立ち上がるのが見えた。

「何だ、あれは……」

穴の中から、緑色の巨人が出て来た。

丸い苔を人形になるように積み重ねて、目と口の部分だけ穴をあけ

て作ったかのように不格好な姿だが、とにかくデカかった。

あゝ、おゝ……

巨人が呻き声に似た雄叫びをあげる。

どしーん、どしーんと地響きを立てながら緑の巨人は動き出した。

「……………」

心底疲れ切った様子でアヴィリスは肩を落とす。

色々ツツコミ所が多すぎて、言葉にならない。

「もう、何が、何やら」

はははと乾いた笑いを洩らしながら、アヴィリスは遠い目をした。

セオリー通りだとすれば、あの巨人は間違いなく自分に攻撃を仕掛けて来る。

例え、巨人の肩や頭の上にルキアルレスとエイリーが乗っていても

あゝ、…… おおおおお

巨人の緑色の腕が地面に突き刺さっていた石柱に絡みつく。

低い地響きと共に、土を纏わりつかせながら巨大な石柱が地面から離れる。

「げっ!?!」

アヴィリスは咄嗟に『始まりの叡智』に記された魔導陣を使って防壁^{ルド}を作る。

(魔導が使える? しかも、疲労感もない!!)

アヴィリスが疑問に思うより先に、防壁に石柱が投げ付けられた。

「うわっ!?!」

石が碎ける音と、その衝撃にアヴィリスは身を低くして耐えた。

バラバラに碎け散った石柱のなれの果てと、わずかにヒビが入った防壁を見たアヴィリスの顔が引き攣る。

「魔導の防壁を、こんなにあっさり傷つけるか……」

(おそらく、あれも魔導……。あの苔人形みたいな巨人は多分石柱を強化する魔導を使って攻撃してきたのか……)

苔人形の巨人もおそらく魔導で作られたものだろう。

「厄介な……」

舌打ちと共にナイフを構えるアヴィリスの顔は緊迫していた。

こちららも魔導が使えるらしい事はわかったが、ここで使える魔導がいまだにわからない以上、確実に魔導攻撃を仕掛けて来るであろう巨人に対して出来る手段は限られている。

その上、ここではまともに隠れる場所も出口もない。

唯一逃げ道を知っていそうな司書ユリは気を失って倒れている。

(とにかく、防戦。多分防御系の魔導は使えるから、どうにかしてあの巨人の気を逸らせて隠れて、その隙にユリーの治癒と回復をすればいい……)

ユリーが目覚めたら、逃げる。

「さて、どうやってあの巨人の気を逸らせるか、だな」

27Pそして、夜は明ける

アヴィリスの作った障壁が雷を纏うギロチンに切断されて霧散する。
ゴオオオオツ

障壁を切断したのは、不格好ながらどこかひょうきんな姿形の緑色の巨人。

ギロチンの刃をかるうじて避けたアヴィリスは土煙の中から転がり出た。

「ちっ！！」

ナイフを片手にアヴィリスは立ち上がる。

「『其は静寂の主にして、空・水・火・地全てに属さぬ者達の主であり、其もまた理ことわりの中にあり、故に其は我が声に応えるだろう！！』」

「

『始まりの叡智』に記された魔導陣をナイフで地面に刻みつける。

「『我が力を受けて目覚めよ、静寂の王よ。この災いを退け、鎮めよ……』」

魔導陣が輝き、意味を成す。

魔導陣からあふれた光が巨人の足下で巨人を囲う様に円を描く。

…ドンッ

光が巨人を覆うほどの壁になる。

おおおおっ

防御系の魔導の応用で、災いを退ける壁で敵を囲い込んだのだ。

「足止めになってくれよ!!」
アヴィリスは背後を気に掛けながら、いまだに目を覚まさないユーリに駆け寄る。
結界の魔導陣の中でユーリはアヴィリスの上衣を被せられて眠っている。
ルキアルレスの魔導攻撃を受けたせいで、どんな騒音にも地響きにも彼女はピクリとも反応しない。

(あの雷系の魔導。あまり強くはなかったようだが、魔導に耐性のない体にはかなり負担になっている)

魔導とは魔力という世界の根幹にも関わる神秘の力を実体化させるもの。

魔力自体は自然物・人工物に関わらず全ての物に宿っているが、魔導を帯びた魔力は一種独特の波長とでもいうのか、一定の影響を人体に与える。

魔導師は自身の高い魔力量で自衛できるうえに、魔導に関わるうちに徐々に耐性が出来るために危険はない。

けれど、魔導に関わる事のない人や魔力が低い人間、動物にはその影響は有害で、長時間受け続けると心身に悪影響を及ぼし、酷いと廃人になる事もある。

魔導にそうした危険があるために一般人への魔導での攻撃は禁じられている。

その禁忌をルキアルレスは見事に破りやがった。

魔導に対する耐性のないユーリが、宮廷魔導師(一応)の攻撃を受けて無事であるわけがない。

アヴィリスは満身創痍の体に鞭打って『始まりの叡智』に記された

治癒魔導のページを開く。

「『生命の息吹よ、祝福よ。汝、生命の再生を齎すもの達よ。我が力を糧に集い、従い、この者を癒せ』」

『始まりの叡智』に記された治癒魔導陣がふわりと優しく輝く。詠唱を受けた魔導陣の光がユーリを取り巻き、包み込む。

……ドゥーン!!ドゥンツ!!…ドツカーンツ

「っ!?! もう出て来たのか!?!」

おおおおお、あああああ

アヴィリスの声に応えるように巨人が大きく両腕をあげて高らかに雄叫びをあげた。

雄叫びは風を纏い、アヴィリスとユーリに襲いかかる。

咄嗟にユーリを庇って立ちはだかったアヴィリスは巨大な巨人を睨みつける。

(こいつからしばらく離れないと)

アヴィリスは光に包まれているユーリを見下ろす。

光が飛び散るまでユーリの治療は終わらないから、時間を稼がないといけない。

「いい気になるなよ、このデカブツ!」
アヴィリスがナイフ片手に不敵に笑んだ。

お、ああ

巨人は壊れたギロチンを離し、三日月のような鎌の刃を握る。

その鎌の刃は巨人に掴まれた途端、緑色の炎を帯びた。

「其は闇より出で、闇に従う！！ 闇の理の下、この災いに闇の祝福を！！」

巨人が振りかぶって鎌の刃を投げると、アヴィリスの前に漆黒の壁が出来上がるのはほぼ同時だった。

壁に当たった鎌の刃が吸い込まれるように消える。

ああ、おお〜

「っ！？」

突然、足下から石柱が飛び出した。

避ける間もなくアヴィリスは石柱に殴られ、倒れる。

「うあっ」

地面に叩きつけられた衝撃に頭が揺れる。

おお〜っ

蹲ったアヴィリスめがけて石柱が投げつけられた。

ドオンッ

「っ、ぐっ！！」

もうもうとあがる土煙の中から這い出たアヴィリスは霞む視界を必死で繋ぎ合わせる。

「くそっ！！」

アヴィリスは口の中の鉄錆びた味のする唾を吐きだしてうめく。

巨人の攻撃とこの部屋にもともと備わっていたのであるう罨がアヴィリスを苦しめる。

しかも、どうやらあの巨人はこの部屋の罨を操っているようだ。

奴の攻撃を防ぐと罨が動いてアヴィリスに襲いかかる。

(どうにかして奴の注意を別に持っていかないと、俺の魔力が尽きたらユーリが目覚めない)

一応ここも図書館の敷地内だから魔導封じの影響を受けているからだろう。魔導が使えても、魔力の消費が激しい。それに、攻撃系の魔導は一切使えない。

せいぜい防御、加護、治癒系の魔導だけでどうにか巨人の攻撃をしのいでいるだけだ。

このままではアヴィリスの魔力がユーリが目覚める前に尽きてしまう。

(そうになったら……)

魔導もなしにこの巨人を相手どる事になる。

いつ覚めるともわからないユーリの目覚めを待ちながら……。

「は、ははははっ！！ いい様だな！！アヴィリス！！」

突然、巨人のほうからルキアルレスの声が聞こえた。

見ると巨人の肩にルキアルレスとエイリーが座っている。

「あ」

巨人の事でいっぱいいっばいで忘れていたが、そういえば、ルキアルレスが巨人に引つかかっていた。

「生きていたんだな」

しぶといな、と、うっかり見つけた家庭内害虫に吐き捨てるような声色でアヴィリスは呟く。

ルキアルレスはさっきまで泣きべそをかいていた事も忘れた様に勝ち誇った笑みを浮かべてアヴィリスを見下ろす。

「さあ、巨人よ！！ あの『墮落した蛇』を捻り潰せ！！」

王者の様にルキアルレスが命令する。

その姿をアヴィリスは胡乱な目で見つめた。

「おい、そこであまり騒がない方が身のためだぞ」

アヴィリスの予想が正しいならば、その巨人はこの番人のようなものだろう。

つまり、この罫でルキアルレス達を苦しめていた張本人（？）であるはずだ。

その巨人はルキアルレスの声に反応して、ぴたりと動きを止めている。

高らかにアヴィリスを嘲弄するルキアルレスの方をじっと巨人が見ている。

ざわっ

魔力のざわめきに気づいたアヴィリスは咄嗟にユーリの下に走り寄り、結界を張った。

オオオオオオオオツッ！！アアアアアアッ！！

巨人が雄叫びと共に体を震わせる。

「うっ」

魔力を帯びた“音”という衝撃波を受けた結界が軋む。

巨人から離れているアヴィリス達でさえ耐えるので精一杯な衝撃を間近で受けるとどうなるか？

「ルキアルレスー！！」

巨人の肩から彼とエイリーが滑り落ちる。

幸か不幸か、二人は柔らかな草の上に落ちた。

かなりの高さから落ちたにも関わらず、二人は無事らしい。

あああっ、おおおっ

吹き飛ばされた二人に向かって巨人が突進する。

「まずい、……っ」

ルキアルレスとエイリーが高らかに悲鳴をあげて、わたわたとおぼつかない足取りで逃げようと動く。

けれど、明らかに巨人のほうが早い。

何とかしてやりたいが、アヴィリスは先ほどの結界でほとんど力を使い果たしている。

ルキアルレスとエイリーに巨人の影が覆いかぶさる。

アヴィリスはがつくりとその場に膝をつき、目を閉じた。

巨人を見上げるルキアルレスとエイリーの顔が恐怖に歪み、悲鳴が木霊する。

巨人が足を振り下ろす、その瞬間。

「どうか、静かに

どうか、祈りを

炎は永遠とわに燃えはしない

闇は永遠とわに続きはしない

焼けた地からもいのちは生まれる

闇の中であるからこそ光は生える

ああ、どうか、怒りを鎮めて

ああ、どうか、共に嘆こう

失われしいのちは戻らずとも

我ら、そのいのち忘れない

語り継ごう、全てを、永遠に、永遠に」

静かな、旋律が響いた。
アヴィリスが顔をあげる。
巨人がぴたりと動作を止めていた。

「ユーリー!!」

アヴィリスが振り返ると、彼の上衣を羽織ったユーリが弱弱しく微笑んだ。

「ありがとう。アヴィリスさん」

ほっと息をついたアヴィリスは、立ち上がるうとするユーリに手を貸した。

その二人の上に巨大な影が落ちる。

見上げると巨人が覆いかぶさるようにユーリとアヴィリスを見下ろしていた。

「!?!」

「もう、やめて。気はすんでいるはずでしょう?」

思わず身構えたアヴィリスをよそに、ユーリは巨人を見上げて言う。

<大丈夫?>

<もう、大丈夫なのか?>

ざわり、ざわりと風が騒ぐ音にユーリを気遣う言葉をアヴィリスは聞いた。

「もう大丈夫だよ。元に戻って」

ふっと微笑んだユーリが緑の巨人に触れる。

静かになった巨人はすつとルキアルレスとエイリーに向かって腕を

向けた。

その腕の先から丈夫そうな蔦が伸び、気を失った二人を拘束する。それを見届けた巨人がゆっくりとユーリから離れて行く。

ユーリに背を向けて歩く巨人の体から緑の光が零れ落ち、巨人を包みこむ。

あまりの光に目を覆った瞬間、光が弾け、突風が巻き起こった。

「あ」

目を開けると、青い空と緑の草原が広がるのどかな光景が広がっていた。

驚いてアヴィリスがユーリを見下ろす。

「帰ろっか」

ユーリはほっと安堵した顔でアヴィリスを見上げた。

先ほどの殺伐とした光景はどこへ行ったのか、のどかな風景を見ていると何だか考えるのが馬鹿馬鹿しくなってくる。

アヴィリスは溜息のようにただ一言、

「ああ」

頷いて、ユーリの背中に従った。

「っ、とー!!」

王立学院図書館の正面玄関、向かい合う鷲と一角獣が来訪者を見下ろす像のちょうど真ん中にユーリは舞い降りた。

鷲の銅像の足下から出て来た彼女は後ろを振り返る。

すると、鷲の銅像の足下の扉からアヴィリスが出てくる。

「やっと着いたか」

溜息をついたアヴィリスにユーリが苦笑する。

「すっかり朝になっちゃったしね」

柔らかい目覚めたばかりの朝日を浴びて、王立学院図書館の前庭が朝露と共に光る。

清々しい空気と静かな風景にほっと息をついていたユーリは、険しい顔で前を見つめるアヴイリスに気付いた。

王立学院図書館の正門前に金の縁取りをされた白いローブを纏う一団と濃緑の制服を纏った一団が並んでいる。

「チューリの自警団!？」

濃緑を基調にした騎士服を模した制服はチューリの治安維持を担当する自警団のものだ。

しかし、いかにも魔導師らしい白いローブの一団は知らない。

「<克蘭>の断罪人?^{ジャッジメン}」

アヴイリスが白い一団を見て言う。

「何それ？」

「罪を犯した魔導師を拘束・処罰する魔導師だ」

「そんな人達が何でここに？」

「わたしが呼んだんですよお」
「少しばかり間延びした特徴的な喋り方と声が図書館の入り口から響いた。」

「エリアーゼ館長!！」
驚いて振り返ったユーリに、エリアーゼ館長はにこりと微笑みかけた。

「ユーリさん。無事でしたか？」
「ど、どうして館長がここに！？ 帰るのは明日だって言ってませんでしたか？」

にこつと微笑んだエリアーゼにユーリは面白いほど狼狽える。
魔導師相手に一歩も引かなかったユーリの狼狽えっぷりにアヴィリスは目を丸くしてユーリを見下ろす。

「図書館が燃えたと聞いて、大慌てで帰って来たんですよ」

エリアーゼはにこにここと聖母のような笑みを浮かべている。
しかし、ユーリにはその笑顔が悪魔の微笑みに見えた。

(目の奥が笑ってない！！ 口元が引き攣ってる！！)

つまり、エリアーゼはもうすべて知っているのだ。

炎を消す為に【語られてはいけない歌】を使った事や、『禁制魔導書』達の助力を請うた事、その後起こった『咎の隠し部屋』での『禁制魔導書』達の暴走も。

一方、アヴィリスはあわあわと動揺するユーリをまじまじと見つめて、感心したようにエリアーゼを見上げた。

ふと、そのエリアーゼの後ろ、図書館の回転ドアから白いロープの断罪人と緑の制服を纏った自警団員がぞろぞろと出て来る。

「アイギス」

両手を魔導を封じる魔道具で拘束され、白いロープを纏った魔導師二人に両脇を固められたかつての弟子の名を呼ぶ。

アイギスはアヴィリスを見ようとせずに顔を伏せ、ただ断罪人に従

つてアヴィリスの横を通り過ぎた。

アヴィリスがアイギスに何を思ったのか、逆にアイギスがアヴィリスに何を思ったのか。

わかり合えなかった兄弟弟子は互いに思いを打ち明けられないまま、最悪の形での決別を迎えた。

一方、

「離せ！！ 離せ！！ 私は何も悪くない！！ 悪いのは魔導師たちだけじゃないか！！」

自警団員に両脇を固められた副館長が拘束された両腕を振りながら、暴れている。

「往生際が悪いですわねえ」

ふう、と悩ましげに溜息をついたのはエリアーゼ館長。

傍目には、駄々を捏ねる子供を見下ろす母のような優しげな風貌だが、

(うわっ、めっちゃ怒ってる！！ かなりイラッとしてる！！)

ユーリはエリアーゼの声に震えあがった。

「ユーリ！！ 証言しろ！！ 私は何も悪くないんだ！！」

はなせえええええ、と喚く副館長をよそに、自警団員は慣れた様子で副館長を連れていく。

緊迫感も哀愁もへったくれもないどうしようもない様子にユーリとエリアーゼが同時に溜息をついた。

「あ、ルキアルレスとエイリーがまだ図書館の中に！！」

アイギスと副館長を見たユーリは残り二人の共犯者を思い出す。

巨人が消えた後、彼らは『咎の隠し部屋』からいなくなっていたのだ。

「ああ、その二人はもう、そこにいますわよお？」
エリアーゼ館長が指差した先には、白いローブの魔導師がルキアルレスを、自警団員がエイリーを抱えて運んでいる姿があった。

「二人は、あなた達より先にこの門の前に気を失って転がってしましたよお」

エリアーゼの言葉にユーリはほっと息をつく。

白いローブの魔導師たちの長なのだろう、鎌を模した杖を持った長身の男がアヴィリスの前に進み出た。

「アヴィリス・ツヴァイネルーロウ・スフォルツィア殿。事情確認のために御同行願いたい」

「わかった」

アヴィリスは頷くと、彼らの後続く。

「あ、アヴィリスさん！！ これ！！」

アヴィリスの背中を見送っていたユーリは、門の前でアヴィリスを呼びとめる。

ユーリが手にしていたのは、エンブレム オミコレットの紋章とお守り。

「色々、世話になった」

アヴィリスはふつと口元を緩めてユーリに向き合つ。

「……大変だったのは、認めますけど……」

アヴィリスの手に紋章とお守りを乗せたユーリはにこりと微笑みかけた。

「また、王立学院図書館に来て下さい。次はちゃんとこの本を
読んで下さいね」

アヴィリスはふつと目を丸くしてユーリを見下ろす。

「ああ、そういえば、ここの図書カードを作ったな」
おかしそうに微笑んだアヴィリスはお守りをユーリに掴ませた。

「持っている。この図書館でどれほど効果があるかわからんがな」

「え？ あの!？」

アヴィリスはユーリの狼狽をよそに断罪人達と共に馬車に乗り込んだ。

「また来る」

アヴィリスは不敵な笑顔を浮かべてユーリに手を振った。
ドアが閉まると同時に馬車は走り出す。

「約束!! 守ってくださいよっ!!」

ユーリの声が届いたか、どうか。

馬車は朝もやの中に消えて行く。

「さて、ユーリさん」

静かになった前庭に、ぴんつと糸が張るような緊張感が舞い降りた。
肩を震わせたユーリは錆ついたブリキ人形のようにゆっくりと後ろを振り返る。

につこりと聖母の様に微笑むエリアーゼ館長が魔王……いや魔界の女帝に見えた。

「きっちり、説明していただきましょうか」

エリアーゼの手の中で、焼けてしまった本の表紙がへし折れた。
その姿を見て、ユーリは言い訳も説得も無駄な事を悟る。

(あたしは被害者なのにいいいい!!)

ユーリの悲鳴は誰にも届かずに消えることになる。
(確定)

エピソード・幕を一度下そう

<ふむふむ、『宮廷魔導師の暴走！嫉妬の炎が大炎上！！』とな
？>

「だから、何でゴシップ雑誌のほうを読むかな？」

ユーリはうつちやられている真面目な新聞を拾い上げ、溜息をつく。
今日もユーリは『禁制魔導書』階に来ていた。

アヴィリス達が去ってから早二週間。

魔導書のページの暴走で壊れた修繕室やルキアルレスの炎で焼けて
しまった資料階の本や備品の修理や入れ替えが急ピッチで行われて
いる。

修繕室は大幅な改修工事のため、修繕業務は別の部屋で代行されて
いる。

ロランは使い勝手の悪い部屋のせいで不満たらたらだ。

一方、ルキアルレスに焼かれた資料階は備品や天井や床が焼けたく
らいで、本や本棚にそれほど被害はなかった。

もちろん、エイリーに炎の中に落とされてしまった本は戻ってこな
いため、買い替えたりしたが、資料階はほぼ通常利用がされている。
ユーリは拾い上げた新聞に目を通す。

実行犯の魔導師二人と共犯になつた司書二人の結末が知りたい。と
『禁制魔導書』達が騒いだためにユーリはこのところずっと新聞や
雑誌の配達係をしている。

しかし、『禁制魔導書』達が好きなのは話題性とバラエティにだけ
は富んでいる風刺雑誌のようで、いまも魔導師導師の確執や貴族魔
導師たちへの批評を読み上げては笑っている。

真面目な新聞によると、ルキアルレスは魔導師資格の剥奪、それに
よって宮廷魔導師の地位も追われたいらしい。実際に王立学院図書館

を焼き、一般市民に魔導で攻撃した事が要になったようだ。
アイギス魔導師はネルーロウ魔導師から破門を言い渡され、<クラ
ン>から一級危険魔導師指定をされたらしい。これは魔導師として
生きる人間には相当の痛手だ。

魔導師としての地位を剥奪されたのに等しい処分らしい。

一方、共犯者である副館長は副館長の地位の剥奪と約半年間の拘留
処分、エイリーも器物損壊容疑で逮捕一年の留置処分となった。

それよりも、市民の目を引いたのは四人が背負うことになった賠償
請求金額だろう。

<十三億七千九百万ソール……>

<払えるか？これ>

<一応貴族が四人そろってるんだらう？>

<払わされる家族が不憫さね>

エイリーが燃やした本の中はかなり希少な凶鑑や本が交っていたせ
いで、彼らは莫大な賠償請求をされる事になったようです。

『大事にしよう。図書館の本！！』

新聞の小さな文字をユーリは苦笑気味に読む。

<時にユーリや。こんな所で油売ってても大丈夫なのか？>

<エリアーゼのお仕置き、もう終わったのか？>

「な、何とかね……」

げっそりした面持ちでユーリは頂垂れる。

アヴィリスが去った後、エリアーゼ館長の事情聴取という名のお説
教をがつつり喰らい、また罰として隠し部屋の掃除を課せられてし
まった。

何万もあるだろう隠し部屋の全ての掃除をしないといけないのか、
と最初は気が遠くなったが、エリアーゼの怒り顔が怖くて文句ひと

つ言えなかった。

お許しが出たのは昨日の事、罰掃除から解放されたユーリも肩の荷が下りた気分だ。

<そういえば、事の発端のアヴィリス魔導師はどうした？>

「さあ？ 新聞にも載ってないし」

<何だ、ユーリ。連絡先も知らないのか？>

「何でそんなもん知らなきゃなんないのさ」

<そりゃあ、面白いから>

<またあの魔導師と魔導対決してみたいねえ>

「あんた達、あの後あたしと一緒にエリアーゼ館長に怒られたよね？ まだ懲りてないの？」

魔力を爆発させて、緑の巨人を作りだし、暴走させた『禁制魔導書』達ももれなくお仕置きを受けたはずだ。

しかし、魔導書達はどこ吹く風。

<何、エリアーゼにバレン様にするさ>

「まったく」

やいのやいのと騒ぐ魔導書達を呆れた様に見回したユーリは暖炉の始末をして家に戻る。

「で、何であんたがここにいるかなあ？」

ユーリは自宅がある王立学院図書館最上階の芝生庭園で伸びている美丈夫に胡乱な視線を送る。

藍色の髪にシャツとスラックスという市民のような質素な衣装を纏

っているが、その美貌は隠しようがない。

「疲れた」

げっそりした顔でアヴィリス・ツヴァイ＝ネルーロウ・スフォルツ
イアが溜息をつく。

「どうやってここに来たの？」

「お守りの魔力を辿った」

「あ」

ユーリの脳裏にログハウスのドアに適当に吊り下げている木彫りの
お守りを思い出す。

『禁制魔導書』達の入れ知恵で、侵入者撃退効果を上げてもらって
簡易防犯装置として再出発してもらっている。

あのお守りが逆に侵入者の道しるべになるとは思わなかった。

帰ったら外そうと考えていたユーリの足下でアヴィリスが大儀そう
に体を起こす。

「……しかし、本当にここは図書館なのか？ ドアを開けたら洞窟
だわ砂漠だわ……」

げんなりとした顔で顔を青褪めさせるアヴィリスは、本当にここま
で来るのに苦労したらしい。

「お、お茶でも飲む？」

「飲む」

美貌の宮廷魔導師のぐったり具合があまりに不憫で、ユーリは噴水
庭園にお茶の用意をする。

水が遊ぶ涼しげな音を聞きながら、小さな東屋に用意したお茶をア
ヴィリスはありがたそうに飲み干す。

朝から飲まず食わずで、ここまで来るのに頑張っていたらしい。

「あの後、どうなったの？」

一息ついたアヴィリスに問うと、真面目な顔でポツリポツリと自分

とあの四人の近況を彼は語った。

ほとんど新聞に書いてあったことと相違ないらしく、付け加えるならば、ルキアルレスとアイギスが王都から去った事。

莫大な賠償請求は四人で分割して払うことになったらしいが、その賠償金額の割合で彼らもめた事が語られた。

アヴィリスはその後、事情聴取や事後処理などで<クラン>に逗留していたり、王都でも色々忙しかったりして、やっと少し時間がとれてここに来たらしい。

それは、まあ、いいとして。

「何でわざわざここまで来たの？」

「自力でここまで来れるか、試したかったから」

「しれつと言いつ返したアヴィリスにユーリは肩を落とす。

「死ぬよ？ そんな風に自分の力試しした魔導師を何人も助け出しに行った事があるんだけど……」

過去現在何度も繰り返されて来たメビウスの輪を思い出したユーリはげんなりと忠告する。

「未知への探求心を忘れては魔導師がすたる」

「すたつていいから、あたしの苦勞を減らして！！　あたしが一年に何人魔導師を救助しに行くと思ってるの！？」

ユーリが思わず頭を抱えると、アヴィリスがさもおかしそうに笑った。

「それがお前の仕事なんだから？　頑張れ、王立学院図書館司書」

「笑い事じゃないんだってば！！」

ばんばんとユーリが東屋のテーブルを叩く。

テーブルの上にはアヴィリスがお礼の品として持って来たお茶道具ティー・セット一式と王都で有名な菓子屋のケーキが乗っている。

(いやいや、苦勞してもらつぞ。ユーリ・トレス・マルグリット)
この王立学院図書館は魔導師であるアヴィリスにとって、異世界^{らくえん}。
アヴィリスはここで己の脆弱さを、小ささを知った。

(世界はこんなに広い。未知の知識がここには溢れている)
魔導がとても緻密に織り込まれて出来上がったここは魔導師の知識
欲と探求心を否が応でも擽る。

魔導師として、アヴィリスはここを知りたい。
久しく忘れていた未知への探求心と好奇心が湧きあがり、体と心を
潤す。

この王立学院図書館中に綿密に織り込まれ、編み出された魔導の秘
密。

ユーリが奏でる【歌】の謎もいつか解き明かす。

禁忌を恐れては魔導師ではない。

禁忌を越えて正道を導き出して見せる。

(楽しみだな)

アヴィリスはユーリに気付かれないうつ、お茶を飲むふりで含み笑
った。

魔導師ではないユーリは気づかない。

アヴィリスが送ったお茶道具一式に魔導の楔が記されている事に。
その魔導はアヴィリスを確実にここへ導く道しるべ。

二人は気づかない。

二人は知らない。

この不思議な出会いが、

この奇妙な関わりが、

世界の真実を、
世界の虚構を、

覆し、飲み込む、

巨大なうねりを呼ぶ大いなる出会いであった事に。

ユーリとアヴィリスの奇妙なお茶会は始まったばかり。
クレイジー・ティーパーティー

エピローグ・幕を一度下そう（後書き）

いままで読んで下さった方々、本当にありがとうございます。
最後のほう、長文になって読みにくかったかもしれませんが、コレ
が作者の精一杯です。

今回の『迷子の魔導書と王都の魔導師』はこれにて完結です。

もしかしたら、シリーズ化しようか。とかいう無謀な妄想をしつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5970s/>

迷子の魔導書と王都の魔導師

2011年8月19日16時31分発行